もう1人の陽だまりの親友

黒雪兎

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

これはもう1人の陽だまりの親友のお話

目次

第1話 1
第2話 8
第3話 13
第4話 23
第5話 29
第6話 39
第7話 43
第8話 49
第9話 57
第10話 65
第11話 75
第12話 83
第13話 89
第14話 102
第15話 114
第16話 129
第17話 143
第18話 156
第19話 166
第20話 180
第21話 192
第22話 202

第1話

夢を見た。
まだ小学生ぐらいの背丈の男の子と2人の女の子が夕暮れの道で何かを話している。
「ねぇ、――――ちゃん、――――――――くん」
2人の後ろを歩いていた女の子に、――と呼ばれた女の子と――――と呼ばれた男の子が同時に振り向く。
「んー？」
「どうしたの？――ちゃん？」
キョトンとした顔の2人に、――と呼ばれた女の子は、えっとね、と言い言葉を繋げる。
「ふたりは、ずっと、わたしの――――でいてくれる？」
「うん！ずっと――――だよ！」
――くんそうでしょ？と――が――の片方の手を握りながら言う。
「そうだね。おたがいにおじいちゃんとおばあちゃんになっても、ずっとさ。ぜったいに、ぜったい！」
――も――の空いてる手を握り、そう力強くそう言った。
「うん・・・ありがとうふたりとも」
ふにゃりと笑い、2人の手を握り返す。
そうして、夕方の町を手を繋ぎながら歩く。
その後ろ姿を見ていると急に視界がグラグラと揺れだし、次の瞬間、真っ暗になった。

「あだっ!?」
体に痛みが走るのと同時に目を覚ます。

なんだなんだ!?と驚いて周りを見渡せば、どうもベットから盛大に落ちたようだ。
（・・・何か見てたような気がするけど・・・まぁいいや、とりあえずシャワーでも浴びるか）
と一緒に落ちた布団を戻しながらそう思案し、シャワーの準備をする。

・・・・・・・・

「はぁー、さっぱりしたー」
ブオーンとドライヤーで濡れた髪を乾かしながら、朝ごはんなに食べようかな?と思案していると、ふと鏡を見ると自分の体が目に入る。
髪は黒い色で身長は大体中学生の平均より少し上の方、そして何より目を引くの母譲りの、赤い目。
それと目が合うと、サッと逸らし、ドライヤーを片付ける。
「・・・・・よし、乾いた」
朝ごはんはコーンフレークに決めると、台所に向かう。

・・・・・

・
・

「ガスの元栓ヨシ、窓も全部ヨシっと・・・それじゃ、行ってきます」
人の居ない玄関で形ばかりの行ってきますをし、家を出て鍵をかける。
季節は秋、吹き抜ける風は少し冷たく、辺りには枯葉が落ちている。
「っ・・・、寒っ」
少しばかり古くなってきたマフラーを口元まで寄せながらそう呟いていると、後ろから、おーい、と声をかけられる。
足を止めて振り返る。
「おはよう、誠(せい)くん」
「おはよ、未来(みく)」
タッタッタと隣の家からこちらに駆け寄る制服に身を包んだ女の子。
名前は小日向未来(こひなたみく)、小学生からの付き合いだ。
そして、挨拶をすればお互いに今日のある事について話し出す。
「今日は・・・ついにあの日だね」
「あぁ・・・ついに、だな」
「「ツヴァイウイングの抽選会!」」
ニッと互いに笑い、歩き出す。
――――――ツヴァイウイングとは、今絶賛話題の女性ボーカルユニットで、聞いた話によれば、年は自分たちとはそんなに変わらないトカ。
「今日の夕方からだっけか、当たるかな?」
「私の場合、響(ひびき)の分もあるから尚のこと当たるか心配だよ」
「そういや、そうだったな」
「これを機会にファンになってくれるといいんだけどね」
「だなー」
なんて会話しながら歩いていると、とある家の前に1人の女の子が眠たそうな顔をしながら待っていた。

こちらに気がつくとパァと眠気がふっ飛んだのかブンブンと腕を上げる。
名前は立花響（たちばなひびき）、こちらも小学校からの付き合いだ。
「2人とも、おはよー！」
「おはよう響」
「さっきまで眠たそうなのに、相変わらず未来に会うと元気になるなよ響は？」
「だってさ、未来は私たちの陽だまりだよ？」
「成る程、それなら納得」
「それで納得するんだ・・・」
少しばかり困惑してる未来をスルーし、学校に向けて歩き出す。

・・・・・・・

「それじゃ未来、また後で」
「うん、また後でね」
未来とはクラスは違うため一旦別れ、俺たちは教室に入る。
おはよーさんと声をかければクラスメイト達が、おはよーと口々に返す。
「よっと・・・」
「あっ、・・・今日の授業は英語があったの!?」
隣の席に座った響がやっちゃった、と言った感じな声を出す。
「もしかして忘れたか？」

「そんなところ。はぁー、私ってば呪われてるかも・・・」
「そんな呪われてる響くんには、慈悲として英語の時に教科書を見せてあげよう」
「ありがたやー、ありがたやー」
崇めよー、なんて会話をしていると後ろからクラスメイトに声をかけられる。
ちょいちょいっと、教室の後ろの方に移動する。
「よー、黒然(くろしか)。また女子と登校かぁー？」
「そうだが？ふっ、羨しかろう！」
といえば、それに釣られたそいつとは別のクラスメイト達が乱入してくる。
「なにぃ!?そいつはめちゃ許せんよなー!?」
「女子と一緒に登校・・・両手に花とかギルティ案件だぁごらぁ!?」
「ヒャアッハー！天誅ー！」
「ふはは、どっからでもこぉーい！」
なんて馬鹿な会話をしていると、キーンコーンカーンコーンとチャイムが鳴り、先生が入ってくる。
「皆さん、おはようございます、それじゃＨＲを始めますよ」

・・・・・・・・・・

キーンコーンカーンコーン

「や、やっと終わったよー・・・」
「お疲れさん、響」
ぐでーと机に突っ伏し、頭から煙を出す響。
ほれほれ、帰りの支度しろー？と促していると、
「響ー、誠くん」
ガラリと扉が開けられ、未来が教室に入ってきた。
「よっ、未来」
「響は・・・煙だしてるね。どうしたの？」
「抜き打ちの小テストがダメだったみたい」
「そうだったんだ。・・・お疲れ様、響。ほら、一緒に帰ろ？」
「待ってて直ぐに支度するよ！」
「復活はえーな、オイ・・・」

・・・・・・・・・・

「それじゃ、また明日な（ね）響」
「うん、またねー、未来、せーくん」
響と別れた後の夕方の道を歩く。
さて、問題はここからだ。
「当たるといいな」
「だね。・・・あっ、そろそろ着くよ」
「んっ、それじゃ、お互いに当たる事を祈るか」
「うん。また後で」

「おう、また後で」
ガチャリと家の鍵を開け、靴を脱ぎ、自室に駆け出す。
そして、自室に入りパソコンを起動。
ドキドキと心臓が煩く鳴る。
届いたメールを確認する。
「・・・!!」
ピリリリと、携帯が鳴る。
携帯には小日向未来と表示される。
「・・・未来」
「・・・誠くん」
「あぁ・・・」
それだけでお互いに察し、すぅ、と同時に息を吸い

「「当選おめでとー!」」
声高らかに、お互いの当選を喜んだ。

第2話

さて、見事ツヴァイウイングのライブに当選した次の日の放課後、俺たちは自宅のリビングで学校の課題をささっと終わらせ、響を交えてのツヴァイウイングの音楽鑑賞をしていた。

因みに蛇足だが、ツヴァイウイングのライブは2週間後からだ。

「それにしても、ライブかー・・・実際にツヴァイウイングの2人が観れるのか」

「何時もは画面越しだから、なんだか夢見たいだね。・・・今夢から覚めて、起きたら自分のベットだったら心折れてる自信があるかも・・・」

「だなー・・・」

ここで夢から覚め、メールを確認し抽選に当たらなかった所を想像し・・・

「あっ、いかん、そんなんくらったら俺も暫く凹んでるわ」

可笑しいな、目からしょっぱいものが。

「そんな時こそ、へいき、へっちゃらだよ2人とも!!」

「「へっちゃらじゃない（よ）!?」」

「ですよねごめんなさい!?」

ビシッ!と未来と同時に指さし、その圧に思わず土下座する響。

閑話休題

そして現在、音楽鑑賞を終えた俺たちはリビングでまったりとしている。

「いやー、なんだかんだで寝そべりながら聴くのが楽だったねー」

「こらこら響、あまりぐだーってしないの。見えちゃうよ?」

いつの間にか持ち込んでいたモチモチクッション（響談）を枕にしながら、ぐだーと横になる響に未来が軽く注意する。

因みに蛇足だが、お互いそのまま来たので服は制服のまま、それはつまりどういう事かと言えば。

「別に寝そべるのは構わんが、お前に黒はひやぃ（痛い）、やへろひぶひ（響）、ほっへをふえるな（ほっぺをつねるな）、っ、すまんて、な?」

「・・・すけべ」
いかん、つい言ってしまった。
おかげでほっぺを抓られてしまった。
勿論、全力では無いので痛くは無いが心に響くよその言葉・・・いや、自業自得だけどさ。
一息いれるために空になったコップにオレンジジュースを注ぐ。
「せーくんってさ」
「うん？」
ゴクゴクとオレンジジュースを飲んでると、先程抓ってきた指をジッと見ていた響が一言。
「意外ともちもちしてるね」
「んぐっ!?」
それは俺が太っているということかー!?というツッコミはオレンジジュースでむせて言えず、しかも追い討ちをかけるように後ろで背中をさすってくれてる未来からも、そういえば最近お腹の辺りが・・・なんて言いながら腹をツンツンしてくる。
くっ、最近のツケがここできたか!?なんて内心思いつつ、
「えー、・・・こほん！そういや、そろそろ帰った方がいい時間じゃないか？」
無理やり話題をそらしつつ、壁に掛けてある時計に指を指す。
時刻は5時半、もう空は暗くなってきている。
「あれ？もうそんな時間？」
「本当だ、そろそろ帰らないと」
はい、片付けするよーと未来の掛け声により、テキパキとお菓子やジュースなどを片付けていく。
「小さい時は、菓子の箱を使ってよく工作したもんだ」
「だね。因みに私はロケットをつくりました」
「ほう、俺はロボットだったな、しかも、当時見てたヒーロー物のロボットだったな」
「ロボットかー・・・それは作ってなかったなー。でもでも、他にはーーーーー」

と響と菓子箱工作トークで盛り上がりつつ、お菓子の袋をゴミ箱に入れたり、使ったコップを水につけて置いておき、最後は2人の見送りのために玄関まで向かう。
「未来は隣の家だからいいとして、響は家まで送った方がいいか？」
「ううん、そこまでしてもらわなくても大丈夫だよ。それじゃ、せーくん。また明日」
「また明日ね、誠くん」
「おう、また明日な2人とも」
バタンとドアが閉められると、防犯のために鍵をかけ、夜ご飯を作るために台所に向かう。
「今日はどの辺を作ろうかな～、まぁ決まってなくても何とかなるさ～」
いぇい！と口ずさみつつ冷蔵庫を開けて中身を確認・・・んー、これならカレーかな？
手早く材料を取り出し、ちゃちゃっとカレーを作っていく。
「あーあ、早く2週間後になってくれないかなー。・・・あっそういえば、サイン色紙とか買ってなかったから明日辺りにでも買いに、いっ!?」
なんて呟いていると、指先に痛みが走る。
どうも指先を少し切ってしまったみたいで、指から血が流れる。
まぁ、この程度ならすぐに治るだろう。
実際、数秒経てば血が止まり、傷は瘡蓋になっていく。
「ほんと、何だろうなこの体質？ゲームやアニメのキャラじゃあるまいし・・・」
いつからだろうか？・・・多分物心付いた時には既に怪我をしても、すぐに傷は治ってた。
幼いながらに、どこかそれは他人と違うと認識してた俺はこの事は家族の他には誰にも伝えなかった。
「・・・そーいや、了姉は最近は帰ってきてないな」
鍋に蓋をしながら、ここにはいない家族の名前を呟いていると、ピピピと携帯が鳴る。

なんだなんだ?と携帯を手に取ると、櫻井了子(さくらいりょうこ)と表示されている。
手を軽く洗い、携帯を手に取る。
「もしもし、どしたの了姉?」
『あらー?用事はないと電話しちゃいけないかしら?』
「いや別にそういう訳じゃ・・・」
『なーんて、冗談よ。ほら?最近あまり家には帰れないじゃない?たまには義弟の声が聞きたくなるものよー?』
そんなものなの?と聞けばそんなものよーと帰ってきた。

電話の相手は櫻井了子、家族が居なくなった自分を引き取ってくれた、姉のような人で、職業は考古学者の自称できる女とのこと。
「そうそう、チケットはどうだった?」
「ふっふっふっ、なんと当たりましたー!」
『あらそうなの、おめでとう。1人で?それとも友達と行くのかしら?』
「友達2人と一緒に。あっ、そういえば今日は帰れそう?」
そう聞けば、今日どころか暫くは忙しくて帰れそうにないわー、との事。
『あーもう!たまには帰らせろぉー!自宅でゴロゴロさせろー!』
『さ、櫻井女史!?落ち着いて!?』
『あちゃー、五徹のツケがここできたか・・・』
などと電話の向こうはわちゃわちゃしだした。
というか今、
(なんかどっかで聞いたことある声が聞こえたような・・・?)
具体的にはテレビとかで、良く聞いたような・・・?
と、一頻りわちゃわちゃして満足したのか、声が次第に落ち着いてきた。
『ふぅ・・・・よし、落ち着いたわ!それじゃ、また暇なときに電話するわね!』
「えっ?あ、うん。帰れそうならまた連絡してね」
それじゃあね、と電話をきる。

まるで嵐のような人だが・・・まぁ、悪い人じゃいんだよな。
「・・・さてと、ライブまで後2週間かー。はぁ、待ちきれないなー」
まだ見ぬライブに胸を踊らせながら、食事の準備をする。
そして食事が終わると、外からバイクの音が聞こえ、それが自分の家に何か入れられる。
鍵を開け、ポストを確認、そこには封筒が入っていてる。
それを家まで持ち帰りドキドキしながら中身を確認する。
「・・・!よかったぁー・・・夢じゃなかった」
ぺたりと机に突っ伏すこと数秒、チケットを握り締め立ち上がり、自室に戻る。
それがまさか、地獄の片道キップとはつゆ知らず、この時の俺は、呑気にお気に入りの曲を口ずさんでいた。

第3話

そして時は2週間後のツヴァイウイングのライブの日まで進む。
現在の時刻は昼過ぎ、そろそろ会場に向かうために身支度を整える。
服装は灰色のパーカーにジーンズ、後は自分にとってのお守りである黒いペンダントを首にかける。
バックを手に取り、中に3人分の色紙とサインペンが入っているのを確認する。
(サイリウムは会場で買おうっと)
残りは財布や携帯などをバックに入れ、窓とガスの元栓を締めて家を出る。
集合は会場だが、未来と一緒に行こうかなと思い隣の家に向かう。
・
・
・
・
・
・
ピンポーンとチャイムを鳴らすと申し訳なさそうな顔をした未来が出てきた。
その表情に嫌な予感を感じつつとりあえず一緒に行けないか聞いてみる。
「今から会場行くけど未来も一緒に行かないか?」
「ごめんね誠くん、行けなくなったの」
「なん・・・だと・・・!?」
「うん、森岡のおばさんが怪我をして、お父さんが今から車出すって・・・」
「おっふ・・・」
この2週間、未来は本当に楽しみにしてたのにな・・・実際、俺も未来と見れなくて残念だ。

だが、身内の不幸なら仕方ない。
今回は不幸にもライブには行けなくなってしまったが、次のライブがあるなら次こそは一緒に行きたいものだ。
「・・・まぁ、そういう事なら仕方ないさ。未来の分まで、目一杯ライブを楽しんでくるさ」
「本当にごめんね。それじゃ代わりに響の事よろしくお願いね誠くん。約束だよ?」
「おう、約束されました。んじゃ、行ってくる」
「行ってらっしゃい。楽しんできてね」
じゃあなーと手を振り、目的の会場まで向かう。
その間に響と連絡を取る。
『もしもーし、どしたのせーくん?』
「悲報、未来は来れない模様」
『えー!?なんで?あんな楽しみにしてたのに?』
「あぁ、実はな――――」
と言うわけで未来の状態を伝える。
「――――と、言うわけだ」
『成る程・・・はぁー、私たちってば呪われてるのかな?』
「呪われて・・・ないといいな、うん」
続いて同時に、はぁー・・・とため息をつき、未来と一緒に見たかったな（ねー）と一緒に呟く。
俺の幸運はEなのかね・・・。

・
・・・・
・

バスと電車を乗り継いで行くこと数十分、ライブ会場にたどり着いた。
キョロキョロと辺りを見渡せば、同じくキョロキョロしてたであろ

う響と目が合う。
　タッタッタと小走りでお互いに駆け寄る。
「よっ響、待ったか？」
「ううん、こっちもさっき着いたばかりだよ・・・ねえ、未来は本当に来れないの？」
「残念ながら、本当に来れないみたいだ・・・まぁ、気持ちは分からんでもないが、来れないものは仕方ないさ」
「うん・・・そうだね、それじゃあ今日は未来の分まで楽しもうよ！お土産とかいっぱい買ってさ、未来にプレゼントしよ！」
　ニコニコと笑いながら響はそう言う
「もとよりそのつもりさ、お土産があるならアイツも喜ぶだろうしさ。それじゃあ、そうと決まれば先ずは並ぶか」
「うん！」
　そして俺たち2人は今日のライブの事や未来に買ってくお土産を考えながら、列に並ぶ。
　運命のライブまで後1時間。

　視点は変わり、ライブ会場の裏側。
　残り後1時間程で始まるライブに向け、最終調整に入ったスタッフたちがあっちこっちと駆け巡る。
　それを不安そうな顔で眺める青い髪の少女――――――このライブの主役の一人である風鳴翼（かざなりつばさ）は、はぁーと小さくため息を吐く。
　やっぱりこの時間は苦手だよ・・・と1人実感する。
「間が持たないっていうかさ。こういう開演するまでの時間が苦手な

んだよなー」
「奏・・・」
　後ろからトコトコと歩いてくるオレンジ色の髪の少女――――翼と同じく今回のライブの主役である天羽奏（あもうかなで）は翼の隣に座る。
「こちとらさっさと歌（暴れ）いたいってのに、そいつもままならない」
「うん、そうだね・・・」
（ん？）
　ここで翼の手が微妙に震えていることに奏は気がつく。
　この少女が震えているときは大抵緊張している時だ。
「もしかして翼、緊張とかしちゃったりしてる？」
「あ、当たり前でしょ、櫻井女史だって今日は大事だって言っていた訳だし・・・」
「翼は真面目が過ぎるねー。もうちょい肩の力を、こーくいっと落としてさ」
　背後に回り込み、素早く背中につーと人差し指を走らせる。
「ひゃぁ!?な、なにをするの奏・・・！」
「ははっ、悪い悪い」
　と笑う奏に、相変わらず奏は意地悪だ・・・と翼は小さく呟いた。
「奏、翼、２人ともここにいたか」
「司令・・・」
「こりゃまた弦十郎（げんじゅうろう）の旦那」
「わかってるとは思うが今日は「大事だって言いたいんだろ？分かってるって」ふっ、なら大丈夫だな」
　赤いスーツでこれまた赤い髪の男性、風鳴（かざなり）弦十郎（げんじゅうろう）は、ふっと笑い。
「なんせ今日のライブの結果に、人類の未来がかかってるって事をな」
　なんて、軽く言い放った。
・・・・・

ライブ会場の更に地下にある研究室。
ここでも上のスタッフに負けず劣らず職員達があっちこっちと駆け巡る。
手に持つタブレットで今日やる実験の確認をしつつ、職員に指示を出している独特な髪型の白衣を着た女性、櫻井了子はガラスの向こうにある、完全聖遺物と呼ばれるネフシュタンの鎧を見つめる。
操作しているタブレットには［Ｐｒｏｊｅｃｔ：Ｎ］と書かれており、今回の実験で完全聖遺物であるネフシュタンの鎧を起動・解析することが出来れば、人類が脅威に対抗できるカードがまた１つ増える。
「櫻井女史、起動実験の準備が完了しました」
「分かったわー。それじゃ指示があるまで待機しててね」
ピロロロロと白衣のポケットに入れていた携帯から連絡がくる。
このタイミングでかけてくる人は１人だけだ。
「はいはーい、こちら櫻井了子です。こちらの準備は完了よ、弦十郎君」
『分かった、直ぐに向かおう』
『ステージの上はあたしたちに任せてくれよ！』
上の方でグッと親指を立ててるであろう奏の姿を想像しつつ了子はエールを送る。
「ふふっ、頼もしいわねー。それじゃ頑張ってね２人とも」
ピッと通信を切りここでふと、そういえば誠も友達と来てるって言ってたわねと思い出し、仕事用の携帯ではなくプライベート用の携帯で、楽しんで来てねとメールを送る。

「んっ？」
会場に入った俺たちは売店でサイリウムと飲み物を買ってると、ピロリンと携帯にメールの着信音が鳴る。（因みに飲み物の持ち込みはＯＫだ）
未来からか？と思ったが連絡してきたのは了姉からだ。
「未来から？」
「いんや、家族から」
なんだなんだ？とメールを見れば『楽しんできてね』と書かれていた。
もちろんそのつもりなので、『もちろん、全力で楽しんでくるよ』と送り返して、会場に入る。
「おぉ・・・」
「わぁ・・・」
思わず２人同時に声を上げる。
あのステージでツヴァイウイングの２人が歌うんだろう。
「はぁ・・・遂にあのツヴァイウイングを生で見れる日が来ようとは・・・！響、ちょいほっぺをつねって。夢じゃないか確認する」
「じゃあ弱めで」
そう言い、響はぎゅーと左のほっぺを軽く抓る。
・・・うん、痛いし夢から覚めないのでこれは現実なんだと改めて認識する。
「・・・うん、良かったちゃんと現実だ。それじゃあ先ずは自分たちの座席に移動するか」
「だね、えっと私たちの座席っと・・・」
ドキドキと心臓が高鳴るのを感じつつ、座席を確保。
今のうちにサイリウムを取り出しておき、さっき買ったお茶を飲んで気持ちを落ち着ける。
・・・・だが落ち着かない、胸元のペンダントをぎゅっと握りながらキョロキョロと辺りを見回したり、サイリウムをクルクル回して気を紛らわす。

ヤバイ、緊張して震えてきた。
「さっきから落ち着かないねせーくん」
「これはあれですよ、武者震いというやつですよビッキー君」
「武者震いって・・・ほらほら、こういう時はへいき、へっちゃらって思いながら深呼吸すると落ち着けるよ？」
「すーはーすーはー・・・よし落ち着いた」
どんとこい！と意気込むが、始まるまで後１０分程だ。
このテンションのままだと確実にラスト行く前には燃え尽きそうだなと不思議とふわふわする頭でどこか他人事のような感覚でそう思考する。
だが、このふわふわとした高揚感が実に心地よい。
可笑しいなまだ始まってないんだけど、これがライブの魔力というやつなのだろうか？しかも響のこと未来から頼まれたのに、寧ろ俺の方が世話になってるような。
・・まぁ、それは兎も角として、
「はぁー・・・早く始まらないかねぇー・・・」
「せーくんさっきからそればっかだよー」
隣で響がそう言ってるが、この時の俺は聞く耳を持たず、まだかな？まだかな？と待っていた。
後に響は、まるで餌を待つ子犬みたいだったよー、と未来に語っていたそうな。
・・・響から見たら尻尾がブンブン振ってるように見えたのだろうか？

チラリと壁にかけてある時計を確認するともうすぐライブが始ま

る時間だ。
奏はよいしょっと立ち上がりぐいーと伸びをする。
「さーてと、難しい事は旦那や了子さんに任せてあたしらは・・・」
翼を見れば、まだ不安そうな表情で身震いしている体を抱きしめている。
奏はフッと表情を柔らかくし、
「つーばさ」
「わっ！」
後ろから翼を優しく抱きしめる。
また何か悪戯されるのかな？と思ったが、奏から聞こえる声はそんな事を感じさせず、寧ろ聞く人を安心させるような声だ。
「そんなにガチガチだと、いつか本当にポッキリいっちゃいそうだ」
「奏・・・」
「あたしの相棒は翼だ。・・・そんな顔してたら、あたしも楽しく歌えないし、翼もきっと楽しく歌えないぞ？」
「・・・うん、ゴメンね。でも、どこかで失敗したらって思うと、どうしても緊張しちゃって」
そん時はあたしがフォローするさ、と翼の手を優しくぎゅっと握る。
そのお陰で力んでた肩の力が程よく抜けた気がした。
「うん・・・ありがとう。奏と一緒なら大丈夫な気がする」
そして２人は立ち上がる。
外にいる観客達が今か今かと待っていることだろう。
「あたしと翼、両翼揃ったツヴァイウイングは何処までだって飛んでいける」
「うん、２人でなら、どんなものだって超えてみせる」
そして２人は自然に手を繋ぐ。
もう緊張してないと言えば嘘になってしまうが、そんな気持ちでライブに望めば来てくれたみんなが楽しめない、そんなのは絶対に嫌だ。
・・・なら何を迷う必要がある？

私は・・・いや、私たちはこのライブを、ただひたすらに全力で楽しもうーーー！

ドキドキしながら待っていると、会場の灯りがフッと消え、辺りは暗闇が支配する。
先程まで喋っていた大勢の人たちの声が静まり・・・そして、流れだす曲は、逆光のフリューゲル、俺がツヴァイウイングの歌で1番気に入っている曲だ。
（2人は一体何処に？）
なんて考えていると、ツヴァイウイングの2人、奏さんと翼さんが上から飛ぶようにしてステージに降りてきた。
イルミネーションは色とりどりに輝き、多色のライトはツヴァイウイングの2人と空から落ちてくる純白の羽を虹のように照らしだす。
そして観客のペンライトやサイリウムなどが光りだす。
舞い散る羽の中心で、翼を模したドレスを纏う奏さんと翼さん。
会場を照らすライトは、左右一対の光の翼を作る軌跡を形作っていた。
その光景に思わず見入っていたが、ハッ、と意識を取り戻し、響とそして自分の分のサイリウムをつけ振るう。
（凄い、これが実際のライブ！会場にいる人たち全員が繋がるこの感覚・・・！）
周りと声を合わせていると、自然と口角が上がり笑顔になる。
チラリと隣にいる響を見れば、夢中でサイリウムを振っていて、こちらもすごく良い笑顔になっていた。
曲がサビに入ると、会場の上層が開き、夕焼けに染まった空が見える。

もしかして、この夕焼けも計算にいれてたのだろうか？
なんて事は今の俺に考えられる訳もなく、ただただ幻想的なその光景に圧倒される。
心臓はドキドキと高鳴り、俺の目は夕日によってキラキラと輝く2人から離れない。
きっと、こういうのを、心奪われるというのだろう。
さらにヒートアップする観客の声をぶち抜いてなお耳に届く唄を歌う奏さんたち。
（もし願いが願うなら。俺はこの光景をずっと見ていたい・・・！）
そして、逆光のフリューゲルが終わると辺りからは拍手が絶え間なく送られる。
そして夕焼けをバックに流れだすはＯＲＢＩＴＡＬ　ＢＥＡＴだ・・・！
「まだまだ行くぞー!!」
奏さんの声により、この場にいる全員の気持ちはさらにヒートアップしていき――――次の瞬間、会場が爆発した。

第４話

会場の一部が爆発すると同時に、上から槍のような何かが降って来た。
しかもそれは1本ではなく、何十、何百と降り注ぐ。
降り注ぐ槍に人が刺される、瞬間、１０秒と持たずに刺してる槍ごと人が炭素の塊になる。
更に中央部には大きな虫の形をした何かが地中から出て来た。
それを会場にいる全員が認識すると誰かが叫んだ。
「ノ、ノイズだー!?」
「うあぁぁぁぁ!?」
「た、助けてくれぇー!?」
たちまち会場はパニックになり、観客たちは我先にと出入り口に流れこむ。
その間にもノイズに触られた人たちが、助けて、死にたくない、などと悲鳴が辺りに響き渡る。
――――ノイズ。
一体いつから現れたかは知らないが、それは人類だけを襲い、触れた人を自分諸共、炭素の塊に変え、分解してしまう、特異災害の総称である。
それだけでも恐ろしいのに、ノイズには普通の武器などが効かず、出会ったが最後、ノイズが自壊するまではただひたすらに逃げるしかない。
「せ、せーくん!」
響は震える手で俺の袖を掴む。
「っ、響!そのまま俺のバックを掴め!今離れたら合流できる気がしない」
「う、うん分かったよ!」
俺が急いでそう言うと響はギュッとバックを掴む。
掴んだのを確認すると、俺たちは人波に逆らわずゆっくりと移動・・・しようとするのだが、人があまりにも押し寄せて先に移動が

できない。
せいぜい後ろに下がるしかない。
「すまん、少し後ろに下がるぞ」
コクリと響は小さく頷き、２人で少しばかり後ろに下がる。
一応スペースができたので最悪ノイズが来ても避けれる・・・はず。
（クソッ！急がないと危ないってのに！）
ギリッと歯噛み、心臓がドクンドクンと早鐘のように鳴り、そのせいで余計に気持ちが焦る。
――――ここでふとバックから感じている手の震えがピタリと止まるのを感じる。
少し疑問に思い響を見てみれば、響は何かに見惚れるかのように動かなかった。
その視線の先には大量のノイズ――――そして、耳に伝わる歌と共にそれに果敢に立ち向かう２人の女の子、あれは・・・
「翼さんに、奏さん・・・？」
しかもよく見れば先ほどステージで着ていた服ではなく、まるでノイズと戦う為にあるかのような衣装に変わっていた。
そして何より、その手には刀と槍が握られていた。
翼さんがオタマジャクシに見えるノイズたちを縦に横にと断ち切っていき、奏さんの手に握られた槍の穂先が回転し竜巻ができる。
「うおりゃぁ!!」
それを奏さんは両手でしっかりと握り槍をノイズに向けてぶん回し、小型のノイズと大型のノイズを蹴散らしていく。
「す、凄い・・・」
惚けたように呟く響。
確かに凄いが・・・何だろう、まだ余裕そうな顔の翼さんに比べて、奏さんには少しばかり余裕が無いように見えるのは、俺の気のせいだろうか？
「って、惚けてる場合じゃな――――!?」
「うわわわ!?」
突然足場が崩れ、体がフワリと浮く。

反射的に響を抱き抱えると一瞬にして俺の体は地面に叩きつけられ、俺たちはゴロゴロと何回も転がり、崩れた壁にぶつかりようやく止まる。
体は痛み、ツーと頭から何かが流れる。
どうやら先ほど転がった時に頭を少し切ったのか血が流れたようだ。
（響は・・・良かった、怪我はなかった）
ほっと胸を撫で下ろし、とりあえず血を拭う。
血が出てるが、まぁ直ぐに止まってくれるだろう・・・こんな大怪我でもすぐに治ってくれるかは分からないけど。
「・・・大丈夫か？」
と下にいる響にそう聞く。
響は目を開けて俺を見ると、サァッと顔が真っ青になる。
「せ、せーくん血、血を止めないと！」
急いでハンカチを取り出すが、それを止めて後ろを指差す。
響が視線を後ろに向ければ、両手を三角のアイロンの形にしたような人の形をしたノイズが数体こちらに向けて走りだす。
「まず先に、逃げるぞ響」
「っ・・・う、うん」
未だに叩きつけられた衝撃で体中に痛みが走るが、それでも体に鞭打ちながら立ち上がり、急いでそこから逃げだす。
だが体へのダメージは深刻だったのか動きは緩慢になってしまい、このままだと俺たち２人共・・・と最悪の未来が頭をよぎるが、駆けてきた奏さんが手に持つ槍でノイズをかき消し、切迫詰まったように言う。
「駆け出せ！」
「っ！」
急いで離れようとすると同時に、逃がさん、とばかりにノイズは形を槍のように変え、俺たちを殺そうと突撃してくる。
「ぐぅっ！」
それを、苦しそうな声を上げるが、奏さんは槍を回転させ俺たち当

たらないように守る。
ピシッ、と嫌な音が鳴り、ヘッドギアや手に持つ槍などにヒビが入る。
「奏！」
こちらとは反対側にいる翼さんが向かってくるが、まるでこの先には行かせない、とばかりに小型ノイズが道を塞ぐ。
大型ノイズが固形化した霧のようなそれを吐き出したそれを奏さんは身を呈して守るが、駄目押しとばかりにもう一体の大型ノイズが同じもの吐き出す。
「っ、う、おぉぉぉぉぉ!!」
バキバキッと先ほどより嫌な音が鳴り、耐えきれなくなったのかパーツの一部が後ろにいる俺たちの方に飛んできて――――――

ザシュと胸の辺りから音が聞こえると同時に壁に叩きつけられる。
「――――え――――あ――――？」
視界がぐちゃぐちゃになり、自分が今上下左右どちらを向いているかわからなくなり、しかも視界は半分程しか開けれず、体中に激痛が走りダラリと血が流れ出ている。
しかも俺の胸の辺りには小さな機械の破片が刺さっているのが見える。
「――――ひ――――び――――き――――？」
体は動かないので頭だけで響を探せば、響は直ぐ隣にいた。
だが、服は胸からの出血で赤く染まり、その目は閉じられていた。
多分、俺も似たような状態だろうなとどこか他人事のように感じる。
――――――体の内側から、パキパキと音が聞こえる。
なんだ？と思い見てみれば、胸に刺さった機械がドンドン俺の中に入ってくるのが見えた。
――――――そのパキパキっという音は咀嚼音にも聞こえる。
自分の体に異物が入ってきて、さらに激痛が走り・・・なんだか、瞼

が重くなってきた。
目がチカチカし、瞼は重くなっていく。
「おい死ぬな！目開けてくれ！」
ゆさゆさと揺らされる。
この声は・・・奏さんのようだ。
視界は相変わらずチカチカと光って奏さんの顔があまり良く見えず、体の内側から聞こえる咀嚼音は止まらない。
（・・・もうすぐ・・・死ぬ・・・のかな・・・？・・・約束、守れなさそうだ・・・未来・・・ごめん・・・）
最後に心の中で未来に謝り・・・・・全てを諦め瞼を閉じた時、奏さんの声が聞こえる。
「生きるのを諦めるな！」
（――――――）
その言葉が聞こえ、少しだけ意識が戻り、目を開ける。
奏さんの顔が見える。
最初はほっとした顔になり、数瞬目を閉じ、そして開き、優しい眼差しをこちらに向ける。
「いつか心と頭、全部空っぽにして歌いたかったんだ。今日はこんなにも、沢山の連中が聞いてくれるんだ」
そう言い奏さんは背を向け地面に落ちてた槍を手に取る。
「だからあたしも出し惜しみ無しでいく。・・・とっておきを、くれてやる」
ボロボロになった槍を上に掲げる。
「絶唱」
その言葉にはどれだけの思いが込められていたのか、今の俺には何もわからなく、１つだけ分かると言えば、その頬に、涙が１つ流れてた。
――――そして、歌が紡がれる。
「Ｇａｔｒａｎｄｉｓ　ｂａｂｅｌ　ｚｉｇｇｕｒａｔ　ｅｄｅｎａｌ」
「いけない奏それを歌ってはダメー!!」

奏さんの歌を翼さんが止めようと、駆け出す。
「Ｅｍｕｓｔｏｌｒｏｎｚｅｎ　ｆｉｎｅ　ｅｌ　ｂａｒａｌ　ｚｉｚｚｌ」
歌い上げるたびに、奏さんの体から、血が流れる。
「Ｇａｔｒａｎｄｉｓ　ｂａｂｅｌ　ｚｉｇｇｕｒａｔ　ｅｄｅｎａｌ」
「・・・歌が・・・きこえる・・・」
それはまるで、自分の命を燃やすかのようにそれを歌い、槍に力が宿っていく。
「Ｅｍｕｓｔｏｌｒｏｎｚｅｎ　ｆｉｎｅ　ｅｌ　ｚｉｚｚｌ」
――そして、奏さんはそれを歌い切る。
瞬間奏さんを中心とし、渦状のエネルギーが発生する。
眼前の、大量にいるノイズに向けそれを発射。
大型小型のノイズ諸共全部まとめて薙ぎ払う。
逃れる術は無く、数秒とかからずノイズはこの場から全て消滅する。
（倒し、た、のか・・・。じゃあ・・・助かる、のかな・・・）
そう思い、安心したのか、瞼は急に重くなっていき、周りからの音も聴こえなくなっていく。
「ーーーー！ーーーーー！」
翼さんは必死になって、奏さんを抱き抱えながら何かを言っている。
・・・翼さんの目からは涙が流れる。
ジジジッと意識が断絶し、これ以上は開けてられない。
瞼が閉じられる寸前、翼さんの腕からかき消されるように、奏さんは消えてしまうのが見えたのを最後に、プツンとテレビの電源を落とすかのように俺の意識は暗転した。

第5話

重い体を引きずるように、俺は暗い闇の中をただひたすらに歩く。
「はぁ・・・はぁ・・・っ・・・」
呼吸は荒くなりズキリと少しばかり頭が痛む。
進むごとに頭痛は激しさを増していくが、関係ない、とばかりに足は、前に前にと進んでいく。

どれくらい進んだだろうか？
・・・ジーと見れば前方から薄くだが何かが見えてきた。
「あれは・・・？」
近づくに連れてその姿が露わになっていく。
それは全身を黒い鱗に覆われた黒色のドラゴンだ。
何だろう、俺は昔、こいつを見たことがあるような・・・？
なんだか気になって近づくがドラゴンとの距離が近づくにつれ、頭痛は激しさを増していく。
だが足は止まってくれなく、
「ぐっ・・・っぁ・・・!?」
ドラゴンまで後目と鼻の距離で最終的に立っていられなくなり、その場で頭を抑え膝をつく。
頭痛はより激しさを増していき、ジリジリと俺の精神を蝕んでいく。
「っ・・・！」
途切れそうになる意識を必死に繋ぎ止める。
そして気づけば、すぐ側でこちらを見る黒いドラゴンは、俺と同じ赤い色の瞳でジッとなにか値踏みするように俺を見つめ

――オマエヲエランデヤル

なんて一方的に言ってきた。

どういう事だ?と言う間も無く、ドラゴンは目を瞑ると、徐々にその姿を黒い球状に変化させていく。
球状になったドラゴンは音もなく俺に近くによると、すっと俺の中に入ってきた。

ドクンと体に、得体の知れない何かが入ってくる
「はっ・・・ぐぅっ・・・ごふっ!?」
口からは血が流れ、バキバキと、激痛と共に自分の体がエタイノシレナイナニカに変わってイク感覚にオチイル。
手を見れば、爪はカギヅメになっテいき、腕からは黒い鱗がバキバキと音を立てながらハエテキタ。
堪らずソノバにうずくまり、バタリと仰向けにタオレル。
(・・・しぬのか?)
漠然と、そんな事を考える。
(嫌ダ・・・)
ギリっと歯噛みする。
(もう、会えないのか・・・)
未来や響、それに了姉たちが頭をよぎる。
視界はどんどん暗くなっていき、視界はくらヤミニ包まれていく。
体からは力が抜けていき、意識も朧げにナッていく。
もうダメか、と諦めたときーーーーーーーーー
『生きるのを諦めるな!』
――――――奏さんの言葉が、脳裏をよぎった。
(・・・そうだ、諦めて、たまるかよ・・・!)
ぐっ、と拳を握りしめ朧げになった意識をはっきりとさせると、

「そうだ、ここで死んではこちらが困るのでな」
聞いたことがない女性の声が聞こえた。

「りょう・・・ねえ？」
「残念だが、私は櫻井了子では無い。・・・私の名はフィーネ。終わりの名を持つものだ」
白色のローブを着た金髪、フィーネと名乗った。
フィーネはこちらに近づき、両手を広げると、ぽうっと何かが光り輝いた。
（なんだ・・・？）
それを見る。
それの長さは大体１７０ｃｍほどで、のっぺりとした竜の鱗のような両刃の赤黒い刀身に、柄の部分には青い宝玉のようなものがついた剣が暖かな光りを発しながら、ふわふわと俺の側に浮かんでいた。
「それ、は・・・？」
「お前の体に埋め込まれた竜殺しの剣だ。これがあれば、お前の中に入った奴を少しは抑制できるだろう」
「・・・」
なんでそんな物が自分に？と思う間も無く、フィーネは言葉を続ける。
「だが、あくまでも抑制だ。抑制したソイツの力を使えば、抑えは効かなくなるだろう」
力を使う・・・あの再生能力のことだろうか？
「・・・・その剣があれば、俺はまだ生きれるのか？」
痛む体に鞭を打ち立ちアガる。
「あぁ、それを手に取ればな」
「だったら・・・！」
迷いなく、痛みで震える両腕で、その剣に手を伸ばす。
剣に触れると、剣は光の球状になり、自分の中に入ってくる。
体の中でカチッと鍵のかかるような音が聞こえ、暖かな光りが俺の全身を包み込む。
すると、体の激痛が治り、爪は元に戻り、腕の鱗はスゥと消えた。
「戻った・・・？」
あれ？と思う間も無く体から力が抜け、前に倒れこむ。

「全く、世話がやける・・・」
ボフッとフィーネに抱えられる。
瞼がどんどんと重くなっていき――――――――瞼が完全に閉じる瞬間、フィーネの後ろに鎧を身に纏った男性が見えた気がした。

小日向未来は今日も親友たちが眠る病院に足を運ぶ。
『あれから1週間、未だにツヴァイウイングのライブで――――――――』
（あれからもう1週間経ったんだ・・・）
あのライブの事件から1週間が経ち、今尚テレビのニュースではライブの事で、あーだこーだと専門家と名乗る人たちが何かを言っている
それを横目に、はぁー、とため息を吐く。
親友たち――――立花響と黒然誠が入院したと聞いた時は、私も盛岡なんて行かずに一緒に行けば、一緒に行って私が代わりに2人の傷を受ければよかったなど、頭の中でもしもあの時・・・と何度思って枕を濡らしただろうか。
（早く目が覚めてるといいけど・・・）
学校でも授業中はぼーとしてる事が多くなり、さらには部活にもあまり力が入らない。

このままだとダメだなと思い、暫く部活を休むと顧問の先生に進言し、それからと言うもの学校が終わり次第に病院に行ってはいるが、1週間経っても2人共ピクリとも目が覚めない。
もしかしてこのまま一生目が覚めないのでは？と嫌な思考が脳裏をよぎる。
そう思うと体が震え、私のせいだ、私のせいだと、罪悪感に苛まれる。
『次は○○病院前、○○病院前ー、降りの方は――――――』
（・・・あ、着いた）
バスに揺られること数十分、最早見慣れた病院にたどり着く。
そして怒られない程度の早さで病室に向かう。
（先ずは響の病室かな）
ガラリとドアを開ける。
体の所々にはまだ包帯が巻かれているが呼吸は安定しており、今にも目を覚ましそうだ。
イスに座り、響の手を握る。
（どうか無事に響の目が覚めますように）
だからお願い神さま、といるかも分からない神さまに祈る。
・・・だが響は目を覚ましてはくれない。
わかってはいるが、その現実に視界が滲みそうになるが必死に堪える。
「・・・平気、へっちゃら、だよね響。私ばかり泣いてちゃ行けないよね」
涙を堪え、それじゃまた明日も来るね、と言い病室を後にする。

未来が病室を出て行くと、ピクリと微かにだが響の手が動いた。

エレベーターに乗り込み、誠が寝ている病室の階のボタンを押す。
ふとここでエレベーターに付けられた鏡が目に入る。
（・・・ちょっと目にクマができてるや。ここの所、あんまり寝れてないからかな）
壁に寄りかかり、ふー、と1つため息をつく。
（誠くんの所に行く前に自販機で何か飲もう・・・）
ピーンとエレベーターが目的の階に着いた。
トコトコと自販機があるエリアに向かう。
（・・・お茶でいいかな）
お財布から小銭を取り出し、お茶を買う。
「はぁー・・・」
「あらあら女の子が暗いため息なんてしちゃダメよー」
「っ!?」
お茶を飲んでため息を吐いていると、後ろから声をかけられる。
びっくりしてお茶をこぼしそうになるが寸での所でなんとか溢さずにすんだ。
「あらら、ごめんなさいね。未来ちゃん」
この独特の髪形に、白衣を着たメガネの女性、誠の義理の姉で、確か名前は・・・櫻井了子だ。
「・・・いえ、大丈夫です、了子さん」
少し・・・いや、かなり申し訳無さそうに未来は目線を晒す。
「もしかして、誠のお見舞い？」
「・・・はい」
勿論、迷惑じゃなければ・・・と、小さく付け加える。
「全然迷惑じゃ無いわよ。ありがとね、誠のお見舞いに来てくれて」

「いえ、私に出来ることなんて、これぐらいしか無いですから」
俯き、視線を下に晒す。
正直に言って、今は目を合わして話せる気がしない。
「いやいや、来てくれるだけでも嬉しいわよ。誠だって、きっとそう言うはずよ」
そうですか?と聞けば、絶対そうよーと言う。
「だって、誠と電話するときは大抵貴女の事を良く話してくれてたのよね」
「・・・そうなんですか?」
「そうよー。それも、結構楽しそうにね。・・・だから、あまり自分を責めないであげて。きっとあの子もそう言うに違いないから」
「そう・・・ですね」
少しだけ気持ちが軽くなる。
「あの子が起きたら、お帰りって言ってあげなさいな。きっと喜ぶでしょうから。それじゃ、先に誠の病室に行ってくれる?私もちょーとだけ用事を済ませたら向かうから」
それじゃあねー、と手をヒラヒラさせながら了子は席を立ち、白衣から携帯を取り出しどこかに電話をする。
(そういえば、何かの研究者って誠くん言ってたけ・・・)
そう言った本人も、まぁ俺もよく知らないけどね、と言ってたけれど。
お茶をカバンに入れておき、誠が眠る病院に向かう。
(起きたらお帰り、か・・・)
でもお帰りと言う前に泣きそうかなと思いつつ、ガラリと病室のドアを開ける。
「あっ・・・」
少しばかり寝ぼけた目の黒然誠と目があった。
(――――――――――)
思考が空白になる。
「んっ?み――――――」
そして気がつけばダッと駆け寄り、誠を思い切り抱きしめていた。

「んっ・・・・あれ・・ここは？」
気がつけば見知らぬベットの上にいた。
・・・何だろう胸の辺りに違和感がある。
具体的には胸の辺りが押さえつけられてる感覚がする。
（そういや、なにか夢を見てたような気がするが・・思い出せないな）
そして体の至る所には包帯が巻かれているが、痛みは無い。
またあの再生能力が働いたのだろうか？
「時間は・・・まだ１０時ぐらいか」
さらに腕を見れば点滴が付けられている・・・・・・もしや病院かここ？と思っていると、ガラリとドアが開けられる。
音のした方を見ると、そこにはなにやら驚いた顔をした未来がいた。
服を見るに、私服のようだ。
「あっ・・・」
「んっ？み――――」
ダッ！と高速で駆け寄られ、ギュッと思い切り抱きしめられる。
嬉しいやら恥ずかしいやら思ったより柔らかいやらで、思考がぐちゃぐちゃになる。
「え、ちょっ、未来!?」
「よかった・・・このまま目を覚まさないんじゃないかって・・・！」
震える声でそういった。
見れば、抱きしめている手は震えてる。
・・・どうにも、心配をかけすぎたみたいだ。

「・・・悪い、心配かけて」
「・・・お帰り、誠くん」
「・・・ただいま、未来」
ぽんぽんと、安心させるように軽く頭を撫でる。
そしてそのまま数分ぐらいギュッと抱きしめられるがままになっていると、
（・・・んっ？）
何やら開けっ放しのドアから誰かがニヤニヤと笑っている。
・・チラチラと見えるあの特徴的な髪型は了姉だな間違いない（断言）
「あー・・・その、未来？」
涙目になっている未来と目が合う。
それに思わずドキリとしながら後ろを指差す。
未来は頭だけ動かして開けっ放しのドアを見る。
扉の隙間からニヤニヤしていた了姉と目が合う。
数秒の間を開け、ボフンと音を立てると顔を赤らめ、シュバっと素早く抱きしめを解除し、あわあわしだす。（可愛い）
車椅子を部屋に入れながら了姉は、青春ねぇー・・・と呟いていた。
「これも若さがなせるものかしらねー？」
「え、あ、えと・・・」
「いいわよ気にしなくて。でも、ちょーと大切なお話があるから、席を外してくれると助かるわね」
「あっ・・・はい、それじゃあね誠くん。また明日もくるね」
「おう、また明日な」
ちょっと名残惜しそうに未来は病室を後にした。
そして未来が去ったのを確認した了姉はふーと息を吐き一言。
「で、あの子が誠の気になっている子でしょ？」
「・・・まさかそれ聞きたいが為に未来を帰したの？」
ジトーと半目で睨むがどこ吹く風と言わんばかりに、まぁそれもあるけど、とのたまうが、でもね、と続ける。
「これから話す事は、ちょーと他の人には言えない事なのよね」

いつになく真面目な表情をする了姉。
思わずこちらも背筋が真っ直ぐに伸ばす。
「でも先ずは、一旦場所を変えましょうか？」
「ここじゃあダメなの？」
「詳しい事は別のところでね。ここよりかは説明しやすいのよね」
車椅子を近くに寄せてくる、乗りなさいって事だろう。
別に自力で動けるが、ここはお言葉に甘えて車椅子に乗る。
「それじゃ、一名様ご案内～」
「安全運転でお願い！」

第6話

「はーい、それじゃメディカルチェックの結果発表～」
「メディカルチェック？」
診察室と書かれた部屋に移動して早々に了姉はそんなことを言う。
そして手に持っていた封筒からレントゲン写真を取り出し、ボードに貼っつける。
「まだ胸の辺りの傷は完全には癒えてはいないけれど、それ以外の傷はほぼ回復よ」
一応念のために包帯は巻いてあるけどねーと付け加える。
試しに腕をぐるぐると回してみるが痛みはない。
ぺらっと包帯を少し捲れば、そこには傷1つない腕がそこにある。
めくった包帯を戻しながら了姉は話を続ける。
「心臓付近のこの部分を見てちょうだい」
レントゲンで心臓付近を指差す了姉。
そこには、どことなく鍵のように見える破片の様な物が写っていた。
間違いなく、あれはあの時の刺さった破片だろう。
了姉曰く、心臓付近に複雑に刺さってしまい手術でも摘出不可能らしいが、幸いなのか日常生活には支障が無いけどねーとの事。
「じゃあ、しばらくは入院してないとダメ？」
「まぁそんなところね。じゃあ、次はこちらが質問するわね」
了姉はぐいっとこちらに顔を近づける。
「貴方、あの会場で見たでしょ？」
あの会場・・・間違いなくノイズと戦うツヴァイウイングのあの2人の事だろう。
小さくコクリと頷くと、了姉はさっきとは違う封筒を取り出し、こちらに手渡す。
「これは？」
「それは・・・まぁ、分かりやすく言えば、あの会場で見た物は誰にも言ってはダメよっていう書類よ。特に友達、未来ちゃんたちにも話し

てはいけないわよ。それほどまでにあそこで見たものは機密事項なのよ」
「・・・了姉は、あれが何なのか知ってるの？」
　用紙を受け取りつつ、そう聞くと了姉はコクリと頷き、それの正体を明かす。
「あの２人が身につけていた物は、私が提唱した『櫻井理論』を元に作りあげた人類が認定特異災害ノイズに対抗できる唯一の武器、ＦＧ式回天特機装束――――通称、シンフォギアと呼ばれるものよ」
　脳裏に浮かぶのはあのライブ会場でツヴァイウイングの２人が纏っていたあの装備、あれがシンフォギア、なのだろう。
「そして、それを管理・運用するのが、私が所属する組織、特異災害対策機動部二課なのよ」
「特異災害対策起動部・・・確か避難誘導とか、ノイズの進路変更とかするところだっけ？」
「あら？意外と知ってるのね」
「テレビとかでもよく報道されてたからね。・・・てか今更だけど了姉って凄い所で働いてたんだね、政府所属の組織って」
　なるほど、そりゃ中々家に帰ってこないわけだ。
「そうねー、でもあまり外に出掛けれないからあんまり日の光とか見ないのよね、場合によっては徹夜だって当たり前になるから、おかげで肌の調子なんて悪くなる一方なのよ？」
　夜更かしはお肌の天敵なのに、と呟き、はぁーと小さくため息を吐く。
　その目に少しばかり涙が見えるのは、たぶん、きっと気のせいでは無いのだろ。
「と、まぁ暗い話はここまでにして、取り敢えずサインお願いねー」

その後用紙に名前を記入し、了姉に、先に戻っててーと言われたので帰りは自力で病院に戻った。ここでふと、持ってきた荷物とかどこだ?と思い荷物を探すと、ベットの下の籠の中に着ていた服やバック――――それと身に付けていたお守りの黒いペンダントが入っていた。

(シンフォギア、ノイズと戦える唯一の武器、それを使って戦うツヴァイウイング、か・・・・・なんかニチアサとかでよく見るような話だな。――――うん?)

と、ここで何となくお守りのペンダントを眺めていると、ピロンと机の上に置いといたスマホから通知が来た。

誰からだ?と見れば未来からで『今大丈夫?』と書かれていた。

ちょっとだけ悩んだがまぁ、直ぐには来ないだろうと思い『あぁ、大丈夫だ』と返事を返した。

『今大丈夫?』

小日向未来は彼――――黒然誠にメッセージを送信する。

少しばかりドキドキしながら返事を待っていると『あぁ、大丈夫だ』と返信がきた。

『傷は大丈夫なの?』

『かすり傷が大半みたいだけど、一応念のために包帯巻いてたみたい』

そうだったんだと返しつつ、ホッと息を吐く。

良かった・・・と呟くが胸の内にある罪悪感は消えてはくれない。

『それじゃあ、直ぐに退院できそうなの？』
『いんや、しばらくは検査とかあるみたいでまだまだ入院するみたいだ』
　じゃあまだ入院か・・・ゴロンとお気に入りの犬のクッションを抱きしめつつ、小さくため息をついた。
『響も早く目覚めてほしいよ・・・』

『・・・まだ、目が覚めて無いのか』
『うん。・・・誠くんがいる病室の下の階で眠ってたよ。命に別状は無いから良かったけど』

『それじゃあ明日見に行ってみるか。・・・響が起きたら、一緒に響の髪をわちゃわちゃするか』
　そうだね、と響のあの妙に手触りのいい癖っ毛を思い出し、未来は久しぶりにふふっと笑った。
　多分だが、病院にいる誠もきっと笑っているだろう。
　ここで時計を見てみれば、そろそろ寝ないと、と思い、また明日ね、おやすみと送り、携帯のアプリを落として部屋の電気を消し、目を閉じる。
　ここの所、あまり寝つきが良くなかったが、今日は不思議と直ぐに眠りに落ちた。

第7話

未来とのメールでのやり取りが終わり、ふと何やら視線を感じてドアの方を見れば、紫色の目と目が合う
「・・・なにやってんのさ了姉」
スマホをテーブルに置き、呆れながらそう言えば、悪びれることなく両手で紙袋を持った了姉が入ってくる。
「いやー、青いわねーと見ていただけよー」
と口元を少しニヤニヤさせながら肘で軽くこちらを突いてくる。
(ちゃんと痛く無いように加減はされている)
それをスルーしつつ、要件を聞く。
「それで、なんのよう?」
「スルーするのね・・・まぁ、いいわ。とりあえず、着替えね」
「あぁ、ありがと」
紙袋を受け取り、下のカゴに入れておく。
「それと今後の予定だけど。暫くは検査とリハビリよ。まぁ、結構元気そうだし、リハビリは直ぐに終わりそうだけどね」
そうなると大半は検査になるけどねーとのこと。
それもそうか、なんせ大半の傷はかすり傷ばかりなのだし、しかもまだ歩いた訳ではないが、もう既に歩けるぐらいには回復したと思えるぐらいには痛みは無い。
そっかーと返事を返し、それじゃあ暫くは暇になるなーと心の中でぼやく。
ここでふと、そういえば学校にはなんと伝えたのだろうか?と疑問に思い聞いてみる。
「学校?あぁ、その事なら安心しなさい。インフルエンザって伝えておいたから」
「そりゃ確かにインフルが流行りそうな時期だけど・・・」
「まぁ、詳しい事はまた明日にでもね」
それじゃあおやすみなさい、と有無を言わせず、白衣を揺らしながら了姉は部屋を出る。

・・・まぁ合法的に休めるからいいかと思い直し、おやすみーとその背中にかけつつ、備え付けのリモコンで部屋の電気を消し、ゴロリと横になり目を閉じ――――意外とすぐに眠りに落ちた。

・　・　・　・　・

そして次の日、午前中は検査と軽いリハビリを終えた俺は、午後からは見舞いにきた未来と共に響の病室を訪れてみた。
寝てるかもだが、一応ノックして声をかけてみる。
「響ー、入るぞ」
どうせ声は聞こえないと、高を括っていたら。
「あっ、せーくん？入ってどうぞー」
「――――――――――――!?」
響の声が聞こえるやガラ！とドアを開けられ、中を見れば響は起きていて未来に抱きつかれてるではありませんか！
・・・いかん、驚きすぎて変な口調になっていた。
いつ目が覚めたんだ？と俺が聞けば今日の朝方ぐらいに目が覚めた、との事。
びっくりして色々と言いたいを忘れてしまったがとりあえず・・・
「お帰り響」
「うん、ただいま、二人とも」
ふにゃりと、響が笑ってそう言った。
「さてお帰りも言った事だしさ未来」
「うん、そうだね」

未来とアイコンタクトを交わすと、俺は手早く未来とは反対方向に陣取る。
えっえっ？と困惑する響を置いてきぼりに一言。
「「すーぱーわしゃわしゃ時間（タイム）（だ）！」」
「な、なにごとぉー!?」
それから数十分間は二人で響の手触りの良い髪をわしゃわしゃと撫でくりまわした。
割と気持ち良くて少しばかり癖になりそうだとここに記す。

・・・・・・

すーぱーわしゃわしゃ時間（タイム）が終わると、部屋はまったりとした空気になる。
「うぅ・・・2人に揉みくちゃにされたよぅ・・・もうお嫁に行けないよぉ～」
修正、約一名がまったりとしてなかった。
よよよ、と泣き崩れる響さんにポンと肩に手を置き一言。
「まー、嫁の貰い手がいなかったら貰ってやるさ――――――未来がな」
「えっ、そこは誠くんじゃないの？」
「不束者ですがよろしくお願いします」
響もなに乗ってるのー！と元気にツッコム未来さん。
うん、ありがとう響よ乗ってくれて、とアイコンタクトを送れば、響は親指をグッとあげる。
雑談終了とばかりに未来はゴホンと咳をする。
ちょっとイジリ過ぎたか、それじゃあ普通の会話と行こう。

「・・・にしても、元気そうでよかったな」
「そうだね。響の声が聞こえないからいつもより学校が静かに感じたよ」
「そうなの？ごめんね心配をかけて、でもこの通り私は元気だよ！」
ギュッと拳を握ると、グギュルル～と気の抜けた音が聞こえる。
あたりには何とも言えない空気が流れる。
ジトーとした目で見ればバツが悪そうにこう切り出す響。
「・・・実はさっきまで検査してたから、いまスッッゴイお腹空いているんだよね」
えへへーと照れ笑いしながらテーブル近くに備え付けられた冷蔵庫からコンビニのおにぎり（ツナマヨ）を取り出す。
「やっぱりこう言う時はご飯に限るよ！」
「起きてまだ1日経ってないのに・・・実は響ってどこぞのイ◯ルなのでは？」
なんて素直に感心ほめてますしていると、私そこまで大食らいじゃないよ！と返された。
「えぇー、ほんとにごz「ていっ」いったぁ!?」
言い切る前に響からベシッ！と鈍い音のデコピンを額に諸にくらう。
「恐るべき乙女の怒り・・・！」
「バカな事言ってないで、はい、お茶お願いね誠くん」
「あっ、私は麦茶をお願い」
「自然な流れでパシリに出されるだとぉ・・・!?」
とは言ったが俺の分のお金もしっかりと渡してくれてるのでパシられるのは全然問題ではない。
「仕方ない・・・買ってくるよ」
「「行ってらっしゃい」」
２人に見送られ、俺は1人病室を出て自販機に向かうのだった。
・　・　・

・・・・・

悲しいことにこの階の自販機が壊れてたので、仕方なしに1番下の階の売店に買いに来た。

「飲み物、それにお菓子をっと・・・」

籠に飲み物とお菓子（これは自腹）を放り込みレジに並ぶ。

後ろの方でおばちゃんたちの声が聞こえる。

普段ならば気にしないのに――――――

「今あのライブに行った人の大半がバッシングされてるらしいわよ？」

「嘘？それほんと？」

（・・・えっ？）

今日に限ってやけに鮮明に聞こえた。

聞けばあのライブでは相当な数の死傷者が出たらしいが、その中で逃走中の将棋倒しによる圧死、避難路の確保を争った末――――――暴行による傷害致死であることが、週刊誌に掲載されると、一部の世論に変化が生じ始めた、らしい。

「しかもその人たちも裁かれてはいないみたいよー」

「ほんと怖いわねー、家の戸締りとかしたか不安になってきたわー」

「今じゃあ、人殺しが世にのさばってる状況らしいわ。・・・ほんと、だれでもいいから裁かれないかしらね？残された人の事考えてほしいわ」

（――――――）

思考が嫌な予感を導き出し・・・それを振り払う。

（そんな事あるわけない・・・ちょっと、過剰に反応してるだけだ）

だけど、このチクリとくる嫌な予感は一体なんなんだ・・・？

嫌な予感に少しばかり怯えつつ俺は買い物を終え、手早く響の病室に帰る。

・・・割と表情に出やすいのか未来が少しばかり不思議そうな顔をして俺を見るが、あえて無視して俺は2人に飲み物を手渡した。

そんな出来事から2週間が経過した。

俺と響が病院でのリハビリを終え、学校の教室に着いた時――――嫌な予感が的中してしまった。

正義という名の悪意によって・・・。

第8話

「ぶえっくし!っ～、寒いな・・・」
「そうだね・・もう新しいマフラーとか買ったら?」
早朝の、誰も居ない道――――――強いて言うならランナーの人たちが時折走ってるぐらいか――――――をボロボロになってきたマフラーを口元まで上げつつ、自転車を押す俺とその隣を歩く未来。
トコトコ歩く事数分、とある家の前にたどり着く。
「はぁ・・・また書いてあるよ」
「だね・・・」
窓ガラスは割られ、壁には、人殺し、税金泥棒、生きてて恥ずかしくないの?など様々な罵詈雑言が所狭しと書かれてたりしていた。
それを手慣れた感じに張り紙を引っぺがしてはそれをカゴに入れておいたゴミ袋に突っ込んでいき、これまたカゴに入れておいた白色のペンキを壁に塗りたくり、見えるところから片っ端から消していく。
心の中で少しばかり、なんだかなー、と思いつつ1週間前のことを思い出す。

――――――1週間前、学校にて

「なんで・・・なんであんたなんかが生きていているのよ!?」
「・・・えっ」
響が教室に入った瞬間、メガネをかけた女子生徒のヒステリックな叫び声が響くと同時に胸ぐらを掴まれる響。

先程まで騒がしかった教室はピシャリと静かになる。
「どうしてあんたなんかが無事なの!?――――――人殺しの癖に!?・・・なんで、なんでなのよぉ・・・」
ポロポロと涙を流す女子生徒に、困惑する響。
そこから更に追い討ちをかけるように、周りからボソボソと小さな声が聞こえる。
――――それはとても、嫌なぐらいに鮮明に聞こえる。
「おい、人殺しだ」
「税金泥棒だ」
「そういや沢山お金、貰ったみたいだよ」
「人を殺して金貰えるとか・・・ほんっと、サイテー」
周りの空気が異質な感じになり敵意のようなものを身体にヒシヒシと感じ――――――タラリと、嫌な汗が背中に流れる。
「返してよ・・・あの人を・・・返してよ・・・!」

響は俯き、なにも言えなかった。
そんな彼女の悲痛な言葉と行動に、ゾワりと産毛が逆立ち、教室内の空気が変わる。
周りを、クラスメイトたちを見る。
周りの視線が強くなる。
周りの人が響を見る。
周りの人が異質なものを見るような目で響を見ている。
周りの空気が嫌な流れを作り出し――――――そして、誰かが立ち上がる。
「そうよ・・・そうよ!なんであんたみたいなのが、平然と生きているのよ!」
その言葉に、また1人立ち上がる。
「いっつもボケーとして、学校の行事なんかじゃ碌に活躍もしてないアンタが!茅根(かやね)くんのように他のみんなから慕われてる訳でもないアンタが!――――――なんで、生きてるのよ!」
立ち上がったクラスメイトもまた涙を流し、その言葉には響に一言

も喋らさせないぐらいの気迫と激情――――――そしてなにより、悲しみが込められていた。
その言葉に感化されたのか、クラスの奴らもまた立ち上がり、1人、また1人と響を責め立てる。
「この人殺し！」
「税金泥棒ー！」
「人でなし！」
「学校から出て行けー！」
「――――死んで詫びろー！」
周りの皆が――――生きてる人たちが、響（生き残った人）を責め立てる。
そんな、最悪の光景が目の前に広がっていた。
――――そして、その日を境にクラス・・・いや、学校内や、その周りの人達が変わっていった。

――――とつい1週間前の事を思い出していると壁に書かれた文字が全部消えた。
「っ、と消し切ったか・・・・・むっ、そろそろペンキを補充しとかないとな」
「あ、じゃあ私も出すよ」
次からはもう少し多目に買っとこうと、話しているとガラリと玄関が少しばかり開かれる。
そちらに目を向ければ、響がいた。
「おはよう響」

手を上げて声を揃えて響に、なんでもないような感じに挨拶を、声をかける。
「・・・おはよ、未来、せーくん」
「それにしても、今日も寒いぞ。朝方は温かめな格好にしてたほうが良さげそうだ」
「・・・そう、だね。少し寒いや・・・」
そう言えば、少しばかり肩を竦め、うっすらとだが笑ってくれる響。
だが、その笑顔はぎこちなく、目の下には薄くだが、隈ができている。
「・・・ごめん、こんな朝早くから」
響の目が申し訳無さそうに言う。
――――ズキリと、罪悪感が駆け巡る。
「うん?あぁ、気にすんな、俺たちがやりたいからやってるだけさ」
――――響をこんな状態にしてしまったのは他でもない、俺の、・・・俺たちの所為なのだから。
「それじゃ行こっか響」
「・・・うん」
――――だから、俺たち2人が響を守らないと行けないんだ。
きっとそれが、響をこんな目に合わせてしまった俺たちが出来る、精一杯の贖罪なのだから。

・・・・・・・・・

学校について先ず始めにやる事は机の上に書かれた色んな罵詈雑言を濡らした雑巾で消していくことだ。
これがまだ油性で書かれてないだけまだマシだと思う・・・まぁ、書かれないのが1番だが。
(と言うかいつの間に書いてるんだこれ?・・・俺たちが帰った後にでも書いてんのか?)
マメな事で・・・と心の中で愚痴っていると他の人達が入ってきた。
どこか申し訳無さそうに目をそらす人やジロリと睨んでくる人、関係無いねとばかりにこちらのことを無視する人。
そして後は・・・
「まだいたのか?」
「いい加減学校に来ないでくれる?」
「空気悪くなるでしょ、この人殺し」
このように実際に言ってくる人たちだ。
スッと響を背中に庇う。
・・・それにムカついたのか苛立った声を出す。
「んだよ・・・まだそいつを庇うのか!?」
「あぁそうだが。・・・それに、響は人なんて殺してなんかいないさ」
そう言い放ちそのまま睨めば、チッと舌打ちをし、そいつらはそそくさと自分の席に座った。
ふー、と小さくため息をつき、また2人でゴシゴシと机を拭いて落書きを落とす。
・・・これがかれこれ1週間続いてる今の現状だ。

ーーーーーーーーーーー

あんなにイヤだなーと思ってた授業が、今や安心できる時間になってしまうとは思っても見なかった、と立花響は1人思った。

現在の時間は数学で、チラリと隣を見ればスラスラと問題を解いている黒然誠の姿があった。

・・・彼は自分を助けてくれているしその点は凄く感謝してる。

自分がまだ人を信じれるのは彼ともう一人、小日向未来のお陰だ。

それでも、ふとこう思ってしまう。

(あの2人の平穏において、私は邪魔なんじゃないかな?・)

2人に助けられるたび、そう思ってしまう。

そんな事を言えば彼らはきっと邪魔なんかじゃないと言ってくれるだろう。

――――それでも、2人に庇われるたびにそう思ってしまうのだ。

そんな事を考えてたら、キンコンカンとチャイムの音が鳴り渡り、今日の授業の終わりを告げる。

「はぁ、やーと終わったー」

途端にグダーと机に突っ伏す誠。

その顔には疲れたーと大きく書かれているのがわかる。

お疲れ様、と声をかければ、響もお疲れさん、と返してくれた。

「それじゃあ、3人で帰るか」

「・・・うん」

鞄に教科書類を入れ込み、そのまま未来と合流して帰路につく。

・・・

・・・・・・・・・・

「――――でさ、それをご飯にザバーッてかけるとか言ってさ、それは無しだろってなったな」
「そうかな？私は意外とありだと思うよ？」
首を少しコテンとしながら未来がそう言えば、マジかーと天を仰ぐ誠。
「響はどうだと思う？有りか無しか」
「・・・えっ？あぁ、うーんと・・・有り、かな」
「じゃあ多数決で私の勝ちね」
ふふーん、と少しばかりのドヤ顔する未来に、くっ負けた！と悔しそうに拳を握る誠。
それがあまりにも悔しそうだったから思わずふふっと笑う。
それを見ていた周りの人達からひそひそ声が聞こえる。
「おいあれってよ・・・」
「なんで笑えるのかしらね・・・」
「ほんと、常識知らずな・・・」

「ッ・・・」
聞こえてきたそれに思わず手をギュッと握りしめ、笑顔は引っ込み顔を俯かせる・・・すると両隣からフワリと優しく両手を握られた。
「大丈夫、大丈夫だよ、響は笑ってもいいんだよ」
「そうだぞ、周りの言葉なんか気にすんな。・・・どっかの誰か達から笑うなと言われても、俺たちは笑ってもいいって響に何回でも言ってやるさ」

なんてったて友達だからな（ね）と2人は笑ってそう言った。
「2人とも・・・・・うん、ありがとう。ちょっとだけ、元気でたよ」
そりょ良かった、そう言って両手が離される。
離れていった手の温もりに少しばかり名残惜しいな、なんて思っていると自宅に着いた。
「おっ、珍しくまだ書かれてはいないっと・・・それじゃ響、また明日」
「うん・・・また明日ね2人とも」
そう言い2人も自宅に向かって歩き出す。
「っ・・・」
本当はもっと一緒に居たい。
だが、あまり迷惑はかけれない。
出かけた言葉を飲み込み、響はそっと玄関を開けて家に入った。

第9話

響を無事自宅に送り届けた俺たちはそのまま自宅に直行した。
「それじゃまた明日ね、誠くん」
「おう、また明日な未来」
家の前で別れ、勢いそのまま家の鍵を開ける。

「あら、お帰りなさい誠」
自宅の玄関を開けるやいなや、空になった洗濯籠を持っていた了姉から声をかけられた。
いやまぁ、別に居たって良いのだが、基本的に居ないのがデフォなので。
「・・・ただいま？」
「なんでそこで疑問形なのよ？」
腰に手を当て、失礼しちゃうわねー、と言う了姉。
とここでなにやらリビングから美味しそうな匂いがする。
匂いから察するにこれは・・・カレーのようだ。
「これ、了姉が作ったの？」
「そうよ、たまには作らないと腕が鈍るじゃない」
そんなもん？と聞けば、そんなもんよ、と返され出来てるから手洗ってらっしゃいねーと、グイグイっと背中を押された。
・
・・・・・・
・
「「ご馳走さまでした」」
ふー、と息を吐き、後で洗っとこと思い、使ったお皿などを水に浸けておき、何となくテレビをつける。

街頭インタビューなのだろう、中年の男性がこんな事を言っている。
『政府の人達もなにやってるんですかね？早くあの犯罪者たちを捕まえてくださいよ。お陰で全然寝れやしないよ』
ピッと番組を変える、次は高校生ぐらいの女性が泣きながらインタビューに答えてる。
『私の親友はあのライブで殺されたんですよ！・・・どうして誰も裁かないんですか!?』
ピッとテレビの電源を落とし、小さくため息をついた。
どこもかしこもあのライブで生き残った人たちを非難する声が多数で、庇ってる人がいればその人たちも非難の対象者扱いになってしまう。
どうして誰も、生きてくれてありがとうって言わないんだろうか。
「はぁ・・・どうして、みんなが分かり合えないのかね？」
結局、考えたところで答えなんて出なくて、ため息と共にそう呟いた。
「それはね、人類が呪われてるからよ」
「――――――ッ!?」
背筋がゾクリと寒くなる。
いつの間にか後ろに居た了姉から意外な答えが返ってきた。
だが、その声色がいつもとは全然違って、低くて、そしてなにより、とても悲しそうだった。
「呪われて・・・？」
「ええ、それも気が遠くなるような遥か昔に、ね」
そう言い、了姉は空に浮かぶ月を見上げる。
空気はピリピリとして、肌にチクチクと刺さる。
「バラルの呪詛、それにより先史文明の人々は統一言語を失い、バラバラになったのよ。そして互いに意思疎通が出来ず・・・最終的には殺しあったわ」
ギュッと了姉は拳を強く握る。
なんだか何時もの了姉らしくないな、と思って見ていると不意に、

了姉の姿が一瞬、夢の中で見た誰かと重なった。
（えっ？）
目を擦ってもう一度見ればそこには月を見上げていた了姉と目があった。
「・・・なーんてね、ちょっと真面目に言って見ただけよー」
こちらにウインクをし、何時もの明るい顔になる。
ピリピリとした空気が緩やかな空気に変わる。
「・・・ちょっとの割には結構気合い入ってたよ了姉」
「いーじゃない、たまには真面目に言ったて」
昔はもっと可愛げがあったのにーなんて言葉はスルーしてコップの水を飲んでいると、ピリリっと携帯から連絡が入る。
かけてきた相手は・・・響？
手早くリビングを出てから電話に出る。
『どうしたんだ響？なにかあったか』
『・・・えっとさ、帰り道で、お父さんみなかった？』
お父さん見なかった？その言葉に嫌な予感を感じつつ、響を送った後の帰り道を思い出すが、特に見た記憶は無い。
そう伝えれば、どうも今日は会社に来ていないと連絡があったらしく、携帯にも繋がらないらしく、このまま帰ってこなかったら明日、警察に捜索願いを出すらしい。
『・・よしわかった、俺の方でも洸さんを探して『ねえせーくん』・・・どうした？』
響の声が震えてた。
『お父さんが居なくなったのは私のせいなのかな・・・？』
ギュッと携帯を持ってない方の拳を握りなるべく安心させる声で響を励ます。
『そんなわけないだろ？響は、なにも悪くない。それに洸さんだって、今日は疲れてしまっただけで案外すぐに帰ってくるんじゃないか？』
明るく、だが現実味が無いことしか言えない自分に辟易する。
『そう、かな・・・うん、そうだと良いかな・・・。ゴメンね、急に電話して』

『気にすんな、電話したくなったらいつでもしてこいよ?そんときゃ未来と一緒に通話しような』
『うん・・・ありがと、せーくん。また明日ね』
『おう、また明日』
ピッと電話を切り、そのまま自室のベッドに寝転がる。
響を守ると言っても何も出来てない自分に、無力だな、と自嘲する。
そのまま横になって目を閉じ・・気づかぬうちに意識は落ちていった。

風の音が聞こえる。
不思議に思い目を開けて見れば、彼、黒然誠は祭壇の前に立っていた。
(・・・どこだ、ここ?)
と誠は記憶を探るが、サッパリ記憶にないので、本当に知らない所なんだろうなと思い、とりあえずは祭壇を調べてみる。
全体的に少し古ぼけていて、そこの中央部には青い宝玉がついた剣が刺さっている。
・・・その剣には見覚えがある。
そう、たしかあれは――――
「竜殺しの剣さ、黒然誠くん」
「ッ!?」
背後から男の声が聞こえて振り返り、思わず距離を取る。
そこにら身長は１８０ぐらいの白髪で、柔和な笑みを浮かべた黒色の鎧を見に纏った男性がいた。
恐る恐る誠はあなたは?と聞けば彼は少し困った顔をする。
「んー・・・僕はこの剣に残ってる残留思念、かな?」
「残留、思念?」

「そ、あらゆる不条理を打ち払うこの剣の力を、君に託す為にね」
力を託す為、そう彼は言った。
・・・その力があれば、今の不条理な現状を打破できるのだろうか？
「なら――――」
直ぐにでも力が欲しい、そう言う前に彼から待ったをかけられた。
「でも、今はダメだ。君がそんな状態じゃ、直ぐに力に溺れてしまうよ？」
「っ、それでも！」
「・・・痛い目にあうよ？」
・・・だが、それでも諦めきれない彼は剣を引き抜く為に祭壇を駆け上がり、剣の前に立ち手を伸ばす。
力が欲しい、その一心で剣を抜こうとするが瞬間、バチっ！と勢いよく剣に弾かれ、その場で尻餅をつく。
「ッ・・・！」
指先はピリピリと痛むが、それよりも剣にすら明確に拒否された事の方が痛かった。
カツカツと音を立てながら彼も後ろから来た。
「ほら見ろ言わんこっちゃない。これで分かっただろ？今の君じゃあダメなんだ」
「なら・・・なら、どうすりゃいいんだよ・・・？」
泣きそうな顔でそう誠が言えば、彼はそうだな・・・と呟き、
「君が本当に欲しいのは力だけなのかい？」
ヒントはここまでと彼はそう言い、パチン、と指を鳴らす。
瞬間、誠の視界がぐにゃぐにゃと歪んで身体から力が抜けていき、その場で仰向けで倒れる。
「え・・・あ・・・」
「次に会うときが、君の答えを聞くときだ。それじゃあね、黒然誠くん」
バチン、とテレビの電源を消すかのように誠の意識は真っ暗になった。

ーーーーーーーーーーーーーー

ピリリリと、目覚ましが鳴り響く。

「っ・・・」

ピリピリと指先が痺れるのを感じながら、目覚ましを止める。

・・・どうもそのまま寝てたみたいだ。

そっと目を閉じ、思い出すのは先程の夢。

あの人に拒否され、それでも諦めきれない無様な俺は剣を取ろうとしたけど、その剣にさえ拒否された。

「うん・・・カッコ悪いな俺ー」

ゆっくり目を開け、はぁー、と大きくため息を吐きながら、カーテンを開ける。

外はあいにくの曇り空で気が滅入る。

「・・・飯食べて、さっさと響迎えに行くか」

さ、切り替えていこう、なんて自分に言い聞かせながら、下のリビングに降りた。

・・・・・・・・

了姉は仕事なのか居なくて、テーブルにはトーストとハムエッグが置いてあった。

ありがとうと感謝しつつ手早く食べて、いつも通りに未来と一緒に響を迎えに行き学校に向かう。

どうも未来にも聞いてたらしいが、俺と同じで見てなく、帰ったら

お母さんにも聞いてみるねとの事。
（響のお父さん、どこに居るのやら・・・）
響送ったら探してみるか、なんて考えて上履きを取ると、指先に痛みが走る。
「っ～!?」
見てみれば、指先から血が出てる。
もしや、と思い上履きを見てみれば、踵の部分に画鋲が仕込まれていた。
「せーくん!?大丈夫!?」
「こんな痛み、へっちゃらさ。それよりそっちは?」
「・・・私たちの方にもあったよ」
聞けば2人の方にも画鋲が仕込まれていた。
実際に被害が俺だけで良かった、なんて思っていると、周りからひそひそ声が聞こえる。
「きっとさ、罰が当たったんだよ」
「可愛そうなだな黒然のヤツ。このままだともっと酷い目にあっちゃうんじゃないのー?」
「いやいや、もう酷めにあってるでしょ?あんな奴の味方なんてしてるからだよ。・・・きっと、立花響が不幸を呼び寄せてんだよ」
「違いないね、このままだと小日向も危ないんじゃないの?」
修正、ひそひそ声じゃなくて普通に聞こえる音量で騒いでた。
未来は何か言おうとしたが、響が俯いて小さく、2人ともゴメンと謝る。
未来と顔を合わせ、別にお前のせいじゃないかんな、と少しばかり乱雑にワシャワシャし、仕込まれた画鋲を取ろうとするが、接着剤でつけたのか上手く取れない。
（クソっ、接着剤なんて使いやがって、やるにしてもテープでやれテープで・・・）
はぁ、と小さくため息を吐き、教室で取ろうと諦め、3人で教室に向かう。
「ほら、行こう響?」

「うん。・・・・どうしよう、私のせいで2人が・・・」

この時、響のこの呟きをきいてたら少しばかり、未来は変わったのだろうか？

――――――――――そしてこれより先の数日後、響が俺たちの前から姿を消してしまった。

第１０話

曇った空からはポツン、ポツンと雨が降り出してきた。
すぅ、と息を吸って、声を張り上げる。
「・・・っ、響ー！どこだー！」
遠く叫ぶが、響の声は帰ってくる訳もなく、その場で少し止まって息を整え、また闇雲に走り出す。
――――――コトの顛末は1時間前に遡る。

・・・・・・・・・・

響が家出したと聞いたのは、俺たちがいつも通りに迎えに行った時だった。
いつもなら響が顔を出す筈なのだが、今日に限って、響の母親が顔を出した。
「おはようございます「貴方たち、響を見てない!?」へっ？」
ガシッと両肩を掴まれ鬼気迫る表情でそう言った。
突然の事態に、何が何やらサッパリ分からず、首を横に振って、見ていないと伝えれば肩を離しポケットから折り畳められた紙をコチラに手渡す。
何やら嫌な予感を感じつつ、未来と目を合わせつつ、恐る恐る紙を広げる。
広げられた紙には震える字で短くこう書かれていた。
『これ以上お母さん達や2人に迷惑をかけれません。さがさないでく

ださい。響より』
「こ、これって・・・」
「か、完全に家出だよ誠くん!?」
未来が焦った顔で俺を見る。
じんわりと嫌な汗が背中に伝い、思わず紙をぐしゃぐしゃにしそうになる。
「そ、そうなのよ!響がどこに行ったか分からなくて。家の鍵と携帯も置いて行ったみたいで、貴方たち2人なら何か知ってるかもって・・・!」
心臓がドクンドクンと煩く鳴り――――――脳裏に想像したくもない事が頭を過る。
「っ!あんのバカ・・・!」
「わっ、あっ、誠くん!?」
そう思ってしまったら、いても経っても居られず
、鞄を未来に押し付け走り出す。
とにかく思い当たる場所を手当たり次第に見て回る。
公園や路地裏、近所のお寺などをみて回ったが、1時間経過した今でも一向に響の姿は見えていなかった。
・
・・・・・・・・
ポツン、ポツンと弱く降っていた雨は次第にザーと強く降り出した。
傘なんて手元に無く、雨で濡れた制服が重くなって体に張り付き、走ると鬱陶しく感じるがそれを無視してひたすらに走る回る。
(早く・・・!早く見つけないと、取り返しがつかなくなるぞ・・・っ

!?)
がむしゃらに走っているとポケットに入れてたスマホから電話が入る。
未来か?と思い見てみれば了姉からだ。
・・・正直言って出なくてもいいような気がするが、ここで無視しておくと後が怖いので、適当に屋根がある所に行き、息を整えてから電話に出る。
「・・・もしもし」
『ちょっと誠?学校から来てないって連絡来たけど、貴方いまどこにいるの?』
心配そうに了姉の声が聞こえる。
チラリとスマホの時計を見れば、とっくに学校が始まる時間を指していた。
なんだか申し訳ないなと思ったが、ここは少しばかりの嘘をつく。
「うん、ちょっと体調が『嘘おっしゃい。何年貴方を見てきたと思うの?声だけで察しがつくわよ?』うっ・・・」
所要時間数秒とかからずバレたよ、ちくせい・・・。
なんと言うべきか悩んでいると、了姉の方から声をかけられた。
『大方、貴方の友達に何かあったんでしょ?』
ドキリと心臓が跳ね上がる。
・・・なんでわかった?と聞けば、姉の感、らしい。
恐ろしきかな姉の感・・・。
「あぁ、そうだよ友達に何か会ったんだ。だから早く見つけないといけないんだ」
『それで?誠はその子と会ってどうするの?』
「会って・・・それは・・・」
言葉に詰まった。
響と会って俺は・・・・なんと言えばいいんだ?
なんで逃げたと怒ればいいのか?ごめんねと謝ればいいのか?
もっと一緒にいてあげれば良かったのか?
――――それとも、もう何もかもほっぽり出して逃ればいいのか

？

頭の中はぐるぐると回るが、一向に答えは出ない。

1分の間か、はたまたそれ以上の間か言葉を出せずにいて、ようやく紡げた言葉は、

「・・・・・分からない。分からないんだ」

俯き、その場に項垂れるようにそう言葉を絞り出す。

そして、縺れた糸を解くように、ぽつりぽつりと自分の中にあった思いを呟いてく。

「最初はさ、罪悪感からだったんだ。あの時俺たちが誘わなかったら、きっと今でも3人で笑っていて、こうはならなかったんじゃないのかなっ？てさ」

最初は罪悪感から始まった。

学校に復帰して早々に響のイジメが始まってしまい、回りの人達が、状況が、どんどんと変わって行った。

そんな中でも俺たち2人は、響の手を引いて歩いた。

「・・・そんでもって、2人でアイツを守ろうと誓って、今日までがんばって守ってきたけど・・・結局、1番に守るべき心を守れてなかったんだ・・・」

引いていた手は気づけば離されていた。

だから今こんなことになってしまった。

頭の中は色んな思いがぐちゃぐちゃに混ざりまくって、自分の気持ちが分からなくなってくる。

電話の向こうの了姉が口を開く。

『・・・誠、それじゃあ貴方は守るのを止めるの？』

「――――――――」

頭が真っ白になりそうになった。

守るのを止める。

それは響を、未来を裏切るのと同義だ。

そんなバカな事、何より自分自身が許せるわけがないだろう。

「――そんなの、そんなのできるわけないだろ!?アイツは俺たちの親友で、何に置いても、1番守らなきゃいけないんだ！」

・・・そうだ。
あの日、未来と一緒に響を守ると誓ったんだ。
アイツの身に降りかかる理不尽な事、その全部から、２人で守ると。
「――――守るんだ。たとえ後ろ指刺されようが、ほかの人たちが否定しようと。俺は――――」
響だけの味方を貫くんだ。
そう思ってしまえば、心にあった重圧のような物がスッと軽くなり、視界か広がった気がする。
『だったら、守り抜きなさい。男の子がそう言ったんだもの、絶対に守り抜きなさい』
「あぁ、ありがと了姉。・・・それじゃあ、そろそろ行くよ」
頑張りなさいね、とエールを送られ、ピッと電話を切る。
――――絶対に見つけて陽の当たる所に連れて行く。
その思いを胸に、雨の中を走り出した。
（どこに響が居るんだ？響が居そうなところは全部走って回った。あと他に行ってない所は――――）
ピリリリっと電話が鳴る。
今度は未来からだ。
走りながら電話に出る。
「もしもし、どうした未来」
『響のいる場所が分かったかも！』
「っ、場所は！」
聞けば、共同墓地よりさらに向こうにある展望台。
今いる所からなら・・・１０～２０分もあればつくか。
「未来は先に向かっててくれ。俺も今から向かう」
『わかったよ。先に向かってるね』
進路を展望台に向けて全力で走り出す。

――

気づけば、立花響は1人ポツンと展望台に立っていた。
弱かった雨は次第に強くなって降り注ぎ、数分と待たずに全身が濡れ、服は体に張り付いて次第に冷えていく。
だが彼女はそんな事を無視して、今日までの事を振り返る。
最初の方は3人で笑い合った事が過ぎるが、次第に出てくるのは辛い思い出だけだった。
「・・・未来・・・せーくん」
吐く息は白く、手は既に冷え切っていた。
ここなら2人は来ない。ここなら2人に迷惑をかけない。ここなら2人も傷つかない。ここなら――――――2人は暖かい所にいられる。
そう思ってここまできたが、
(でもやっぱり、独りぼっちは寂(寒)しい(い)よ)
そう思うとギュッと心が軋み、その痛みと涙の行き場は何処にもなく、
「・・・っぁ・・・っ・・・!」
ついには溢れポロポロと流れ出した。
寒い、辛い、嫌だ、一人ぼっちは寂し過ぎる。
色んな思いが溢れて、止まらない。
耐えれず逃げ出してしまったが、それでも最後の一線を超えずにいたのは天羽奏の残した、生きるのを諦めるな、という言葉。
それが小さく楔となって響に、最後の一線を踏み込めさせないでいた。
そしてもう一つ。
響が、本当にダメな時にこそ、彼女はやってくるという事を。
「ひびきー!!」
背後から、声が聞こえた。
幻聴かとおもったが、声だけでなく足音も聞こえる。
見れば息を切らせながらもこちらに駆け寄る、小日向未来の姿がそこにあった。

未来が響を見つけたのは本当に偶然だった。
彼女もまた響が居そうなところを走りまわって探している時、偶然にも近所の人たちが、共同墓地のあたりで響らしき人を見たという話をしていたからだ。
他に目星もなく、藁にもすがる思いで、走り出し、向かう道中、黒然誠に電話をしておいた。
パシャリ、パシャリと水たまりを踏んで靴が冷たくなるが構わず走りぬけ、
「ひびきー!!」
ポツンと項垂れるように立っていた立花響を見つけた。
「はぁ・・・はぁ・・・っ、や、やっと見つけた・・・!」
響をこの目で見たとき、未来は心の底から安堵した、まだ一線を踏み込んで無かったと。
ここに来るまでに色々と考えていたけれど、思い浮かんだ言葉は一つだけ。
「響、帰ろ?」
優しく声をかけて歩み寄る。
「来ちゃ・・・来ちゃダメだよ、未来!」
それを今まで聞いたことない必死さで、響は拒絶した。
静かに足を止める。
響の俯く姿が、自分は罪人だと言っているようで・・・その姿は見ているこちらも辛いが何より、心が痛い。
そして、響が顔を上げない限り、自分1人だけではこれ以上近づけないという予感がする。
「お願い、だから・・・こないでよ未来・・・!」
雨の冷たさか、または親友にこんな事を言う罪悪感からか、響の声は震えていた。
けれど、その震えを止めるために、未来は――――――私は、ここに来たんだよ響。

「帰ろう、響。そんな寒い所に居たら風邪ひいちゃうよ」
ここ(陽だまり)から優しく手を伸ばす。
だが、
「無理だよ、行けないよそっちには・・・！」
雨に濡れた髪を揺らしながら、彼女は言い捨てた。
「だって・・・みんな・・・みんな私が居なくなるのを望んでいるんだよ・・・？」
「そんな・・・そんなこと――――――」
「でもみんな！死ねって・・・死ねって、死ねって、死ねって、死ねって！みんなが、私に言ってくるんだよ!?」
自分を罰するように肘に爪を立て、その場で両膝をつく。
そうでもしないと保てない姿を見て、未来は己の無自覚加減に嫌気がさす。
(響の心は、こんなにもボロボロで傷だらけ・・・！なのにどうして、私は今まで気付いてなかったの!?)
顔を上げ、生きるのが苦しい、辛いと叫ぶ。
それでも未来は、響に生きて欲しいと、幸せになって欲しいと願って必死に叫ぶ。
・・・響の目は、あの時諦めた方が良かったと言っている。
響の心は崖っぷちで、最早未来1人の声では届かない。
だから――――――
「ありがとう響。生きててくれて」
本当にギリギリのタイミングで、未来1人では行けなかった所をあっさりと超え、彼、黒然誠が息を切らせながらも、響の前に立った。

――――――

「ありがとう響。生きててくれて」
言葉をぶつける。

生半可な言葉なんかじゃ伝わらない。
なら本気の言葉を、本気の思いを、響にぶつける。
「せい・・・くん・・・」
「生きてくれてありがとう。俺は何度でも響に言い続ける」
膝を折って、響と真っ正面から向かい合う。
癖のある髪は雨のせいでペタリと張り付き、目からはポロポロと涙が溢れている。
「響に生きて欲しいと願うのは俺だけじゃない――――そうだろ、未来」
「――――あ――――」
ギュッと冷え切った両手を2人で握り、ちゃんと生きてて欲しいと願う者たちを、陽だまりの暖かさを、響に認識させる。
「生きるなと10回言われたら、生きて欲しいと11回、100回言われた101回、そう言われるたびに、俺たちは響に生きていいんだと言いづける」
「でも、辛いよ・・・苦しいよ・・・!」
絞り出すように言葉を吐き出す。
握った響の手は震えていた。
「・・・もうちょっとだけさ、頑張ろうよ響?」
もう、後には引けない形で未来と2人で、響に希望を見せる。
「みく・・・」
「今はまだ、他の人たちとこうやって手を繋げる事が出来ないけどさ」
優しく、握る手を強くする。
「いつか未来に人は繋がれるって、私は信じてる、だから――――」
冷え切った体を、2人で抱き寄せる。
「あ――――」
回した腕はとても頼りなかった。
俺1人の腕では、とても支えきれない。
・・・だが、俺は1人じゃない、未来がいる。
だから支えれる。
「「誓うよ、2人で――――俺(私)たちは、ずっと響の味方だ(よ)」」

「せーくん・・・みく・・・わた、し、わたし・・・！」
そのまま抱きしめられる形で、響は泣きじゃくる。
泣いて、泣いて、泣いて、泣き続けていると涙の量は減っていき・・・
次第に泣き疲れたのかそのまま、スースーと寝息を立てる。
ふと空を見上げれば、先程まで強く降った雨は次第に弱まっていき、雲の間からは日差しが漏れ、次第に空は青空に変わり、虹が一つかかっていた。
「それにしても、安心して寝てるね響は」
「だなっと・・・」
寝てしまった響を背中におぶる。
スースーと寝息が耳に当たってこそばゆいが、それでも響がここにいてくれている、今はそれだけでよかったと心からそう思う。
「それじゃあ、帰るか3人で」
「うん、3人で」
きっとここからが本当の戦いだ。
負けたらそこで終わりで、しかもミスは許されない。
タイムリミットは無限で、それでいて敵は多数。
どれが正解、不正解なんて分かんなくて、どれから手をつければいいかもサッパリだ。
味方なんて全然いないが、それでも、負ける気は毛頭無い。
「やるぞ、未来」
「うん、やろう誠くん」
だから、こんな理不尽なんかに負けてたまるかと、世界に向けて宣戦布告をした。

第11話

未来と誓った寒い冬は過ぎ、季節は春になった。
辺りは暖かい陽気に包まれ、こういう日は日向ぼっこに限るよなーと老人みたいな事を思ってハンカチで手を拭きながら廊下を歩いていると突然、ドンッ!と押されて壁に追いやられ、胸ぐらを掴まれ囲まれる。
人数は6人程で、こっちは俺ただ1人。
俺の方は彼らとは面識はまるっきり無いので別のクラスの奴らだろう。
大方、響の味方をしている俺が気に喰わないからみんなで囲ってボコろうぜー、と言ったところか?
なんて考えていると、周りの奴らの何人かが、ポキポキと指を鳴らす。
それで脅しでもかけてるのだろうか?
「お前さ、キモいよ。立花の味方なんてしてさ」
「被害者の気持ち考えてるのか?」
「お前みたいなのが居るから空気が悪くなるんだ」
「だから、俺たちが粛清して、二度と来させないようにするって訳さ」
だからこれは正しいんだ、と彼等は言う。
チラリと周りを見れば、ひそひそ声で何かを話していたり、中には隠れて携帯を構えているやつもいた。
「はぁ・・・」
ハンカチをしまって、小さくため息を吐き、
「邪魔だ、退け」
ちょっとばかし睨んで、ドス効かせた声でそう言って、男子生徒たちを押し除ける。
待てよ!とか、逃げるのか!なんて声は無関心を貫いてさっさと歩く。
そのうちに、声は陰口に変わっていき、どこかに去っていった。
「おい、あれってよ・・・」

「アイツでしょ・・・」
「関わらないでおこう・・・」
ひそひそ声が喧しい。
本当に、自分たちが正しいことをしてるんだって思っているのなら、このまま追って真正面から言えばいいのに、なんて思いつつそのまま歩いて、色々と悲惨なことになってるであろう自分たちの下駄箱をスルーし2人が待っている裏口に向かう。
「あっ、誠くん。お帰り」
「ただいま。悪いな待ってもらって」
響は気にしないで、と言わんばかりに俺の鞄を投げ渡してくる。
軽くキャッチし、隠しておいた靴を履いて裏口から学校を出る。
ピューと風が吹き、思わずマフラーを口元まで上げる。
「暖かくなってきたとは言え、まだ冷たいな・・・」
「そうかな?誠くんが寒がりなだけだと思うけど。ねっ響?」
「うん、もう時期的にはマフラーいらないと思うよ?そんなに寒いならマフラーを新しいのに買い換えればいいんじゃないの?」
ほら結構ボロボロだし、と解れている部分を見せてくる。
いや、それは分かっているんだが、
「一応まだ使えるし・・・それに、家族が残してくれた数少ない物だからな」
「あっ・・・ごめん、そんなつもりじゃ」
シュンと、申し訳なさそうに顔を曇らせる。
「いいって、気にすんな。こんなの、ただの拘りみたいなもんだから」
なんでもないようにそう言い、コツコツと先に歩く。
「・・・強がっちゃってもう」
なんて、未来の声は聞こえないフリして。
・・・・・

・　・

カチャンと鍵を開け、家の中に入り、手早くリビングの暖房とストーブを入れ、ついでにテレビも付ける。
テレビの横には写真立てがあり、そこには肩車されているまだ小さい頃の俺と、まだ生きていた頃の父さんと母さんが写っていた。
――――――俺の父さんと母さんはどこにでも居るごく普通の夫婦だ。
良いことをしたら褒め、悪いことをしたら叱り、何でもないことで笑ってくれたりと、自分が知る限り、本当にごく普通の人たちで、そんな2人が俺は好きだった。
だが、ある日突然2人はこの世を去った。
理由は単純、不幸な事に交通事故に巻き込まれてしまったのだ。
（・・・確か原因は居眠り運転だっけか）
写真立てを手に取り、軽くホコリを取り、また元の位置に戻しておく。
スルスルっと慣れた手つきで首に巻いたマフラーを取り、畳んでおく。
テレビからは来週1週間の天気を予報が流れ・・・朝昼は日差しが出て暖かいが、夜は急に冷えこむ、との事。
（となると、なんか暖かいものが食べたいが・・・）
なんかあったかなー？と冷蔵庫を覗いてみたものの、昨日の余り物ぐらいしか入ってなかった。
これは明日買ってこないといかんな、と結論付け、とりあえずご飯炊くか、と1人呟いていると、寒い寒いと言いながら珍しく了姉が家に帰ってきた。
「あれ？お帰り了姉。ごめんけど、今日のご飯は昨日の余り物だからね」
「余り物でも良いわよー、誠の料理は美味しいからねー」
暖かいストーブに吸い寄せられながら、中々に嬉しいことを言って

くる。
冷蔵庫に入ってる缶ビール飲む?と聞けば、今日は珍しく、飲まないわと言った。
聞けば、こっちに寄ったのは家に置いといた資料が至急必要になったから、との事。
「しかもそれの関係上、もしかしたらまた何日か帰れない日があるかもしれないわ」
「んっ、りょーかい。じゃあタッパに入れとくから、休憩する時にでも食べて」
はいはーい、といった感じに了姉がストーブから離れ、二階の自室に直行、数分もせずに降りてきた。
こちらの方も、余り物のおかずを手早くタッパに詰めておき、はい、と手渡す。
「それじゃ行ってくるわね」
「いってらー。事故に気をつけて」
パタンとドアが閉まり、家にまた静けさが戻った。
カチャンと鍵とチェーンをし、リビングに戻った。

・・・・・・・・

カチャカチャと、お湯で食器を洗っていると、ピロンと、誰から連絡が来た。
んー?と思い見れば未来からで、
『誠くんって、明日って何か予定ある?』
と書いてあった。
明日は・・・まぁ強いて言えば、食材を買いに出かけるぐらいだし、

これぐらいは予定とは言わないか。
『予定か？ないけど、どっかに出かけるのか？』
『うん。ちょっと街の方まで買い物にでも行こうかなってさ。響の方は予定あるみたいだし、1人で行くならいっそ誠くんでも誘おうかなって』
『成る程。それで何時頃に行くんだ？』
『9時ぐらいかな』
りょーかい、また明日ね、と何気ないやりとりの返信してスマホをポケットにしまい、残りの洗い物をちゃっちゃと終わらせ、風呂の支度をして、明日に備えて寝るとしよう。

草木も眠る丑三つ時。
月が煌々と輝くこの時間に、ズドドドド！と似つかわしく無い銃声が鳴り響く。
それが半透明の怪物、ノイズに当たりはするが、位相差障壁に阻まれ威力は減衰、ほぼ無効化される。
分かってはいるが、自衛隊の1人、津山一等陸士はクソッと悪態をつかずにはいられない。
ガシャンと弾切れしたマシンガンを手早くリロードし、ノイズに向かってまた打ち出す。
辺りには薬莢と炭素の塊が転がり、また1人、また1人とノイズ諸共炭素の塊になる。
心臓はバクバクと煩く鳴り響き、一刻も早くその場から逃げ出したい気持ちになるが、今ここで逃げてしまったら、麓の町にノイズらが流れ込み取り返しのつかない自体に陥ってしまう。
（そんなこと、あってはダメだ・・・！）
震える止まりそうな心を勇気で奮い立たせ、ノイズが自壊するとき

を待つが、ちょうど弾切れのタイミングで、槍の形に変形したノイズが、津山に突撃してきた。
マズいッ！と思うと同時に横に避けようとするが、変形した相手の方が早く、避けるのが間に合わない。
（――――――）
思考が空白になる。
この一撃が当たれば、自分はアイツ諸共炭素の塊になる。
これは、ただの人間には防ぐ術はない。
そう――――――――普通の人間には。
［絶刀・天羽々斬］
「――――歌？」
銃声と悲鳴しか聞こえない戦場（いくさば）に歌声が響くと同時に青い閃光がノイズをかき消した。
青い髪が月光に照らされる。
その手に持つ刀でノイズを切り伏せ、チラリと津山に一瞬だけ顔を向け、そのままノイズに向かって、歌いながら駆ける。
凛とした、それでいてまだ少女の面影がある声で彼女、風鳴翼は歌う。
それにより先ほどまで半透明だったノイズが歌声によって調律され、強制的にこちらの物理法則下に引き摺り込まれる。
そのまま、だん！と踏み込みノイズを横一線に切れば、ノイズは炭素の塊に変わっていった。
それを尻目に次のノイズの元へ向かう。
こちらを殺す為か、臆せずにノイズの何体かがこちらに腕を伸ばして来たり、槍のような形に変形して突撃してくるが翼は足を止めずにチャキ、と手に持つ刀を握りしめ、
「はぁ！」
そのまま斬！と振り抜き、青色の斬撃、蒼ノ一閃を放つ。
斬撃はそのまま槍に変形したノイズ諸共、まだこちらを視認してい

なかったノイズまで炭素の塊と化す。
不意打ち気味に背後から来たノイズも、知ってるぞと言わんばかりにくるりと逆手に持ち替え突き刺す。
音もなく消えたノイズを気にも止めずただひたすらにノイズを切り裂いていく。
その様はまさしく絶刀、なんて津山が思っていると助けに来た同僚の1人がぽつりと呟く。
「アレが、特異災害対策機動部二課が保有する、シンフォギアか・・・」
「シンフォギア・・・あの子がか」
コクリと同僚はうなずき、津山は再び翼の方を見る。
自衛官たちより翼の方を脅威と見做したのか、この場にいるノイズは全てが彼女を囲った。
その数は全部で４～５０と言った所、だが彼女はそれを気にせずに、その場で逆立ちし横回転すれば脚部のブレードが展開、一気にノイズを切り裂きながら移動。
ある程度数が減っていくと、体勢を戻し剣を上に向ければ上空から一気に大量の剣が出現、それを一気に射出し、残ったノイズを刺し貫く。
そして辺りは静寂に包まれる。
この間５分もかからずにこの場にいる全てのノイズを倒し斬った彼女は、静かに息を吐きピッと通信を二課本部にかける。
『こちら、片付きました』
『ご苦労だったな翼。帰投してくれ』
了解ですとピッと通信を切り彼女は一人、その場を去る。
「あっ・・・君！」
津山が声をかけると、翼はピタリと足を止め振り返る。
「・・・なんでしょう？」
「ありがとう助けてくれて！」
ぺこりと頭を下げ津山は翼に感謝の意を示す。
「・・・いえ、防人として、当然のことをしたまでなので」
それでは、と軽く会釈し、今度こそ翼はこの場を去る。

もうすぐ暖かい春が来るというのに、風は冷たく、肌寒い。
ギュッと胸元にしまっておいた片翼のペンダントを握り、ぽつりと呟く。
「一人じゃ寒いよ、奏・・・」
もうこの世にいない彼女の名前を小さく吐き出し、彼女は1人、バイクに跨った。

第１２話

ピリリリ！ピリリリリ！と喧しく鳴り響く時計を勢いよくスパァン！と叩き込み、のっそーりとした速度で布団から出てカーテンを開ける。
外はあいにくの灰色の空で・・・天気、悪いのかな、なんて思っているとズキリと、鈍い痛みが走る
「・・・ッ！」
・・・頭痛薬あったかな？と思いつつリビングに降りる。
自宅に置いてある薬品箱から頭痛薬を一粒取り出し、それを水と一緒に飲み込み、数秒したら痛みは引いて行った。
ポチッとテレビを付けて今日の天気を確認すれば、今日一日ずっと曇りらしく、気温もそんなに高くないとか。
昨日は晴れとか言ってたのに、やっぱ鵜呑みにしちゃいかんねと思い、ポチポチッと適当にチャンネルを変え、朝の支度を始めた。

・・・・・・

「行ってきますっと・・・」
マフラーをしっかりと巻き、手袋も付け、バックに折り畳み傘と念のため頭痛薬が入った薬品ケースを入れたのを確認してから、カチャンと鍵をかけて家を出る。
・・・止まったと思った頭痛が鈍い痛みを主張し、陽が出てないのも相まって余計に気が滅入る。
小さくため息を吐いてると、おはようと、横から未来が挨拶してきた。
こちらも軽くおはよ、と返し２人揃って駅へ向かう。
「ため息なんて吐いてどうしたの？」

「んー？・・・あぁ、天気悪いなーって思っただけさ」
「確か今日一日中だったけ？」
そうだなと返せば、未来があっ、と声を上げる。
「そういえば、今日のニュースでやってたけど、近くの山でまたノイズが出たらしいよ」
「ノイズがねぇ・・・」
ノイズと言われて頭を過ぎるのは、あのライブでノイズと戦っていたツヴァイウイングの２人だ。
（・・・そういえば）
ツヴァイウイングで思い出した。
テレビで報道などがされていたが、あのライブの後、天羽奏さんが居なくなってしまい、ツヴァイウイングは実質的に解散、今は翼さん一人で活動してる、だっけか。
なんてことを話しつつ歩いていけば、バス停に着いた。
「そういや、結局街までなに買いに行くんだ？」
ふと疑問に思い聞いてみれば、刺繍糸を買うらしい。
刺繍糸？と聞き返せば、どうもミサンガを作るようだ。
「ミサンガって、切れたら願いが叶うって、あのミサンガか？」
「うん、そのミサンガで間違い無いよ」
「ふーん、陸上部の願掛けにでも作るのか？」
なんて言えば、ピタッと未来は固まり、えーとね、と少し言いにくそうにして、驚かないでね？と聞いてきた。
？と頭に疑問符を浮かべつつ、とりあえずコクリと頷く。
「実は昨日、辞めて来ちゃったんだよね、陸上」
なんて、爆弾発言をさらりとかました。
「・・・・・」
驚かなかった、と言えば嘘になる。
未来はきっと俺たちが見えない所で、１人で悩んで悩み続けた結果、辞めることを選んだのだろう。
後悔してるのか？なんて聞けば、少し寂しそうに言葉を繋げた。
「してないよ――――なんて、言えれば良かったんだけどね。・・・うん、

やっぱり少しは有るかな」
「それなら無理に――――」
「私たちは響のために2人で戦うって、抗うって約束したでしょ？」
「・・・！」
その目は俺1人だけには背負わせないと、語っている。
未来の後悔は未来1人だけで背負うしかなく、未来の後悔を俺が背負っても意味はないし、彼女はきっと怒るだろう。
スッと、未来が背伸びをして、俺の顔を目と鼻の距離まで引き寄せる。
フワリと女の子特有のいい匂いが鼻腔をくすぐり、思わずドキリと心臓が高鳴った。
心なしか、頭痛も止まった気がする。
「だからさ、誠くんは背負わなくたっていいんだよ。だって、最後の最後にやり遂げたんだって3人で笑顔で言うために」
「・・・あぁ、そうだな。悪い、余計な事言ったみたいだ」
「ううん、気にしないでいいよ。私が勝手にやった事だから」
未来はスッと手を離し、背伸びを辞める。
「だって私は1人じゃない、2人で、3人でならこれからもきっとずっと、戦っていける」
「だな。・・・戦い抜こう、絶対に」

・・・・・・・

程なくしてやってきたバスに乗り込み、揺られ続ける事数分、街の停留所に着いた。
相変わらず頭に鈍い痛みが走るが、まぁ、そこは気合いで、顔に出

さないようにする。
刺繍糸は近くの手芸屋さんで買うとの事らしいので、２人でそこまで徒歩で向かう。
相変わらず外は冷たい風が吹き、背筋がゾクリとするのと同時にマフラーを口元まで寄せる。
「さっむ・・・」
「本当に寒がりだね誠くんって」
「暑いのは平気なんだけどなぁ・・・」
あー寒い寒いと愚痴っていると未来はジーと俺を見る。
「どうした未来？」
と聞けば小さくあっ、と声を漏らし、
「えっと、寒そうにしてるなーって」
と少し慌てて様子で言葉を返してきた。
？と疑問符を浮かべていると、目的地の手芸屋についた。
ウィーンと自動ドアが開き、店内に入る。
暖かい空気に包まれるのを感じる、手袋を外してマフラーを緩める。
ふー、と小さく一息付き、２人で目的の刺繍糸を探す。
手芸屋にきたのは初めてだが、結構色々なものが売っている。
毛糸玉だけでも結構な数の色が有ったり、ミシン機とかも売られてたり、あとはぬいぐるみとかか。
ほえー、と感心した声を上げていると、先に探していた未来が何かを見ていた。
んー？と思い後ろから覗き込めば、そこには毛糸で作られた手のひらサイズの様々な動物達が所狭しと並べられていた。
「どうしたんだそんなに見て？」
「あっ、誠くん。えっとね、このヒヨコが響に似てるなーって思ってさ」
ほらコレ、と手のひらに乗せたまん丸いオレンジ色のヒヨコを見せてくる。
普段は特に気にしないが、普段の言動を思い返してみると、良く未

来の後ろをついて行っている響の姿は、どことなく親鳥に付いてくヒヨコを思い出させる。
「確かにそうだな。となると・・・未来はこれかな？」
ヒョイっと紫色のヒヨコをオレンジ色のヒヨコの隣に置く。
乗せた拍子でコテンとオレンジのヒヨコが倒れそうになるが、紫色のヒヨコが倒れるの阻止した。
その様は響が未来にもたれかかってるのを連想させる。
「じゃあ・・・誠くんはコレかな」
コチラもヒョイっとオレンジのヒヨコの隣に乗せるは黒色のヒヨコ。
「それが俺か？」
「うん。ほら、この毛の真っ黒具合がさ」
「・・・それは褒めてるのかね？未来くんよ」
ジトーと見れば、少し笑いながらも、ちゃんと褒めてるよーと言いながら、手に乗せたヒヨコたちを元の場所に戻し刺繍糸を探しに戻った。
本当かねー・・・なんて思いつつ、チラリと先ほど戻されたヒヨコたちを見る。
三体綺麗に並べられ、真ん中にはオレンジのヒヨコ、その両隣には紫と黒のヒヨコが真ん中のヒヨコを倒れないように支えている。
その姿が何となく今の自分たちを連想させる。
「・・・ちゃんと支えれてるといいな」
なんて小さく呟き、早足にその場を去った。

・
・・・
・

「お買い上げありがとうございましたー！」
ウィーンと自動ドアが開くと同時に冷たい風が吹き、スッと無言で

マフラーを口元まで寄せる。
安物の腕時計で時間を確認すれば、昼にはまだ早い時間だ。
（さて、買う物は買ったし、ここで解散するか？いやそれだと流石に味気な――――」
ズキリと鈍かった痛みが鋭い痛みに変わると同時に思考が中断され、思わず片膝をつく。
「痛っ・・・！」
「誠くん!?」
タラリと汗が流れ落ち、心臓はやけにバクバクと早鐘に鳴り響き、本能が、この場は危険と警告してくる。
「もしかして今日体調が悪かったの？なら無理に来なくたって――――」
グニャリと未来の後ろで空間が歪み、ナニかが這い出てくる。
「あ――――」
あれは死だ、と本能が今までに無いくらいの警鐘を鳴らす。
（な――に――や――ば――――！）
這い出てくる何かを認識する前に、痛みを無視して、未来の手を取り、一刻も早くその場から走り出す。
「わ、ちょ、誠く――――！」
未来が驚いたような声を上げるのと同時に、視界が、俺たちの世界が膨大な数のノイズに塗りつぶされた。
数えるのもバカらしいぐらいに、その数は実に、あの日のライブの時よりも軽く超えていた。
ジロリと、なにも無い空間から出てきたノイズはその場の人たち――俺たちも含めて――を凝視すると同時に、俺たちを殺そうと、なんの躊躇もなく、攻撃を開始した。

第13話

絶望が降り注いだ。

――――――――

辺りに悲鳴が響き渡り、ノイズの出現を知らせるサイレンが鳴るのと同時におたまじゃくしに似た怪物、ノイズが迫ってくる。

それと同時にパシッと未来の手を掴み、今いる大通りから近くの路地裏に駆け込む。

ビュッ！と背後で何かが通り過ぎ、背中に冷たい汗が流れる。

相変わらず頭がジリジリと痛むが、そんな事は無視して、殺しにくる災害から逃げる。

うなじの辺りがピリピリするのと同時に横道に逸れれば、先程まで自分たちがいた所に弾丸の形に変わったノイズが上から降ってきて、地面に突き刺さる。

「――――！」

声にならない悲鳴をあげたのは果たしてどちらか、なんて事は今は気にしてられない。

やけに良く聞こえる耳には数千のノイズに蹂躙される人たちの声。

大人も子供も関係なく、助けてと泣き叫ぶ声と断末魔。

発狂した声を出しながら、誰かを呪う、消えてく声。

それらを無視して、今はひたすらに走る。

バクバクと心臓が喧しく鳴り、呼吸が乱れる。

「はぁ・・・はぁ・・・ッ！」

それでも走る、このまま逃げ続ければ、あとはノイズが勝手に自壊するだけだ。

路地裏をひたすらに右へ左へ進路を変えて走るが、ノイズはスルリと壁を通過し先回り、そのまま腕のような物を伸ばして殺しにくる――！

「ごめん未来！」

ドン！と攻撃が未来に当たらないような物陰に突き飛ばし、ノイズの標的を2人から1人に変える。

ひっきりなしに殺しにくるノイズを、如何な偶然か、はたまた奇跡なのか、その当たれば死ぬ必殺の攻撃をギリギリ掠らない所で避けていく。
ギリッと歯を食いしばりながら、右へ左へと避けていき、未来をノイズから遠ざける。
「誠くん！」
それに気づいた未来が物陰から顔を出して手を伸ばす――否、伸ばしてしまった。
未来に気付いた上空のノイズが未来の方を向き、そのままギュルンという音と共に形を弾丸に変化し、そのまま突き刺すとばかりに加速、未来に当たるまでは約３秒。
――未来は上空のノイズに気付いていない。
１秒、ダッ！と自分でも驚くぐらいに早く、未来の元にたどり着く。
２秒、未来を物陰から掴んで引っ張り出す。
３秒、引っ張り出した勢いそのままに、ノイズのいない方に突き飛ばし、自身も全力で後方に回避するが、突き飛ばしたその数秒差で回避が間に合わず、そのまま避けきれなかった左腕に、グサリと、ノイズが突き刺さる。
「えっ・・・」
未来の驚いた声が漏れた。
たとえ自分に他の人より強い回復力が有ろうと、触れれば死ぬノイズの攻撃が、俺の体を容易く貫いた。
「い――」
ピシッと体の一部が固まり、そこからひび割れた音と共に自分の体が崩れていく音と、
「いやあああああッ!!!」
未来の悲鳴が聞こえた。
ふらり、と体から力が抜けていき、バチバチと視界がスパークし、意識が一瞬だけ暗闇に飛んだ。

―――――――

小さかった頃の記憶が蘇る。

昔、まだ家族がいた頃、彼――黒然誠は子供心にこんな事を聞いた。

「どうやったら、父さんみたいに強い人になれるの？」と。

黒い髪色の天然パーマの男性、黒然蓮也は、そうだな・・・と考え

「守りたいものがあるからかな」と答えた。

？と頭に疑問符を浮かべ、コテンと小首を傾げる。

その姿を見て、まだ分かんないよな、と言い少し乱雑に頭を撫でつつ、言い聞かせるように言葉を繋ぐ。

「心に守りたい物を思い描け。そうすれば、男というものは幾らでも強くなれるもんさ」

「守りたいもの・・・じゃあ、父さんの守りたいものってなに？」

「そりゃあ家族――誠と由香に決まってんだろ」

当たり前だろ？と笑い、後ろで聞いていた母さん――黒然由香が

「この人はほんともう・・・」と顔を赤らめていた。

今にして思えば、惚気だなと思うが昔の自分はそんな事思いつくわけ無く、そうなんだ、と呑気に言っていた。

「まぁ俺の守りたいものは家族な訳だが、誠には守りたいものがあるか？」

と聞いてくる。

誠はうーん、と考え、口を開く。

「ぼくは――」

そこでプツンと途切れ、意識は現在に戻る。

―――――――

懐かしい記憶を見た。

暗くなってた意識が戻ると、激痛が左腕を通して、体全体に走る。

「――ッ!!」

「あ、あぁ・・・！」

ジワリ、ジワリと、1秒毎に体が炭素に変わっていき、激痛が駆け巡る。
ダン！と踏み込み、倒れそうになる体を立たせる。
今はまだ左腕だけだが、遅かれ早かれ、この浸食が頭か心臓に来たら今度こそ終わりで、次なんてない。
「やだ・・・いやだよ・・・お願いだから、死なないで・・・！」
懇願する様に、優しく俺の体を掴む未来。
視界には百を越えるノイズの群れ。
体に痛みが走り、心の内に絶望が燻り、目の前に死の恐怖が迫る。
――泣きたい／泣いてる場合じゃない
――もう終わりたい／まだ終われない。
――生きるのを諦めそうになる／生きるのを諦めたくない
弱音が溢れそうになるがそれを堪える。
「へいき、へっちゃらだ」
安心させるように顔に微笑を浮かべ、響の口癖を言い、心の奥底から引っ張ってきた嘘っぱちの仮面をつける。
そんな根拠なんてなく、そんな理屈もなく、そんな保証なんてどこにも無い。
ただ、未来を安心させたいがためについた、本気の嘘だ。
「未来だけは、絶対に助けるから」
背中には脂汗が流れ、心臓はバクバクと煩く鳴る。
それを顔には出さず、未来を抱えて、その場から全力で跳んで離脱、ノイズの攻撃を掻い潜り、路地裏から出る。
人1人分の重さを抱えて走ってるが、体に疲労はあまり感じなく、これが火事場の馬鹿力か、なんて他人事のように思った。
変わらず周りでは悲鳴が怨嗟の声があちこちに響き渡る。
大人が助けを求める――それを見捨てる。
子供が泣いてる――それを見捨てる。
知らない人がこちらに手を伸ばす――それを見捨てる。
（見捨てたんだ・・・助けれるかもしれない人たちを、俺が・・・見捨ててるんだ・・・！）

ギリッと強く歯を食いしばり、未来だけは殺させないとノイズを睨みつけ――力が欲しいと、心の底から望んだ。

――――

ズバッ！とノイズの大群が青い斬撃によって切り裂かれ、炭素の塊になる。

それを確認する間もなく、少女――風鳴翼は縦横無尽にノイズで溢れた街を駆け巡る。

戦闘開始からすでに数十分が経過し、辺りにはノイズ諸共炭素の塊になってしまった守るべき人たちの成れの果て――それが、いつかの片翼の姿と重なり、ジクリと小さな痛みが突き刺さり、呼吸が一瞬乱れる。

飛んでいた最後の鳥形ノイズを叩っ斬るとピピっと二課からの通信が入る。

「はい、翼です」

『その近くからはノイズの反応が消えた。次はそこから南西の方角だ！』

「了解です」

網膜に次の目的地が映し出されるのと同時に、キキィッ！とバイクが1人でに翼の着地点に滑り込むようにやってきた。

毎度毎度高確率でバイクを壊す翼のために、二課の技術部が作ったＡＩが積まれた翼専用の青いバイクだ。

それに軽やかに乗り込み、ブォン！と音を鳴らして、自分の足で向かうよりはるかに速いスピードで目的地に向かう。

ギュッと片手で胸元の――格納領域に仕舞い込まれた片翼のペンダントを握る。

手に取ってる訳ではないが、直ぐそばに彼女がいる気がして、痛んだ心が少しばかり、和らいだが、胸の内側は妙に騒つく。

・・・まるでこの先に何かあるぞと言わんばかりに。

（――いや、関係ない。そこに何があろうとも、ただひたすらに斬り伏

せるのみ！）
前を見据えて目的地に向かう。
風鳴翼がそこに着くまで、残り約１５分。

――――――

（どうして、こんな事になっちゃったんだろう・・・？）
未来の胸の内には後悔しかなかった。
（私が悪いのかな）
未来は誠に抱えられながらそう思った。
・・・この事で誰が悪いというの無いが、強いて言うなら、ノイズが現れたのは誰かの差し金という訳でなく本当に偶然な事と、彼の運が今日に限って致命的に悪かった――ただそれだけの話だ。
（いやだよ・・・）
助けられたから今度は自分が助けたかった。
ただそれだけの思いで物陰から手を伸ばす、伸ばしてしまった。
その結果、彼の体に消して癒えぬ傷を与えてしまった。
小日向未来のせいで黒然誠に望まぬ死が振るわれる。
それだけで未来は自分のせいでこうなったと自身を責める。
（私が余計なことをしたから・・・）
例え、誠が未来は悪くないと言っても、彼女は自分を責め立てる。
ノイズが迫る、誠は未来を抱えて避ける。
だが、炭素転換が進んで、体に激痛が走り、鳥形ノイズが地面に当たった衝撃で２人まとめて飛ばされる。
だがギリッと食いしばって、誠は地面にぶつかる寸前に体の向きをクルリと反転、抱えた未来が傷つかないようにクッション代わりになる。
「ッア!?」
だが、それと同時に炭素転換が進んだ左腕がポロリと関節が緩くなったプラモのように呆気なくとれ左腕の感覚が無くなると同時に筆舌し難い痛みが襲う。

ギュッ、とまだ炭素転換していない手を、それこそ血が出るまで握り締め、断絶しそうな意識をはっきりさせる。
「あぁぁぁ!!!」
倒れた体に鞭を打って立ち上がり、まだ死ねないとばかりに走り出す。
「まだ、俺たちは生きてるんだ・・こんな、所で、終われるもんか・・・!」
しかし走ると同時に体が硬くなっていく感覚がする。
タラリと汗が流れ、チラリと断面を見れば、未だに侵食が止まらず、ジワリジワリと刻一刻と誠の体を死の淵に追い詰める。
「ごめんなさい・・・!」
ポロリと未来の目から涙が溢れた。
「ごめん、なさい・・・ごめんなさい・・・!私の、私のせいで・・・!」
「未来・・・」
ごめんなさい、ごめんなさいと未来は泣きじゃくる。
息を吸って呼吸を整え、炭素転換の痛みで歪む顔を嘘っぱちの仮面の下に全力で仕舞い込み、本当に・・・本当に申し訳なさそうに、
「――俺の方こそ、ごめん」
黒然誠は心の底から謝った。
「なん、で・・・なんで、誠くんが謝るの・・・?」
「だって、未来にそんな辛そうな顔をさせてしまったから。・・・だから、本当にごめん」
ダッ!と頭上から不意打ち気味にきたノイズを避け、路地裏を駆ける。
「謝らないでよ・・・本当に、本当に悪いのは・・・私なのに・・・」
「未来は悪くないさ。俺が単純にミスしただけさ」
背後を見れば、鳥形ノイズが数匹迫ってくる。
未来を立て看板の裏に隠し、誠が前に出てノイズを誘導、そのまま未来を回収して逃げる、そういう算段で躍り出た。
「ッ!ガっ!?」

だがそれは、炭素転換がそこまで進んでいないという前提があっての事だ。
「グゥ・・・ハッ・・!?アッ・・・ぐっ!?」
ここに来て炭素転換が肺にまで侵食し、思わず膝をついてむせると同時に、ブドウの形をしたノイズが何かを発射、むせて苦しい体を無理矢理動かし、回避。
当たりはしなかったが、背後で起きた爆発の余波で、さながら投げられたボールの如く、大きくバウンドしながら吹き飛ばされる。
そのままゴロゴロと転がり、看板に背中から当たり、頭からはタラリと血が流れ少しばかり視界がボヤけた。
「誠くん!!」
未来が此方に駆け寄ってきて体を揺する。
背後には多量のノイズ。
それを認識すると同時に、呼吸するだけで苦しく、片腕が無い状態の体に鞭を打って立ち上がり、手を握り、未来を守るために、足を踏み出す。
彼の命はもう数分も持たずに死を迎える。
だが、その目はまだ諦めていなかった。
・・・胸の内にある思いは一つだけ、
「未来だけは、何がなんでも守り抜いて響の元へ返す」
ただそれだけの思いで彼はノイズの攻撃を潜り抜けた。

ふらりと体から力が抜けるとバタン!と二人同時に地面に倒れる。
タラリと頭からは血が流れ、呼吸するたびに苦しくなり、体はジワリジワリと炭素に変わっていき、刻一刻と自分の命が死に近づいているのが分かる。
視界はもう片目しか機能してなく、前よりボロボロになってしまったマフラーは流れ出た彼の血で赤黒く染まり、左腕はとうに無く、両足は共に炭素転換が始まってしまい、これではもう一歩も歩けないだろう。

唯一無事なのは右腕だけだが、それも今だけだ。じきに右腕も炭素転換が始まる。
もう、黒然誠の体はボロボロで、いつ死んでしまってもおかしくない。
――だがそれでも彼は未来を守るために前に出る。
響の元へ帰す、ただそれだけで彼は立ち上がろうとする。
「もう、いいから・・・！もうやめてよ！頑張らなくていいよ！守らなくていいよ！休んでよ、お願いだから・・・！」
そして、ボロボロの状態でなおノイズから守ろうとする誠を、未来は抱き抱えて彼を庇う。
そんな彼女を優しく押し除け――体から激痛が走る／痛みなんてどうでもいいそんな事――、立ち上がる。
「お、れが・・・いやなんだ」
そうして背後には回し、彼女の盾になる。
「だっ、て・・・まだ、・・未来は、へいき、なんだから・・・だから、だから、もういい、なんて、言うなよ・・・。生きるの、あきらめないでくれ・・・！」
「やめて・・・もういいんだよ！」
「いやだ、よくない・・！」
けれど彼女の思いと彼の思いは互いに思いやる故に、交わらずに平行線。
耐えきれなくなったノイズがこちらに向かってくる。
立ち上がるだけで精一杯なのだ、避ける、なんて事は出来ない・・・だからできる事はただ一つ、彼に残されたたった一つの武器――即ち、拳を振るうだけだ。
「ッあああぁ!!」
ドスっという音と共にノイズに向かって拳を振る。
本来ならすり抜ける筈の拳だが、彼を殺すためにノイズの位相差障壁がこちら側に傾いていたのも有り、サーとノイズは炭素の塊に砕け――それと同時に、ノイズの突き出した手らしき物が彼の体を貫いた。

「ガハッ・・・」
「あ・・・い――いやぁぁぁぁぁぁ!!?」
バタリと倒れ込むと同時に絶叫が響き渡る。
そして迫りくる、絶対の死という名のノイズ。

――――

小学生の時のことだ。
「誠くん、泣かないの？」
「えっ？」
それは黒然誠の家族の葬式が終わった次の日の事だ。
学校が終わり、未来と一緒に歩いている時だった。
彼女から突然、泣かないの？と聞かれる。
「・・・多分、泣いてる場合じゃないんだと思うんだ」
「なんでそう思うの？悲しかったら泣いてもいいんだよ」
そう返されると、誠も困った顔をする。
「確かにそうなんだけど・・・。なんか上手く泣けないんだ。多分、上手く飲み込めてないんだと思うけどさ」
「・・・そっか。ごめんね、急にこんな事聞いちゃって」
「気にすんな。・・・ありがとな心配してくれて」
「うん・・・。あっ、それじゃあ、泣けなかったら、私が代わりに泣いてあげるよ」
「はっ？なんで未来が泣くのさ」
「だって誠くん、泣かないでしょ？ならその代わりに私が泣いてあげるの」
何それと聞けば、お父さんが読んでた漫画にそう言うセリフがあったから、と返してきた。
俺の代わりに泣かなくても大丈夫なのに、なんて思いつつ。

――――

意識が朦朧とし、声は出ず、息をするのさえ、辛い。

さっきの一撃で炭素転換が早まり、体が限界を迎え、もう立つことすらままならない。
自分の命が後数秒で終わるのが分かってしまう。
点滅する視界にはノイズが風景の7～8割を埋める。
そして、残った2～3割を、未来が埋めていた。
「もう・・・もう、私の大切な人を傷つけないで・・・！」
手足は僅かに震えながらも、俺の前に出て手足を広げてノイズの前に立つ。
ノイズとは、怖い物だ。
外見しかり、大きさしかり、強さしかり、そして何より触れれば殺すという絶対的な力。
それを分かっているのに未来は震える体を押し留め立ち上がる。
「痛いこと、辛いこと、悲しいこと、全部・・・！全部押し付けないで・・・！」
残ったノイズが未来を殺そうと一斉に飛びかかる。
恐ろしい筈なのに、未来は一歩も前から退こうとしない。
そして俺は未来を守ろうと唯一動く右腕を伸ばし、ここでふと、何か冷たい物が付いているのに気がついた。
「――」
それは涙だった。
聞かなくても分かる、これは未来の涙だ。
泣けない自分の代わりに彼女が代わりに流した物だ。
その涙の向こう側には俺を守ろうとする姿が見える。
その一粒の涙が、俺を変えた。

風の音が聞こえる。
「・・・！ここは」
目を開けてみれば赤い剣が刺さった祭壇にいた。
体には傷は無く、五体満足で立っていた。
そして、今起きていることを思い出し、心臓は早鐘のように鳴る。
「って、今はそんな事確認してる場合じゃない。早く戻って未来を助

けな――」
ダッ！と駆け出そうとする。
「やぁ、誠くん待ってたよ」
「――い、と？」
カツカツ足音を立てと祭壇から誰か降りてくる。
見間違えようが無い、あの人は剣に残る残留思念だ。
そしてこの時に、優先順位が現実に戻る事から、この人の話を聞くに変わった。
別にどうでも良くなったと言うわけでは無く、話を聞いた方が手っ取り早いと感じ取ったからだ。
「君の答えを聞きにきたよ」
顔に微笑を浮かべ、俺の前に立つ。
「色々と聞きたい事があるかも知れないが、今は置いておこう」
さぁ、黒然誠――力が欲しいかい？
俺に問いかけてきたそれを、俺は本心で返す。
「――あぁ、欲しいさ」
「では何のために？」
何のため？もちろんそんな事は決まっている。
「――傷つけるためじゃない、守るために」
「それが例え、守り抜いた先に悲惨な末路しかなくてもかい？」
「――あぁ、悲劇的な運命でも、構わない。・・・守りたいんだ。大切な人たちの、明日を、未来を！」
俺の言葉を聞いて、その人は一度だけ目を閉じ、やがて、目を開ける。
「重ねて言うが、覚悟するんだ。この力は君に変わらない悲劇を背負わすと言うことを。・・・それでも君は力を欲するかい？」
俺の身を案じるように、優しく聞いてきた。
「覚悟ならもう出来てるよ。俺は自分の思う大切な人たちを守りたいんだ！今度こそ、絶対に、絶対にだ！」
スッと前が開けられ、剣までの道が開かれる。
階段を駆け上がり、剣の前に立つ。

「さぁ、手にするといい」
両手を伸ばす。
今度はバチっと弾かれず、しっかりと両手で握る。
「竜殺しの剣――グラムを！」
ジャキン！と勢いよく引き抜くと同時に、剣から何かが流れ込み、それが自分の中で混ざり合い、カシャンと枷が取れる音と感覚、そして見える視界全てが白く染まっていき、世界が文字通り変わっていった。

――

「ｂｅｅｔ　ｕｐ　ｇｒａｍ　ｔｒｏｎ」
歌声が響いた。
その瞬間、光が溢れ天には白と赤、そして黒の三色の火柱が登る。
その衝撃で、向かってきたノイズ全てが吹き飛ばされる。
そして火柱が収束し、中心には人影が１つ。
思わず未来は息を飲み、そして、ポツリと呟くように聞いた。
「せい、くん・・・？」
「――あぁ」
彼女の声に応えたその声は間違い無く、黒然誠の声だ。
そして誠は勢いよく右腕を振るい、火柱を払い除ける。
だがそこにいたのは体全体をどこか禍々しい黒一色で、頭部及び手足には竜の顔を模したような騎士鎧。
背部には一対の赤い翼、そこから赤い粒子が溢れる。
目元は赤いバイザーに覆われその瞳を見る事はできない。
「何がなんだか分からない・・・だけど、たった一つだけわかる事がある。それは――俺が『戦える』と言う事だッ！」
街に蔓延るノイズが一斉に彼（己の天敵）を凝視する。
「俺から大切な物を奪えると思うなッ！」
そして、ノイズが迫りくる。
それと同時に背後からは西風が吹き、彼の背中を押す。
絶望の歯車が壊れ、希望の歯車が回りだした

第１４話

希望の音が鳴り渡る。

――――

数千のノイズの出現、及びその直後に発生した複数の巨大なエネルギー反応に、ドタバタと二課の司令部ではオペレーターたちが忙しなく動き回る。

そして、オペレーターたちの手により類似する波形を照合、二課の大画面にそのうちの一つが明かされる。

「アウフヴァッヘン波形照合開始！」

「データベースに類似反応無し！未知の聖遺物です！」

「さらにそれに重なるように別の聖遺物反応！・・・類似反応有り！モニター出ます！」

そして誰もが目を見開き、二課の司令、風鳴弦十郎が大きな声を出す。

大画面に映し出された反応の正体、それは――

［Ｇｕｎｇｎｉｒ］

「ガングニールだとぉ!?」

今は亡き天羽奏が使っていた聖遺物の反応に、少なからずの動揺が二課全体に走る。

「それと同時にノイズの数が加速度的に減少！」

「全てのノイズの動きが先程の反応に向かって進行中！」

「これは、誰かがこの聖遺物を使って戦っている・・・と見て間違いないか。了子くん、どう思う？」

弦十郎は顎髭をさすり、眉間にしわ寄せながら、隣の櫻井了子に相談する。

「今現在、ノイズを倒せるのは私が開発したシンフォギアだけよ。これ自体は国のトップシークレットだからそうそう知ってる人は居ないでしょうし。残る線は完全聖遺物だけでしょうけど・・・」

んー？と了子は頭を捻って考えてるのを横目に、弦十郎もまた考える。

彼が頭を悩ますのはノイズの出現地帯だ。
よりにもよって出てきたのが休日の街中、しかも数千のノイズの大量に出現したと言うそれだけの事でも、国が揺るがす大事件になりかねない。
ノイズの数＝死者数になりかねないのが、ノイズという災害だ。
今は翼1人がどうにかしてるが、このままではノイズが四方八方に広がっていき、それによる2次被害も考えられる。
・・・現状出る結論は最悪の一途を辿る。
「エネルギー反応を見る限り、アレは完全聖遺物に相当するわね。・・・でも、あの反応が本当にノイズだけ倒すとは限らないわよ」
「完全聖遺物か・・・。とりあえずは、翼に接敵する時は気を付けろとしか言っておくしかないのか・・・」
そうして弦十郎は二課の大画面に映し出された聖遺物の反応を見る。
それはノイズを消し飛ばして尚且つ建物にはあまり被害が出ないように動いている。
・・・明らかにそれはノイズと敵対し、街に被害が出ないように動き回っている聖遺物反応に、弦十郎の感が、なにかを確信する様に囁いた。
「もしかしたら、本当に味方かも知れんな・・・」
ちょっと希望的観測かも知れんがな、と続けて小さく呟いた。

竜騎士のような姿が変わった誠が先ず初めにしたのは、勢い良くダン！と踏み込み、迫りくるノイズに向かって、ボッ！と赤黒い炎を復活した左腕に纏わせ勢いよく横薙ぎに振るう。
本来なら位相差障壁により擦り抜ける筈の炎を纏った拳はノイズに当たり、そのまま燃え尽き灰になる。
「未来、ここで待っててくれよ」
「う、うん。あっ、でもその姿って一体・・・？」

その問いかけに彼は少し言葉を濁しながら答える。
「あー・・・うん、多分コレかな？って物があるだけどさ。だけど先ずはコイツらを片付けてからかな。――大丈夫、必ず帰ってくるから」
「――うん」
そしてそのまま変身した誠は未来を置いて背部についてるブースターを吹かせ、タン、と地面を蹴り込んで空に上がる。
今やここに居る全てのノイズが自分に向かってきている。
だからこそ自分が離れれば未来の安全は約束されるし、仮にノイズが未来を襲おうとも今の自分になら直ぐに駆けつける事ができる、という根拠に満ちた自信があった。
勢いよく下降し、そこにいたナメクジ型ノイズを両足で踏み潰す。
またしてもノイズが誇る最強の盾が矛によって壊される。
（この姿、まるでライブの時に見た奏さん達の姿見たいだ。・・・体は軽いし、頭も痛くない。何もかもが軽快で、しかも体の内側から力が無限に溢れてくるみたいだ！）
背後に円を描くようにオレンジ色の炎が１つ１つ剣や槍の形に変形していき、その数は約５０本と言った所か。
右腕を振るい、それを一気に前方のノイズ達に向かって射出する。
そしてそれは知っている人が見れば、天羽奏が使っていた技の一つ――
――ＳＴＡＲＤＵＳＴ∞ＦＯＴＯＮ！
射出された炎の剣と槍は容易くノイズたちを貫き燃やし尽くす。
そしてそのまま背中の翼で加速させ、地上にいるノイズの視線を置き去りにし、その無防備な体に拳と蹴りを叩きつけていく。
ワンテンポ遅れて人型ノイズが刃を振るうが――
「遅い！」
体をズラし最小限の動きで避けると同時に炎剣でノイズを貫き、そのまま剣先に炎を形成、そのまま射出し、背後のノイズを貫き燃やす。
その姿は明らかに戦い慣れしてる様子だが、誠自身には、それに対しての疑問は無い。何故ならば――
（――攻撃に対して、どういう風に動けば良いのかが分かる。そうい

う風に体が勝手に動く！）
ドリルの形に変形した鳥型ノイズが挟み撃ちで飛んでくる。
戦車の装甲を容易く貫く破壊力を持つ体当たりだ。
だが誠はそれを両手で左右から来たノイズをガシッと掴み取る。
ギュルギュルと回転していたノイズだが、そのうち止まり、そのままグシャッと握力だけで握り潰し、残った残骸は踏み潰す。
ナメクジ型も鳥型も人型すら、平然と触れる彼に対して炭素転換が意味を成さない。
辺りにはノイズの残骸が舞い、その中心にいる誠はひたすらに向かってくるノイズを迎撃する。
「きゃぁぁぁぁ！」
誰かの叫び声が聞こえる。
背中の翼を羽ばたかせ、声の聞こえた方に向かえば、女の子が1人、ノイズから逃げているのが見えた。
上空から炎槍を何発か放って壁を作り、女の子の前に降り立つ。
「大丈夫か？」
「へっ!?あ、はい、大丈夫です！」
「良かった。なら、そのまま真っ直ぐに走れば大丈夫。さっき避難誘導してる人が見えたから、その人たちに保護して貰って」
それじゃ、と早口に言い彼女――板場弓美が瞬きすると同時に一瞬の速度で向かってくるノイズを蹴り飛ばす。
辺りを静寂が支配し、後に残されたのは彼女が逃げれる道だけだ。
だが、彼女はそこで暫く足を止める。
脳裏に過ぎるは先程の黒騎士の後ろ姿。
それを思い出し、高鳴る胸を抑えつつ、少し赤くなった呆けた顔でこう呟いた。
「ヒーローって、本当にいたんだ・・・」

――

光が天に登るのを風鳴翼も視認し、アレは？と驚いていると、繋

がっている通信機からは、驚いた司令の声が聞こえる。
『ガングニールだとぉ!?』
「なッ!?」
向かってくるノイズを切り伏せていると、通信から聞き捨てならない言葉が、聞こえる。
ガツン！と思い切り頭を殴られたかのような衝撃に冷静であった翼の心を揺さぶるには十分過ぎる程の衝撃を与えた。
「くっ!?」
ズバッ！と背後にいたノイズを切り伏せ、いったん横合に飛んで距離を取る。
そうして、乱れた呼吸を落ち着かせ――そして、ギアによって強化された視力には、ソレが上空から真下に向けて炎の槍を放つのが見える。
その人影はまるで黒いドラゴンのように見え、アレからは奏の使っているガングニールと同じものを感じる。
無意識のうちに刀を持つ手に力を込め、二課に聞く。
「どうしてアレからガングニールの反応が!?」
『それについては目下調査中だが、もし接敵するなら気を付けろよ翼。了子くんによればそれは完全聖遺物級らしいからな』
「完全聖遺物級・・・!?・・・了解です」
上空から剣の雨を降らして、周りの残ったノイズを蹴散らし、オートで寄ってきたバイクに乗り込み、上空を飛んでたガングニールの反応を追いかける。
心臓は煩く鳴り、不安か、はたまた無意識の内にか分からないが、気づけば胸のペンダントを握っていた。
――握るペンダントはとても熱い。
風鳴翼がソレと出会うまで残り約１０分。

前方から大量のノイズが襲いかかる。

その背後には小型を吐き出す大型のノイズも数体見える。
両の拳だけでは倒せない、炎だけでは倒すには僅かに届かない。なら――
「すぅ――」
一呼吸し、息を整え拳を構える。
脳裏を過ぎるはあの日、ライブ会場で見た奏の技。
両手に炎を纏わせ、それを左右同時に回転させ、両手を引き絞り構える。
その手に槍はなく、少し不格好に見える構えから繰り出す渾身の一撃――
「――らぁ！」
――ＬＡＳＴ∞ＭＥＴＥＯＲ！
拳から押し出された炎は渦となり、進路上にいた小型及び大型ノイズを呑み込み、空へと舞い上がり、霧散する。
よし！と内心ガッツポーズをし、次に向かおうと飛び立とうとしたその時、
「あっ、ッ・・・あ、あぁぁぁぁぁ!?」
大技の代償か、制御できない程の黒い炎が内側から誠の体を燃やし、さらに翼からも黒い炎が噴出。
その様は一度も躾けていない狂犬のように、黒い炎は体の中で暴れ回る。
膝をつき、両肩を抱いて蹲り、誠に呼吸すら困難な程の激痛を与える。
（熱い・・・！熱い、熱い熱い熱い熱い熱い熱い――――!!）
ぽたりぽたりと汗が垂れる。
だが、お構い無しに周りからはノイズが襲い掛かる。
ギリッと歯を食いしばり、無理矢理ブースターを吹かせ、勢いそのまま顔面に膝蹴りを喰らわせる。
「あぁ・・・あぁ、そうだよな。この力がこんな簡単に操れるわけ無いよな・・・！」
炎の剣と槍を作り、それをノイズに向かって射出。

「この痛みも、この姿も、全部・・・全部、俺が手に入れた力だッ！」
感情は昂り、振るう炎は勢いを増す。
ダン！と強く踏み込んで、勢いそのままに、中型ノイズに向かってかかと落とし。
地面にクレーターが出来るほどの威力を誇るそれは、容易くノイズを粉砕、その衝撃で周りの小型も吹き飛ばす。
空へと舞い上がり、数を数えれば残りは後１／３と言ったところか。
人が居て、尚且つノイズが固まっている場所に向かって飛び、そこからグルンと縦回転を加え、先ほどより威力の高いかかと落としを、真下にいた大型にぶつける。
ノイズが消えるのを確認する前に、別の所で大型が尻尾を振るうのが見えた。
人々の悲鳴が飛び交う中、ふざけんなと内心怒りつつブースターを吹かせ、ノイズの真っ正面に立ち、尻尾を受け止める。
その巨体から放たれる尻尾の叩きつけは受け止めた彼の下にクレーターを作る程の威力だが、彼はそれを受けきり、
「ッ！うっ、らぁぁぁぁ!!」
それをなんと真上にぶん投げたのだ。
そして真上に向かって先程の倍の数の剣と槍を形成、それを大型ノイズに向けて一斉に射出。
数十発は耐えたが、次第に耐えきれなくなり、そのまま細切れに、パラパラと残骸が降ってくる。
「はぁ、はぁ、はぁ・・・っぅ、あっつ・・・！」
どさりと、耐えきれずに思わず息が上がり片膝をつく。
内側からドロリとした黒い何かが込み上げてきて、それを糧に黒い炎は燃え上がる。
――まるで先程の怒りを糧にしたかのように、内側の炎はさらに燃え上がる。
「ぐっ、うぐ・・・止ま、れ・・・！止まれよ・・・！」
そして次第に彼の体を通して、黒い炎は精神までも燃やそうとし、

いずれこの炎に呑まれてしまうだろう。
「あ、ぐっ、がぁぁぁ！」
そうして彼の視界と意識が黒くなる直前、
――心に守りたいものを描け。そうすれば、男というものは幾らでも強くなれるもんさ。
父さんの言葉を思い出した。
そして、痛みに塗れた心に思い描くのは、陽だまり――小日向未来の姿だ。
「――」
振り返れば、そこには温かい陽だまりの記憶（メモリア）。
それが暗闇に落ちかけた精神をひっぱりあげる
「・・・すぅ・・・はぁ・・・」
一つ深呼吸をし、乱れた精神を落ち着かせれば、視界は先ほどよりクリアでよく見える。
そうして、よく見えるようになった視界の先にはノイズの群れ。
「ちょっ!?アイツら、そんな事も出来んのかよ!?」
驚くには訳がある。
街に蔓延るノイズたちは彼の前に一箇所に集まり、大きくなっていく。
不定形だった形は次第に変わっていき、その姿はさながらハリネズミのようだ。
身長は５０メートル程で体重はそれ相応に重いだろう。
「――!!」
そして声にならない鳴き声を上げると、その巨体に見合わない速度で彼の前に移動し、勢いよく爪が振るわれる。
「うおおおぉ!?」
それを彼は横合に飛んで回避。
振るわれた爪は地面を切り裂き、背後に合った建物を吹き飛ばす。
「くっ・・・！らぁ！」
お返しとばかりに炎を飛ばすが、ノイズが何百何千と集まってできているのか硬く、全く燃えない。

ならばとＳＴＡＲＤＵＳＴ∞ＦＯＴＯＮをぶつけるが、少しばかり装甲を削ったに過ぎず、チッと舌打ちをし、念のために一旦距離を取る。
（さっきは油断したけど、次は大丈夫。あの速さならなんとか避け――）
ここで彼の思考が遮られる。
ドドドドド！と言う音と共にノイズの背中に生えてた針を、まるでミサイルのように何十発と彼目掛けて飛ばしてきた。
「っ！はぁ！」
炎の剣と槍を形成し、ミサイルを迎撃していくが、ミサイルの数が多すぎて迎撃が間に合わず、溢れた１発が彼の眼前で爆破する。
「ぐあぁぁぁぁ!?」
そのまま勢いよく吹き飛ばされる。
何度もバウンドし、ゴロゴロと転がり、電柱にぶつかって漸く止まる。
ゲホッと彼が咳き込み、動けない所を狙い撃ちするぐらいの知性があるのか、動けない彼に向かってミサイルを集中して放つ。
（まず、避けられ――）
ズドーン！と爆発が巻き起こる。
数秒後、土煙は晴れ、その中心には倒れ伏す誠の姿が見える。
「っ、コレが、頑丈で、助かった・・・」
ヨロヨロとした動作で立ち上がり、超大型ノイズを見据える。
ここで倒せなければあのノイズは破壊の限りをつくし、彼の大切な物を奪うのは火を見るより明らかだ。
だが、あの巨体が暴れれば街の被害は更に増していく。
故に――
（一撃だ。一撃でアイツをすっ飛ばす）
だが炎では燃えず、炎剣と炎槍では貫けない。
（だけど、俺にそんな事出来るのか？）
胸の内に、一つの不安が浮かび上がる。
だが、自分の背後に誰が居るかを思い出した瞬間、その不安は吹き

飛んだ。
（いや、やる）
そして、胸の内に一握りの勇気が灯る。
カシャンと背中の翼が取れ――否、翼に見えてたそれは本来の形に戻ったのだ。
数秒とかからずに彼の手には自身の身長と同じ大きさの赤い両手剣（アームドギア）が宿る。
（やるんだ）
チャキリと、音を立て両手剣を肩に担ぐ。
するとキュイン！とジェット機音めいた音を立てて、刀身を赤黒いエネルギーが包み込んだ。

小日向未来は祈った、彼の無事を。
（カッコ悪くてもいい・・・凄くなくたっていい・・・だから――）
ただひたすらに、両手を握って彼の勝利を祈る。
「無事に帰ってきて・・・！」

ギュルンギュルンと赤黒いエネルギーが刀身の周りを覆う。
このエネルギー量ならそのままぶっ放しても倒せるが――ダメだ、ここで打ったら街の被害は甚大な物になる、狙うならアイツの真下だ。
（――それに）
彼の大切な人を狙ったのだ、ただ倒すのは己が許さない。
だから――
「Ｇａｔｒａｎｄｉｓ　ｂａｂｅｌ　ｚｉｇｇｕｒａｔ　ｅｄｅｎａｌ」
全力全壊で、歌を――絶唱を歌う。
赤黒いエネルギーに重なるように、オレンジ色のエネルギーが流出する。

「Ｅｍｕｓｔｏｌｒｏｎｚｅｎ　ｆｉｎｅ　ｅｌ　ｂａｒａｌ　ｚｉｚｚｌ」
ノイズが気付いて、こちらに迫る。
アイツの体格なら二歩程でいる距離だ。
だが、二歩程の距離さえあれば十分だ。
「Ｇａｔｒａｎｄｉｓ　ｂａｂｅｌ　ｚｉｇｇｕｒａｔ　ｅｄｅｎａｌ」
刀身に三色の光が幾重にも重なり合い、最終的には全てを呑み込む黒一色にまで圧縮される。

「Ｅｍｕｓｔｏｌｒｏｎｚｅｎ　ｆｉｎｅ　ｅｌ　ｚｉｚｚｌ」
そして、絶唱を歌い切ると同時にダン！と踏み込み、迫って来た超大型ノイズが振り下ろした爪を避け、真下に潜り込む。
チャキンと刃を真上に向ける。
収束し、臨界まで達する黒色の光。
そして彼の両手剣（アームドギア）は燃え盛る黒炎となり、ノイズの真下から一気に切り上げる――！
絶唱――ＧＲＡＭ∞ＺＡＭＢＡ！
ゴパッ！と空間を抉る音と共に、黒色の光が打ち上げられる。
それをモロにくらった超大型ノイズの装甲を溶かし、空に打ち上げられると同時にジュッ、と言う音が聞こえ超大型ノイズは霧散し――
――辺りには静寂が訪れた。
「・・・」
ブン！と両手剣を振るい、背中に戻せば、両手剣は自動でカシャンと音を立てて、一対の赤い翼に変形する。
トンと地面を軽く蹴って空を飛び、未来の元へ戻る。
そうして、彼は彼女の前に降り立った。
「もう、大丈夫だ。・・・えっと、俺がいない間に怪我とかしてないか？」
「・・・うん。私は平気だよ」
「そっか・・・良かったー」

ふー、と息を吐いて、気が緩まる。
瞬間、鎧は解け、光の粒子になると、彼の姿が元に戻る。
未来はそっと彼の両手を優しく握る。
突然手を握られ、驚いた彼の顔は、戦う者の顔から年相応の少年の顔に戻る。
（良かった・・・ちゃんと温かい）
手の温度を確かめると、次はそのまま優しく手を引っ張り、彼を引き寄せ、そのまま抱きしめる。
「み、未来？」
抱きしめられていると自覚すると顔が暑くなり、ついでに心臓と高鳴って、とても煩い。
（しかも、少しいい匂いがが）
「・・・ありがとう、助けてくれて」
ポツリと、今まで言ってなかったお礼の言葉を言う。
「どういたしまして。・・・無事で良かったよ、本当に」
ぽんぽんと軽く頭を撫で、離れる。
「あっそうだ。誠くんの姿が変わってたけど、アレって結局なんだったの？」
「えーと、それは・・・」
口籠る。
（あの時は後で教えるって言っちゃったけど、アレって教えちゃダメって了姉が言ってたし、けど見ちゃったし、これは――）
言っても良いのでは？と思っていると、背後からバイク音。
後ろを向こうとしたその瞬間、首元に、青い刀が当てられる。
「せ、誠くん!?」
「・・・いきなり首元にコレとか、物騒じゃあないんですかね？」
嫌な意味で心臓が鳴りつつ、降参の意味を込めて静かに両手を上げ、彼は当ててきた人を静かに見る。
そこには、青い戦装束に身を包み、今にもこちらを切り伏せて来そうな程に彼を睨む、風鳴翼の姿がそこに合った。

第15話

首元に刀が当てられる。
降参の意味を込めて両手を上げ、背後を見る。
背後には、今にもこちらの首を飛ばしてきそうな程の殺気を放つ翼さん。
ピリピリとした空気が肌に突き刺さり、内心では殺気に怖っ!?と怯えつつ、平静を装って声を上げる。
「・・・いきなり首元にコレとか、物騒じゃあないんですかね?」
あっ、ちょっと声が震えた。
「それは貴方が何かするかも知れないでしょ?」
「そんな事――」
しない、反論しようとするが更にチャキッと刀が押し当てられる。
――押し当てられた刀は僅かに震えていた。
「それより答えなさい。どうして・・・どうして、貴方がガングニールを持ってるの?」
「がんぐ、にーる・・・?」
後ろの未来が困惑した声を上げる。
・・・ぶっちゃけ俺も困惑してる。
ガングニールなんて物は知らないし、そんな物を俺が持ってる筈が――
(――いや待てよ。もしかして?)
チラリと自分の胸の辺りを見る、もう少し具体的に言えば心臓の辺りを、だ。
病院で了姉が見せてくれたレントゲンには、心臓付近に破片のような物が突き刺さっていた。
(もしかして、それ、なのか・・・?)
「早く答えなさい。・・・それとも、答えられない理由が、あるのかしら?」
「・・・いや、別にそういう訳では無いんですけど」
そんな殺気バリバリに出されるとこっちが話しづらい、なんて言え

る雰囲気でも無い。
・・・まぁ、元よりはぐらかす事はしない、と言うか、そんな事しよう物ならすぐさまスパンと切られて首と胴体がサヨナラ！するのは目に見えてる。
チラリと視線を未来に向ければ、ハラハラしてると言った感じに俺たちを見る。
すぅ、と目を瞑り息を吸って、言葉を出す――その瞬間、
「はい、そこまでですよ翼さん」
カチャン、カチャンと、俺と未来の両手に手錠がかけられる。
「うおっ（きゃっ）!?」
「ッ！緒川さん・・・」
いつの間に居たのか、影も無くスーツ姿の男性が翼さんの前に居た。
翼さんの体が光に包まれると制服姿に変わり、首に当てられてた刀が解けて消える。
「すみません。お二人をこのまま帰すわけには行きませんので、機密保持の為、二課の方までご同行をお願いします」
顔に微小を浮かべたスーツの男性はそう言い、気づけばズラリとグラサンをかけたスーツ姿の人たちに取り囲まれる。
ギョッと驚き、未来と顔を合わせ、コレまたいつの間に来たのか、２人纏めて黒い車に乗せられ、何処かに連行される。
――背後からは相変わらず翼さんが殺気を放つ。

そして、拘束される事数十分。窓の向こう側には大きな学校が見えてきた。
・・・あの学校には見覚えがある、確かここって、
「リディアン音楽学院？」
２人で思わずハモった。
――私立リディアン音楽高等学院。
小中高一貫の学校で、前までは女子校だったが、今は色んな人たちを入れたいのか、最近は男女共学に変わったらしく、高等科だけでも

大体１５００人ぐらいだっけか。
あとは・・・政財界から寄付金を募ることで、私立学校なのに学費が非っ常に安く抑えているのも特徴だ。
そして何を隠そうこの学校には翼さん、そして今は亡き天羽奏さんも在籍しているのだ。

ポカーンと口を開けていると、車は学校の門を潜り、シャッターが自動で開けられ、車が中に入るとシャッターが閉じる。
車から降りてエレベーターに乗り込み、スーツの男性――名前は緒川慎次と言うらしい――が何かのカードキーを翳すと、ガコンと音を立てて下の階に勢いよく降りていく。
エレベーターの中では沈黙が支配し、耐えきれず小声で隣の未来に声をかける。
「どうしよう。めちゃくちゃ沈黙が辛いのだが・・・」
「う、うん。そうだね・・・」
そしてピンポーンと音が鳴り、目的の階に着いた。
複雑に入り組んだ道を右へ左へと進んでいき、途中、未来だけ別室との事でどこかの部屋に案内され、今は俺と翼さん、そして緒川さんの３人分の足音しか聞こえない。
「・・・えーと、どうしてリディアンにこんな凄い施設が？」
「・・・」
「あー・・・答えられない、ですよねー」
沈黙に耐えきれずに、作り笑いと共にそう聞けば、
「・・・下手な愛想は無用よ」
「あっハイ、すいませんでした」
言葉の刀でバッサリ切られ、それを聞いてた緒川さんが顔に苦笑いを浮かべる。
そして、一際大きな扉の前にたどり着いた。
「ここよ」
そしてカシュンと音を立てて、自動で扉が開かれる。
「ようこそ、人類最後の砦、特異災害対策機動部二課、通称二課へ！」

両手を広げ、顔には笑顔を浮かべる大きな男の人。
昨日の自分が見たなら、身長でか！なんて言ってるが、どういう訳か今の自分にはハッキリと分かる。
（この人・・・絶対に俺より強いッ！）
２メートル近い身長にそれを包み込む筋肉の鎧。
その場に居るだけで圧倒的存在感を放つそれに思わず圧倒され、無意識のうちに半歩程下がっていた。
「俺の名は風鳴弦十郎。この二課の司令だ」
よろしくなと言い、彼――風鳴弦十郎と名乗った男性は右手を差し出す。
こちらも、いつの間にやら拘束を解かれた右手を差し出す。
「よ、よろしくお願いします。俺は――」
「黒然誠くん、だな。了子くんから名前を聞いてるよ」
えっ、了姉から？と言おうとするとガシッと首に腕がかけられる。
「うおっ!?」
「せーい？まさか貴方がこんなところに来るなんて想像してなかったわよー？しかも未来ちゃんと一緒とか、お姉さん聞いてないわよー？」
このこのーと空いてる手で了姉が背中を小突いてくる。
ぬおー！ともがき、何とか了姉の拘束から抜け出す。
「俺だって、まさかこんな事になるなんて思わなかったんだけど」
あと未来も来たのはそっちに連行されたからと、付け足しておく。
「了子くん、準備の方はできたのか？」
「安心しなさいな、準備はとっくに出来てるから。じゃあ誠、ちょっと医務室で検査するわよー」
じゃねーと言いつつ俺の首根っこ掴んでズルズルと引きずる。
ちょっと家族の扱い雑すぎやしませんか？と聞けば、家族なんだからこんなもんよー、と返された俺は泣いても良いだろうか？いや、良いはずだ。
（いやまぁ、泣かないだろうけど）
でもこの扱いは何なのさと、ため息をついてると、ふと、左手首が

少し黒くなってるのが目に入った。
なんだ？と思い触ってみれば、それは少しザラザラとしていて、軽く払えばそれは簡単に落ちた。
・・・さっき倒したノイズの残骸でもくっついたか？
「あっそうそう、未来ちゃんだけど。あと数時間もすれば家に帰っても問題なさそうよ」
「そうなの？じゃあ俺は？」
「誠に関しては検査が終わって結果が出るまでかしら？」
「んっ了解」
これは一緒に帰れそうには無いな、なんて思いつつも、じゃあその間未来は何してるのさ？と聞けば、俺が病院で書いたのと同じ書類を書いてるそうだ。
そんなこんなで目的の医務室にたどり着く。
「それじゃあ検査するわよ。上着と靴は脱いで、脱いだ服は荷物と一緒にそこのカゴに入れといてね」
「んっ」
りょーかいの意味を込めて返事しつつ持ってる荷物をカゴに入れていく。
ぽいぽいっと荷物を入れていきマフラーを取ろうとすると――ビリっと嫌な音が聞こえた。
「あっ・・・」
見れば自分の血で赤黒く汚れてしまったマフラーがついに耐えきれずに、真ん中辺りから破れてしまっていた。
今まで結構無理して使ってたものだ、いつかはこうなる事は薄々感じてはいたが、それでもショックは隠せない。
（・・・ずっと大切にしようって思ってたのに）
スルスルっと残りを取ってカゴに入れておく。
「それじゃ、検査するからそこの台に横になって。なに、痛くはしないわよ」
いやそれって痛いっていってるようなもんですよ？なんてツッコミはスルーされ、検査が始まった。

・・・・・・・・・・・・・

それから1時間に及ぶ検査が終わり「結果が出るまで個室で待ってなさいね」と言われ、入り口で待ってた黒服の人に連れられ、個室に案内される。

情報保護の観点から、と言う理由でスマホは没収されてしまい、他にやる事もないのでゴロリと備え付けてあったベットに横になる。

そして思い出すのはノイズと戦った自分の姿。

形は違ったが間違いなく、了姉が教えてくれたシンフォギア、だろう。

理由は不明だが、あの姿の時はノイズに触れても問題無く、炎による攻撃でノイズを燃やし、尚且つ背中に付いている翼により空も飛べる。

そして炎が効きづらい大型には、背中の翼を本来の形である両手剣を使えば良い。

(そして胸の内から聞こえたあの歌・・・)

胸の内から聞こえた歌を信じて歌い、大型ノイズを真下から切り飛ばしたが、あれを何も考えずに横から切り飛ばしてたら、街の被害とかもっと甚大なものになっていただろう。

(そんでもって問題なのは、俺自身を焼いたあの黒い炎だ)

最初は制御をミスったかと思ったが、そうじゃない、アレは俺自身の感情・・・特に怒りを糧に燃え上がっていた。

途中で何とか抑える事ができたが、もしあのまま抑えれなかった

ら、俺はあの黒い炎に燃やし尽くされてたのだろうか？・・・それとも、別の恐ろしい化け物に変わってしまってたかもしれない。
「・・・心に守りたいものを描け、か」
寝転がったままの姿勢で、左手を天井に掲げる。
今思えば少し恥ずかしいが、あの時は心の底から未来を守りたいと思えた。
そこに嘘偽りなんて無く、未来がいたから俺は戦えた。

「・・・ほんと、思いってのは大事だな」
「あら？誰を思ったのかしら誠？」
「フォ⁉？」
声が聞こえて飛び起きれば、いつの間に扉を開けて入ってきたのか、目の前に了姉がいた。
いつの間に、と聞けば「さぁいつからでしょうね？」と何やらニヤニヤした顔でこちらを見てくる。
・・・藪を突いて蛇を出すのアレなので、ニヤケ顔をスルーして結果出たの？と聞く。
「そんなところね。あぁ、結果発表はこの部屋でするから、誠はそこの椅子に座って待ってなさいね」
と言われ（但し顔は何やら意味ありげな目で見つめつつ）部屋の真ん中にある椅子に座って待つ事数分、部屋のドアが開かれ、風鳴弦十郎と名乗った男性と、その後ろから翼さんが入ってきた。
「了子くん。彼の検査結果が出たそうだな」
「そうよ。こっちに来たってことはそっちも映像は見終わったそうだし。それじゃあ早速検査の結果発表をしたいと思います。司会進行役を務めるは櫻井理論の提唱者にして、シンフォギアの制作者、そして二課の中ではできる女と評判の櫻井了子です！」
「了姉、それ誰に向けて言ってるのさ？」
「あぁもう緊張感の無い・・・」
俺のツッコミと翼さんのぼやきはスルーされ、くいっとメガネをかけ直した了姉は懐から小型の端末を取り出して話を始める。

「まず初めに身体の方だけど、初変身の負荷がすこーしばかり有るけど、これぐらいならほぼ問題なさそうよ。まぁ、心の方はどうかは分からないけどね」
「・・・まぁ、分からない事だらけだけど、心の方も一応大丈夫」
「なら良し!それじゃあ次に誠が変身したあの姿だけど。この姿が貴方で間違い無いわね?」
そう言って端末を操作し、何かの映像を見せる。
やや映像が荒いが、そこに映っているのはノイズをぶん殴る黒い騎士の姿、間違いなく先程の自分だ。
「うん、それは間違いないけど・・・。これってもしかして」
「えぇ、それじゃあその疑問を晴らすために次にいきましょうか。誠、貴方が纏ってたこの鎧だけど。分析した結果、完全聖遺物と聖遺物、この2つが混ざって出来てるわね」
聖遺物――世界各地でよく聞かれる神話や伝承の中に登場する、超常の力を秘めた物を指す言葉。
現在の技術では到底理解出来ない異端技術(ブラックアート)で、大抵はどっかの遺跡とかで発掘される――と言う事をかなり前に見たテレビでやっていたのを思い出す。
「一応、聖遺物の方はわかるけど完全聖遺物って・・・?」
その疑問には前で座っていた弦十郎さんが答えてくれる。
「完全聖遺物ってのは、基本的には欠けら程度しか残らない聖遺物とは違い、ほぼそのままの状態で現存する聖遺物の事だ。それ故に極めて希少で、尚且つ欠けら程度の聖遺物よりとてもポテンシャルが高いと言われている」
「それじゃあ、この鎧って凄いなんて目じゃ無いぐらい、めちゃくちゃ凄い物って事ですか?」
まぁ分かりやすく言えばそうだなと弦十郎さんは言い、了姉がそれじゃ続けるわよー、と言い、どこからか持ってきたホワイトボードを取り出す。
キュッキュッと赤ペンで完全聖遺物と書き、青ペンで人の形を描く。

「で、その完全聖遺物なんだけど。誠、貴方の身体に、完全聖遺物と聖遺物、この2つが溶け込んでるのよ」
「聖遺物が俺の身体に・・・」
「そうよ。そして私はこの状態の事を『融合症例』と呼ぶわ」
　そしてそれらの色を足した紫色のペンで人体を描き、その隣に融合症例と書く。
「今描いたように、融合症例の身体は、こう言う紫色の状態になるのだけど。誠の状態はその融合症例の中でも極めて稀なケース『特異融合症例』に入るものよ」
　そこに緑色で聖遺物と書き、最終的には黒色になった人の形を描き、その隣に特異融合症例と書く。
「特異融合症例、だと？」
　隣の弦十郎さんが疑問の声を上げる。
「本来、私が定めた融合症例ってのは、1つの聖遺物が人体と融合した人の事を指すのだけれど。先程言ったみたいに、2つ同時に混ざる、なんて事は普通あり得ないもの」
「えっ」
「だって本来なら1つの完全聖遺物（異物）が身体に混ざるだけでもかなり影響がある筈なのに、そこからさらに聖遺物（異物）を混ぜ込んで、あまつさえ人の形を平気で保ってるのよ。こんな事、外国の研究機関が知ったらただじゃ済まないわよ？」
　ちなみに知られたらどうなる？と、恐る恐る聞けば、「まぁ、十中八九拉致されて、即刻解剖室に運ばれるわねー」と恐ろしい事をさらりと言いのける。
「安心しなさいな。私の目が黒いうちはそんな事させないし、そもそもよっぽど本人が志願しない限りは、そんな人体実験じみた事はしないわよ。ねっ、弦十郎くん」
「あぁ、そんなに不安がらなくても大丈夫だ。そうならないように、俺たち大人が居るんだ」
　だから安心しろ、と弦十郎さんと言ってくれる。
　そう言ってもらえるのはありがたいが・・・そんな簡単に不安は拭

えない。
　そんな俺の気持ちを察してくれたのか、了姉が話を切り替えてくれる。
「次は誠の体に溶け込んだ2つの聖遺物の話よ。そっちの方は既に検討がついてるわ」
　そう言って端末をピッピと操作し、映像が切り替わり、何か古びた剣の写真が出てくる。
「誠の身体に混ざった完全聖遺物はおそらくは『グラム』と呼ばれる魔剣よ」
　グラム？と壁に持たれた翼さんが疑問を口にする。
「グラム・・・。北欧のヴォルスング・サガに出てくる、英雄シグルドが使ってた魔剣だな。確かドイツのニーベルンゲンの歌に出てくる竜殺しの英雄ジークフリードの持つ魔剣バルムンクと同一視されてるんだったか」
　弦十郎さんの解説に、俺は成る程と声を上げ、了姉は「説明する手間が省けて助かるわ」と言う。
（それじゃあ夢で見たあの人はシグルドって言うのか）
「そして、もう1つの聖遺物の名前はガングニール。・・・奏ちゃんの置き土産、守った証って所かしら」
「奏の、置き土産・・・」
　ガングニール、その名前が出た瞬間に部屋の空気が少し重たい物に変わる。
「・・・ガングニール、か」
　悲しさを含ませる静かなその呟きに、俺を見るその目に、誰かの影を一瞬だけ感じる。
「ええそうよ。どうしてそれがここに有るのかは・・・誠の方は、何か心辺りあるんじゃない？」
　そう指摘され、あの時の翼さんの反応を思い出し・・・1つの心当たりを口にする。
　あの日、翼さんたちに助けられた事と、その時に砕けた破片が突き刺さった事を。

それを聞いた弦十郎さんは「成る程、その時にか・・・」と言い、了姉はうんうんと頷き、納得したような顔をする。
翼さんの方は・・・とても辛そうな顔をしていた。
「おそらくはその時にガングニールの破片が埋め込まれたのでしょうね。そして、このガングニールの破片が、グラムと奇跡的なバランスで融合し、最終的には起動して、誠が纏ってた黒い鎧になったって所かしらね」
「それじゃあ、あの黒い鎧が聖遺物で出来てるから、俺はノイズを殴れたってこと？」
ふと気になったのでそう聞けば、了姉は「それもあるけど、多分だけど誠が特殊だから」と言う。
俺が特殊とは一体どう言う事だろう？そんな疑問に弦十郎さんも疑問を口にする。
「彼が特殊とはどう言う事だ了子くん？」
んーと、と少し間を置いて、説明しだす。
「シンフォギアと言うのは特定振幅の波動――つまり歌う事でノイズを調律し、強制的にこの世界の物理法則下に引き摺り込むでしょ。でも誠の場合、どうやら心臓の鼓動が歌の代わりになっているみたいなのよね」
「心臓の鼓動が・・・？」
「おそらくは、胸のガングニールがチューナー変わりになってノイズを調律して、この世界の物理法則下に引き摺り込んでる、としか現状言えないわね。文字通り、命を歌にしてるって奴かしらね」
流石の私もこれ以上は分からないわと両手を上げる。
「・・・」
ギュッと心臓を握れば、ドクン、ドクンと、心臓の音が聞こえ、ここに残る確かな物を感じる。
「さて長々と話しましたけど、私からの結論から言わせてもらうと、誠が変身したあの姿も、扱い的にはシンフォギアにカテゴライズされるわね」
そう結論付けられ、３人の色んな感情の篭った視線が突き刺さる。

了姉は興味有り気に、弦十郎さんはどこか後ろめたそうに、そして翼さんの方に目を向けた瞬間――――首を跳ねられる幻覚を、思わず幻視した。
（ッ!?）
思わず首を触る。
そこにはちゃんとくっついている首が有る。
・・・もう一度だけ、翼さんの方を見れば、顔を逸らす翼さんの姿がある。
（気のせい、か・・・？）
きっと何かの間違いだろう、とそう自分に言い聞かせる。
・・・それでも、胸のざわつきは暫く治らなかった。
「これもシンフォギア、と言う事は了子くん、彼もまた適合者、と言う事で良いのか？」
「今出てる結論から言えばそうなるけど、こんな荒技、第1種第2種の適合者にだって出来ないわよ。聖遺物を動かすほどの強靭な心か、はたまた貴方を生かそうとする聖遺物の意思によるものか。・・・どちらにせよ、神による突発的な奇跡が必要と言っても過言じゃないわよ」
（生かそうとする意思・・・）
脳裏を過ぎるは剣を引き抜いたあの夢。
あの人は確か、聖遺物に残った残留思念、と言ってたか、もし夢で会えるならお礼を言いたいものだ。
「それで、俺は結局これからどうなる、んですか？」
「・・・日本政府、特異災害対策機動部二課の司令の立場として言うならば、君の力を借りたい」
スッと右手を握手の形でこちらに向ける弦十郎さん。
人を守る立場の人としては、なんの制約もされてない俺を自分たちの制御可に置いて、この力で何の力も持たない人たちを守れる確率を上げるのが無難だ。
「・・・」
普通の、物語の主人公ならここで、やります、の一言が言えるのだ

ろう。
だが、俺は迷った。
ここで何処とも知れない誰かを守るのが正解で、間違ってない筈だ。
だがここで何処とも知れない誰かを守って、本来守りたい人を守れなかったら？――そう考えてしまい、俺はその手を握ることが出来ず、少し迷ってから、
「・・・少し考えさせて下さい」
なんて、言った。

――――――――

「そう、だな。すまない、君の気持ちの整理もあるだろうに」
彼のその答えに、すまないと申し訳なさそうに言い、少し急いでしまったと言わんばかりの顔をして上げた右手が下がる。
「あぁ、いえ。悪いのは俺ですし・・・」
と、こちらも申し訳なさそうにする。
どれだけ有れば答えは出そうなの？と了子が聞けば少し考えてから、1週間、と答える。
そして、話はまたその時と言うことになり、今日はこれで解散と言うことになり、彼、黒然誠はこの後に書類を書き、その後家に帰宅という話になった。
「・・・」
部屋の壁に持たれて話を聞いていた翼は誰にも気付かれず――否、弦十郎は気づいていたが、彼女は部屋を出て、二課に宛てがわれた自室に戻り・・・彼女にしては珍しく苛立ちと共に壁を殴る。
（認められない・・・あんな、あんな物がガングニールの筈が無い！）
ギュッと、自分のペンダント、ではなく片翼の、天羽奏のペンダントを握る。
それはあの日、塵芥となってしまった奏の亡骸からから、涙ながらに見つけた、中身は無い空っぽのペンダントだ。

（ガングニールは・・・ガングニールは奏のものだ！）
彼女は、風鳴翼は、天羽奏がどれ程の苦難、どれ程の血反吐を吐いて手に入れた物かを知っている。
成功する確率は限りなく低く、命の保証が無いと言われたリンカーを躊躇うことなく彼女は使い、血の海に沈み、それでも膝を折らずに立ち上がりガングニールを纏ったあの姿は、今でも翼の目に焼き付いていた。
（そんな血反吐を吐きながらも手に入れた力。それを――それを他の誰かが使っていい物じゃない、無双のひと振りをッ・・・！）
それなのに。
翼の目に映る彼の姿には、あの時見た奏の・・・言うなれば心の強さと言うものを彼から感じない。
奏の『ギアを辛うじて纏える奇跡』より上等の、『何のリスクも無しに纏える奇跡』の方が黒然誠、あの男に進呈された。
（そんな意思の強さが奇跡を起こした、だなんてまるで・・・）
胸の内に怒りが宿り、
「・・・まるで、奏の意思が弱かったとでも・・・？今の今まで戦い続けた彼女の意思が弱かった見たいじゃないッ・・・!!」
ダン！と行き場のない怒りを拳に込めて、再度壁を殴る。
――なぜ、あのライブの時には奇跡が起きなかったと、理不尽であれど、翼はそう思わずにいられなかった。
「他の人は何も思わないの・・・？ガングニールは彼女の物だって、そう思ってはくれないの・・・？」
翼の手には空っぽのペンダントしか残ってなく、対して彼にはガング（天羽奏）ニールの力がその身に宿ってる。
彼女の中では誠は『完全聖遺物（グラム）を纏う者』ではなく『聖遺物（ガングニール）を纏う者』として彼を見る。
そんな事実が堪らなく不愉快で、黒然誠を翼は心から羨み嫉妬する。
「奏とろくに話したことが無い奴が、なんで・・・！」
涙に目が滲み、彼と彼女の違いか解るたびに、翼の中で誠に対する

不信感が積もっていく。
そして先ほどの、彼の迷った顔を思い出し――三度壁を殴った。
（奏なら迷わない、奏ならすぐに叔父様の手をとる奏なら、奏なら――!!）
翼はどこまでも、誠を通して彼女を、奏を見る。
ただの空っぽにしか残ってない自分と、物として残る彼を比べ、溢れ出た怒りで壁を殴る。
「受け入れる事なんて出来ない・・・ッ！」
風鳴翼は人々を守ると心に決めた防人だ。
そんな彼女は今、人々のうちの1人である黒然誠に、剣を向けかねないほどの激情と敵意を抱く。
彼女をよく知る人たちが聞けばそれがどれだけ異常かよく分かる。
それがどれだけ異常で捻り曲がった感情であるかを知らしめる。
生半可な意思で、ガングニールを纏う事すら許さない。
それが風鳴翼という、真っ直ぐすぎる故に曲がれない、1人の女の子の姿だった。

第16話

あの日から2日が経過した。
ピリリリ！と喧しく目覚ましが鳴り、暗くなってた意識が戻る。
喧しい！と言わんばかりに無言でスパン！といつもの如く叩いて目覚ましを止める。
んー、と伸びをして、のっそりとリビングに移動し、ブルーベリージャムを塗りたくった食パンを食べつつテレビをつければ『謎の黒騎士、ノイズを撃退!?』などと未だにニュースで大きく取り上げられて、2日前の事が夢では無く現実なのだと、少し寝ぼけて頭でもそう認識させられる。
もぞもぞと口を動かしつつ思い出すのは弦十郎さんの言葉。
『日本政府、特異災害対策機動部二課の司令の立場として言うならば、君の力を借りたい』
「力を借りたい、か・・・」
だが俺は見知らぬ他人を守る、と言う所に躊躇してしまい、本当ならその場でやりますと言う所を、グダグダ悩んだ結果、決めるまで1週間と言ってしまった。
「1週間・・・もう残り5日か」
そんな自分勝手な所に嫌気がさし、はぁ、とため息を1つ吐き、テレビの続きを見る。
元警官と言うある老人は彼のお陰で命を救われたと言い、その背中に警官だった頃を思い出すと語り。
あるツインテールの少女は、あの人は絶対に正義の味方で、テレビの中から出てきた特撮ヒーローに違いないですよ！と興奮冷め止まず、と言った感じでリポーターの人の取材に答えてる。
（・・・こんなうだうだ悩む奴が正義の味方、ねぇ）
ピッとチャンネルを回せば、なにやら専門家と名乗る人たちが、あの黒騎士は何なのかというお題で議論している。
曰くアレはノイズと戦うために政府が秘密裏に作ったノイズ撃退の為の秘密兵器だと言い、曰くアレもノイズの1つでただの仲間割れ

だ、と画面の向こう側では様々な人たちがあーだこーだと言っている。
（・・・まぁ、その黒騎士は兵器じゃなくて人なんだけどね）
もっと具体的に言えば俺でっせ、なんて事は口に出して言える訳無く、パンと一緒に出かけた言葉を飲み込む。
ご馳走さまと言ってテレビの電源を落とし、食器を片付けて身支度をし、写真立てに向かって行ってきますと言い、鍵をかけて家を出る。
「あっ、おはよう誠くん」
「おう、おはよ未来」
家の前で待ってたらしい未来と挨拶を交わし、そのまま何時もの如く響の自宅に向かう。
「今日のテレビ、またやってたね」
「あぁそうみたいだな。・・・正直な所、まだあんまりってところ」
「あれからそこそこ経ってるけど、やっぱり実感できない？」
未来の言葉にコクリと無言で頷く。
「だってさ、まさかこんな事になるなんて思うか普通？」
苦笑いと共に聞けば、そうだよねと未来は返す。
そのまま歩いていき、響の自宅前の交差点に差し掛かったところで、ふと未来の手首に紐のような物が付いているのに気がついた。
なんか付いてるぞと言えば、未来は、あっ、と忘れてたと言った感じで、カバンを開けて何かを取り出す。
「はい、手出して」
「んっ？あぁ」
左手を出せばその掌に紐の様な物が置かれる。
これは・・・響にあげるミサンガだろうか？
「この前買った刺繍糸で作ってみたんだけど・・・どうかな？上手く出来てるかな？」
不安そうに未来が聞いてくる。
そうだな、と言ってミサンガを見る。
ミサンガは少し太めに作られ、色合いは黒に紫、そしてオレンジの三色がほつれた部分も無く綺麗に編み込まれている。

「贔屓目無しに言っても、めちゃくちゃ綺麗に出来てると思うぞ。俺が作ったらこうも上手く出来る気がしないな」
なんて褒めれば少し照れた様子でありがとうと未来が言う。
「それじゃ、これ返すよ」
そう言ってミサンガを返そうとすると、未来は一瞬キョトンとした顔をし、あっ、と何かに気付いた様に声を漏らすと首を横に振る。
「うんん、返さなくても良いよ。それは誠くんのお守りだから」
「俺のお守り？響のじゃなくてか？」
「うん、誠くんのだよ。響のは別に作ったから、それは君に持ってて欲しいな。・・・もしかして、嫌だった？」
嫌じゃないですと速攻で言葉を返しつつミサンガを左手首に付ける。
ミサンガなんて初めて付けたが、コレは中々・・・、なんて思いつつ交差点を渡り、響の自宅に辿り着く。
ここ最近は壁の落書きはだいぶ無くなってきたと思うが、それでも未だに落書きはされている。
良い加減諦めろよと内心愚痴りつつ、もはや慣れた作業で2人で手際良く消して行き、落書きの少なさと相まって１０分とかからずに全て消し終える。
全部消せたことを確認ヨシ！（現場猫感）した所でガラリと家の扉が開き、少し眠たげな響が出てきた。
おはようと2人揃って言えば、響もおはよ、と少しぎこちない笑顔で返してくれる。
昔に比べたらまだその笑顔に影があるが、それでもギリギリ自然な笑顔の範疇だ。
「響、手出して」
響が不思議そうに右手を差し出すと、その手に先程より細めに作られた同じミサンガが手渡される。
「これって・・・」
眠たげだった目が覚め、いいの？と不安そうに聞いてくる。
もちろんと言う意味を込めて、さっきつけたミサンガを見せてる。

それで安心したのか、ありがとうと今度こそは自然な笑顔を見せてくれて、嬉しそうにミサンガをつけ、どうかな？と聞いてきたので俺は無言でグッと親指を立てておいた。

キンコンカンコンと1日の授業の終わりを知らせるチャイムが鳴り渡る。

ものの数秒で教室内はガヤガヤと煩くなり、教室の話題は黒騎士の事で朝から話題が持ちきりだ。

そのお陰か、今日も誰も言ってこないや、と響は思い、誠は、黒騎士様様だな、とありがたく思う反面、2日前の事を思い出し、どうしたもんかなとヒッソリとため息をついた。

「やっぱりどこもかしかも黒騎士の事ばかりだな」

と響の視点では頬杖をついて、何やら考え事なのか、何処となく上の空な誠。

そんな誠の様子が気になり、響は聞いてみた。

「せーくん、何か悩み事？」

「んっ？あーと・・・まぁ、そんなとこだけど、気にしなくていいぞ」

「でも、悩んでるなら1人より2人で悩もうよ」

なんて言えば誠は目を丸くし、続いて少しタフになったな、と少し驚いたように言う。

響はそうかな？と言って自身ではあまりタフになった自覚は無いが、誠の目から見れば少しずつではあるが響はタフになっている。

最近はあまり顔を伏せておらず、朝に未来が渡したミサンガのお陰も相まってか、今はしっかりと前を向けている。

そのまま響がジーと見つめてれば、参ったと言う感じに誠が片手を上げて悩みを打ち明ける。

「それじゃあ言うが、悩みってのは」

「うんうん」

スッと了手を机の上に置き、一拍置いてから深刻そうにこう言っ

た。
「今日の夜に何作ろうかと悩んでたんだ」
「成る程、それは確かに深刻な悩みだね」
だろ?と返して、そのまま上手いこと話題が切り替わったのを確認し、そそくさと慣れた手つきで鞄に荷物を入れ、手早く教室を出て―背後から誰かの嫌な視線を感じつつ――隣のクラスから出てきた未来と合流、そのまま校舎の裏口から学校を出る。
後は何事もなく響の自宅に向かうだけだが・・・。
「なぁ?まだこないのか?」
「もう学校が終わってるからこっちにくる筈なんだが・・・察して逃げたか」
「つまんねぇ・・・もうこっちから行った方が良く無いか?」
近所の中学生ではない、3人の中で一番大きい誠よりも大きな人たち、多分大学生あたりだろうか?響の家の前で、あからさまに危害を加える気満々の男3人が待ち伏せている。
偶々誠が1番前を歩き、家の前にいる大学生たちを見つけて、急いで響を曲がり角に隠し、そこから数分は待ってみたが一向に去る様子はない。
響の方は当たり前だが、そんな光景に怖がり足が竦んでしまい、暫くは動けなさそうだ。
(どうしたもんか・・・)
いかに誠が男であろうと、流石に体格と数の差で有る大学生3人の相手は無理の一言だ。・・・・一応の選択肢として黒騎士姿なら余裕かもしれないが、アレは人相手にぶつけては行けないので選択肢から1番に消した。
未来に何かアイデアがあるか聞くが、流石に思いつかないのか首を横に振る。
(このままだと、響を家に帰せない・・・)
未来も同じく考える。
電話で誰か呼ぶ?と考えるがこんな荒事向きな人、未来の電話帳には入ってはいない。

・・・・・一応誠の方は2日前の帰り際に荒事に強そうな人の番号を了子から渡されたが、いくら大人であろうと大学生3人は無理だろうと、思考して口には出さず、最終的には頼れる人が居ないと言う結論に2人同時に達してしまう。
（・・・ここは俺が囮になるから、その隙に響を家に入れてくれ）
（いくら誠くんが男の子だからって、それは危ないよ！囮なら私が）
いやそれこそ危ないだろ？いやいやそっちも危ないからね？と意見が分かれて平行線になる。
俺が、私が、と言ってると後ろから声をかけられる。
「そこの少年少女たちよ、何かあったかね？」
「へっ？」
3人が後ろを振り返れば、そこには老人と、それに付き添ってるのか、片手にビニール袋を持った若い警官の2人が立っていた。
そして2人は誠たちが見てた方を見て、ふむ、と顎に手を当て似たような仕草で考える。
「見るに君たちはあの家に行きたいのかい？」
「えっと、はい。そこが私の家なんですが、その・・・」
若い警官が響の目線まで腰を下ろして、安心させるように聞けば、響は少し安堵した感じでそう答えた。
「成る程。それじゃワシらに任せてくれ」
ほれ行くぞと老人はスタスタと杖をつきながら歩いて行き、若い警官は、危ないからじいちゃんは後ろにいてよ、と警官は老人の前に出る。
どうやらあの2人は祖父と孫のようだ。
そして後ろで誠たちが見守る中、2人は家の前にいる大学生に話しかける。
大学生の方は最初、何処かお気楽な感じで話していたが、次第に自分たちがしょっ引かれると分かると次第に顔が青ざめる。
「な、なんで!?俺たちはただ・・・」
「そんな事は知らないよ。僕は正義の味方なんかじゃあなくて、法律の味方なんだから」

それじゃあ続きは派出所で聞くよ、と言って大学生らを説得しようと試みるが、あの手この手でなんとか逃げようと大学生らは模作する。
が、そこで後ろにいた老人は全部知ってるぞ？と言わんばかりにニィと人の悪い笑みを浮かべる。
「そこの若いの、法律というものを教えてやろう。ルールを守ってる人は守れ。そんでもってそのルールを守って無いヤツは――――ぶっ飛ばせ、とな」
なんて老人が言ったのが後押しになったのか、我先にとばかりに大学生たちは一目散に逃げていく。
「あっ、君たち！」
「ほっとけほっとけ、あんなのはどこの時代、どこの場所にもいるもんさ。お前も後2、３０年すれば嫌でも分かるさ」
かっかっかっ、と人生経験豊富な老人はそう割り切った答えをだして笑い、それを聞いた警官は、理解はしたが納得はしてないと言う顔をして、逃げた大学生たちを見ている。
そんな悩む警官を背に、老人はシワのある顔に先程見せた物とは違う、人を安心させる笑みを浮かべて誠たちの方に歩み寄る。
「ほれ、これでそこのお嬢ちゃんは家に帰れるさ」
「「あ、ありがとうございます！」」
３人揃ってお礼を言えば、素直じゃのう、と笑みを浮かべる。
「何か困ったら事があったら１１０番じゃよ。そうすればこんなヨボヨボの爺さんなんかよりも、立派な警官が助けに来るじゃろ」
「・・・良いんですか、その、１１０番しても？」
誠が本当に？といった感じに聞けば、老人はハッキリと、おう、ガンガンかけなさいと言い少し安心させるように雑に頭を撫でる。
「助けを求める事は、消して恥ずかしくない。なんならワシは前に助けられたからのう。あの例の黒騎士に、な」
「・・・！」
「また会えればお礼が言いたいもんじゃの。それじゃ若いの、達者でな」

誠が驚いたように息を呑むが、老人は気にせずに、悩んでないで行くぞと、悩む警官の背中を軽くバシバシ叩いて歩き出す。
響と未来は老人たちに再度お礼を言って頭を下げてから、家に向かう。
誠も未来たちの後ろをついて行くが、一瞬だけ立ち止まって拳を握り、また走り出す。
あの老人は、誠が助けてなかったらノイズによって殺されていた人だ。
人を助けることは無駄なんかじゃない、そう図らずとも彼自身にそう証明していく。

日は進んで次の日、期限まで残り４日。
その日偶然にも、誠が教室のゴミ出しで１人だった時だ。
響たちは先に帰らせたが、気持ち早足で焼却炉まで走り、ポイっと焼却炉にゴミを入れて蓋をすると、背後から声をかけられた。
「そこを動くな黒然！」
「・・・・」
無言で振り向けば、そこそこにガタイの良い男子生徒たちが誠の逃げ場を塞ぐように立つ。
数は男女合わせて１０人程か。
「なんだ、何か用か？」
「なんだ？じゃねぇだろ。敵討ちだ！」
後ろからは、そーよ、そーよ！と言う女子生徒たち。
「・・・・」
誠は自身の視点を一歩引かせて見る。
今、誠の目の前で話してるのが眼鏡をかけた周りのやつより少し小柄の生徒で、裏声気味に話すのが、この中での頭脳担当なのだろう。
その背後には、１番ガタイがよく、この中では１番乗り気では無い、という顔の男子生徒。

そして、よく見れば同じクラスの同級生だという事に気がついた。
（・・・とりあえず、この小柄から説得して見るか）
昨日の老人たちのように出来るかは不明だが、まずは一歩踏み出し、小柄な生徒の前まで歩く。
「とりあえず俺は無害だから、先ずは話を――」
そう言って、自分は無害だと証明するように、手を上げる。
だが、それが悪かった。
慣れない説得と言うのもあるが、どうして彼らは集団で来たのか、と言う事を誠はもう少し考えるべきだった。
この小柄な少年の頭には『コイツは人を殺したヤツだ』と言う思考がこびり付いている。
「っ――――！」
故に思わず過剰に反応し、後ろに下がる。
「っ離れろ！」
その結果、集団の目には、人殺しが友達に手を出そうとしてる、と言う光景が映る。
そして、その中の仲間思いの男子生徒が過剰に反応、偶々誰かが捨てたらしい木製のバットを反射的に手に取り、そのまま近づいて来た誠に向かって振り下ろす、と言う蛮行に走らせてしまう。
「なっ・・・!?」
まさかいきなり攻撃するなんてしないだろ、と思っていた誠は驚いて身体が反応的に止まってしまい、その結果、振り下ろされたバットを避ける事が出来ず――ガン！と木製バットが頭に当たった。

――――――――

「っぁ――――」
いつの世も、誰かが暴走し、致命的な事をやらかしてしまうと言うのはよく聞く話だ。
バットが人に当たる嫌な音、自分のくぐもった声、そしてそのまま後ろにどサリと倒れる音。

殴った本人も、えっ、と信じられないと言った感じに目を見開き、次第に自分がやった事の重大さに気付いて来たのか、体は震え、先端が赤くなったバットを落とす。
カラン、と言う軽い音がやけに鮮明に聞こえる、と何処か冷静な部分でそう思った。
そんな状況に真っ先に我に帰ったのは、俺に話しかけた小柄な少年だった。
「お、お前、何やってんだよ!?」
「だ、だって、人殺しの仲間が、お前にさ」
「だからってまだ何も言ってないし、聞いてないだろ!?」
「ちょっとヤバイよこれ!?どーするのよ!?」
その場にいる全員が夢から覚めたようにハッとなり、自分たちが殺してしまった?という思考が全員に走り、サーと血の気が引いていく。
生徒たちが言い合ってる間に、このタイミングしかない、と痛む頭で思考し、無理やり自身の体を立たせる。
「俺を、叩いて、どんな気持ちだ?」
ふらりとしつつも立ち上がり、一歩踏み込んで、生徒たちの前に立つ。
タラリと頭から少量の血が流れ、ガンガンと頭が痛む。
「血に塗れた俺をみて、嫌な気持ちになったんじゃないのか?」
言葉を紡ぐ。
誰かを傷つけて動揺してる今、間違ってる道を正すには、ここしか無い。
「人を殺してしまったって、思ったんじゃないのか?・・・後悔、したんじゃないのか?」
背中に嫌な汗が流れ、頭はガンガンに痛むが、あの時と同じ嘘っぱちの仮面を被って平静を保ちつつ、視線を周りから、バットで叩いた男子生徒に向け語りかける。
周りの目が俺から叩いた男子生徒に向き、その一瞬だけ視線が男子生徒に集中する。

たかが一瞬、だが、されど一瞬だ。
圧迫された視線に耐えきれず、小さな声で、はい、と言った。
「・・・だろ?誰だって、痛いのは嫌だ。生還者は人殺しだから、傷付けて良いなんて事はないんだ。――誰かを傷つけて平気な人間なんて何処にも居ないんだ、絶対に」
ただ真っ直ぐに言葉を紡いでいく。
綺麗事だとは理解している、世の中斜に構えた言葉の方が不思議と受け入れられる。
だが、それでも受け入れられないとしても、俺は綺麗事を吐き続ける。
「言葉だけだと、痛みになんて気付かないけど。今みたいに、こうやって間近で、今みたいに人が傷付く姿を見れば、誰だって心が痛むんだ・・・っ」
脳裏に過るのは、あの雨の日に泣いた響の姿。
一瞬だけ、グラリと体から力抜けるが、辛うじて立て直す。
血に塗れながらも、暴力に訴えずに、ただ言葉だけで伝える。
その光景に何か思ってくれたところがあるのか、生徒たちに響いたようだ。
「ど、どうするのよ?」
「そ、それは・・・」
「・・・謝らないと、いけないだろ」
ここで、今まで黙っていたクラスメイトが口を開いた。
「えっ・・・」
「誰がどう見たって俺たちが悪いだろ」
この中で唯一、謝らないといけないと言った。
「正直、この流れを作ったのは・・・作ってしまった1番の原因が俺だ。もしかしたら、怪我させたのが俺だったまであるんだから」
「山田・・・」
どうにもこのクラスメイト、もとい山田を中心に、俺の知らない何かがあるらしい。
「だって、流されるままに誰かを傷つけて、それで気持ちに整理をつけ

ようなんて・・・。でも、それはダメだろ!?ここでなあなあに済ませて、謝らないのは間違いだろ!?」
その言葉に感化されたのか、山田の言葉が周りに伝搬していく。
「コイツは俺たちを論破しようとしてる訳じゃない。自分の正しさを見せつけようとしてる訳じゃない。暴力を奮った俺たちに怒りもせずに、諭してくれてるだろ！」
その言葉に周りがハッとなったような顔をし、その場の空気が変わっていく。
「俺たちにそれは間違ってる、って忠告してくれてるじゃ無いか！」
一気に言葉を吐いて苦しいのか、肩を上下に動かす。
ありがたい事に、誠が言いたい事を彼が代弁して言ってくれたお陰で、少しばかり休めた。
ポケットからハンカチを取り出し、少し流れた血を拭いつつ、とりあえず最後に俺が言いたい事を伝えておく。
「人を傷つけないってのは、相手の為でもあるけど、自分の為でもあるんだ。・・・こう言った事が起きないようにな」
分かったか?と言えば、は、はい！と返事をする男子生徒たちと、バツが悪そうに無言でコクリと頷く女子生徒たち。
「・・・皆は先に帰っててくれないか」
「山田、でも・・・」
「コイツは俺たちが思ってる人じゃなかったよ」
「・・・だよね」
そして1人1人、帰り際に、ごめんなさいと謝って行き、最終的に山田1人が残った。
「・・・えっと、頭の怪我は大丈夫そうか?」
「少し血が出たぐらいだけど・・・ま、念のために後で保健室行って一応ガーゼかな」
にしても、この怪我を響か未来どちらかに見せようものなら、変に心配させてしまうな。
明日ぐらいに治ってくれると助かるんだが・・・。
「で、山田1人だけ残ったのは?」

「その、・・・それやったの、俺って事にしてくれないか？」
「・・・別に、派手にこけて怪我したとでも言っとくさ。俺も、誰かを責める気はないんだから」
　でも、こういうのはこれで最後にしてくれよ？と、言えば、さっきの血に濡れた姿を思い出したのか青い顔をしつつ、わ、わかったと頷いた。
「にしても、お前って結構友達思いのヤツなんだな？」
「・・・そんな事ない、あいつらが黒然を叩いた原因は俺にあるんだからさ」
　俺がそう言えば、山田は表情を曇らせる。
「・・・さっき黒然を叩いたヤツが昨日教えてくれたんだ。俺の友達があのライブで、助けたやつに突き飛ばせれて殺されたらしいんだ。・・・いい奴だって知ってたから、許せないって思ったんだ。そうしたら、じゃあ敵討ちだ、って黒然に話しかけた小柄な奴が目標を決めてくれたんだ、１つの得なんてないのにさ」
　で、後は人数かき集めたらあの人数になったと、彼は語る。
　男の友情とはシンプルと良く言われるが、それでも時折このように面倒くさいときがある。
「でも、だからと言って人を傷つけるのは良くないだろ？」
「だよな・・・そんな事、誰でも知ってる筈なのに」
　そうだな、と返しつつも、杞憂かも知れないが釘を刺しておく。
　ぶっちゃけ、自身の傷は割とどうでも良いと思ってる。
　自分の傷ならただ相手を許せばそれで終わるが、他の人――特に未来と響どちらかを怪我させたら。先ず間違いなくその怪我させた奴をぶん殴りにいくという自信がある。
「本当に、ごめん。俺、笑えないぐらいに、最低野郎だった」
「次しないなら、それで良いよ俺は」
　暗に、次はないぞ？と含ませてそう言えば、青い顔をして、こくこくと頷いてくれた。
「じゃあ、山田も帰っていいぞ。俺はもう大丈夫だから」
「でも・・・」

「いいから、俺は平気だ。本当にヤバかったら、こんな元気に立って喋れないさ」
だから大丈夫だ、と念を押して言えば、渋々といった感じに、わかったと言い、去り際にもう一度、ごめんなさいと、頭を下げて去っていく。
そのままたっぷりと5分程待って、戻ってこない事を確認すると、どサリとその場に座り込む。
「痛っ・・・」
何とか平気だといって押し切ったが、ぶっちゃけ凄く痛い。
(てか、なんかここ最近怪我してばっかりだな俺・・・)
しかも下手すりゃ死ぬレベルの怪我をだ。
そんな自身の不幸さに苦笑しつつ、まずは保健室からかな、と思いつつフラフラと立ち上がろうし、何故か体に力が入らず、パタリと倒れ込む。
「あ――――れ――――」
グラグラと視界は揺れ、倒れたままの姿勢で、そのまま目蓋が閉じて行き、誰かが駆け寄る姿をボヤけた視界で眺めていると――――そのままプツンと、意識が消えた。

第17話

どれくらい寝てただろうか？暗くなった意識が浮上すると、まず初めに消毒液の匂いが鼻口をくすぐる。
んっ？消毒液？と思う間も無く、次に来るのは頭を駆け巡る、鈍い痛み。
「痛っ・・・」
そしてゆっくりと目を開ければ、清潔感漂う、見知らぬ・・・いや違う、見たことある部屋が目に入る。
「・・・なんで、病室にいるんだ？確か俺は学校にいた筈なんだが・・・？」
んー？と唸って考えるが、全く検討もつかない。壁に立てかけてある時計を見れば、アレから2時間程経過したようだ。
「その疑問には私が答えるわ」
と、ここでトビラの方から聴き慣れた声が聞こえる。
「・・・成る程、了姉だったか」
「もう、少しは驚きなさいよ」
いやだって、ねぇ・・・？と言う視線を感じ取ったのか、コレが慣れかしらねぇ・・・と小さく呟きつつ、こちらに歩み寄る。
「それにしても、頭殴られたって聞いたから不安だったけど、元気そうで良かったわ、でも」
そして何故かベシっと割と鈍い音がしたデコピンを喰らう。
「あでっ!?」
「今回は当たりどころが良かったものの、逆に悪かったら死んでたかも知れないのよ？無茶するのは男の子の特権だけど、心配する人が居るって事をちゃんと理解しなさいね」
わかった？と念を押す様に了姉が言う。ぐぉぉと苦悶の声を漏らしつつ、コクコクと頷いておき、一応の弁解を口にする。
「・・・それでも、あの時はアレしか方法がなかったんだ」
「そうは言っても、もう少しだけ穏便な方法はなかったのかしらね？」
それもそうだ。振るわれたバットを、避けきれかったとは言え、く

らい、その怪我と血で動揺した生徒たちをその罪悪感に付け込んで説得して、正気にするとか、思っても普通なら絶対やらないと確信できるが、響の現状を変えるのは、後にも先にもコレしかないと思い、迷う間も無くこの選択を選んだ。
「さっき無茶するのは男の子の特権とは言ったけど、もっと周りの気持ちも考えなさいよ？ただでさえ今の貴方は大変なんだから」
「・・・ごめんなさい」
そう謝れば、ならよしと言いつつ続けてこう言った。
「そうそう、３０分前ぐらい前かしら、未来ちゃんから電話来てたから、今は病院に居るって代わりに言っといたわよ」
「え〃」
そう言えば、と言った風に了姉があっさりとそう言った。てかそんな大事な事忘れないで欲しいが、今はそんな事言ってる場合じゃない・・・！
「・・・退院しよう、今すぐに！」
なんて急いで立とうとすれば、コラコラと、一体どこにその細い腕のどこにそんな力があるのか、全く立てずにベットに押さえ付けられる。
「諦めなさい、さすがに今日の退院は無理そうよ。さっさと腹括って女の子に怒られなさい。それが、無茶する男の子の特権よ」
そんな特権、出来る事なら投げ捨てたい！
「いや了姉は知らないだろうけど、未来って静かに怒るからかなり怖いんだよ!?去年の夏なんて、間違えて未来のかき氷食べた時なんて、後ろにどっかの白い魔王様が見え――」
「あっ、了子さん、ご無沙汰してます」
ピシッ、と空気が凍る音と共に部屋の温度が少し下がる。その時の反応は、三者三様。
口からヒエッと悲鳴が漏れる俺（愚か者）。
こんにちわと未来（魔王様）は俺をガン無視して、了姉に挨拶。
了姉もそれに対して、こんにちわーと返し、未来の纏う空気を察したのか、くるりとトビラに向かって歩く。

「後の事は未来ちゃんに任せるから、私はちょっと席外しておくわねー」
俺が止める間も無く、軽やかな足取りで部屋を出て行った。
ピシャンとトビラが閉められ、後に残るは、笑顔の未来と頬を痙攣らせる俺のみ。コツコツと一歩一歩詰め寄り、こちらの逃げ場を無くしていく。まぁ、もとよりベットの上にいるから逃げ場なんてないんだけども！
「ねぇ誠くん、私はお話、聞かせて欲しいな？」
「それは・・・その―・・・」
未来は基本的には感情を昂らせて怒るタイプでは無く、どちらかと言えば感情を昂らせずに、静かに怒るタイプだ。
コレはあくまで個人的にだが、この時点で恐ろしさの倍率は高く、更には声色は普段と同じだから尚の事恐ろしさの倍率ドン上がりでなのである。
「聞かせて、欲しいな？」
（二回言った!?）
褒める所はキチンと褒め、怒る所はしっかりと怒り、俺が蔑ろにしてた『生きたい』と言う気持ちを取り戻させる。
それを蔑ろにしてたら、いつの日か必ず、最悪の場所まで転げ落ちてしまう。
「あ、あはははは・・・・・」
「・・・」
「・・・はい」
だがそんな事に気づかない俺は未来の笑顔に恐怖し、カクンと項垂れ、大人しく全て白状するほか無かったのだった・・・。

・・・・・

・　・　・

それから３０分程続いた長ーいお話が終わり、窓の外では、日が少しずつ傾き始め、ちらほらと家に明かりがついていく。
ふと目に入った、備え付けのカレンダーを見れば期限まで、残り３日ほど。
（・・・ほんと、どーするかね）
ふー、と小さくため息を吐く。
「ねぇ誠くん」
了姉遅いなぁと思いつつ、町の明かりを眺めていると、未来が話しかけてくる。
「んっ？どした未来？」
「・・・何か、隠してることない？」
ドキリと心臓が高鳴り、思わず動きが一瞬止まる。
部屋はチクタクと時計の音が支配する。数秒か、はたまた数十分の間、ジッと見つめられる。
チクタクと小さく聞こえる時計の音も、今はなんだか、すごく大きく聞こえる。

折れたのは、俺だった。
「・・・俺さ、この力を貸してくれって、頼まれたんだ」
「それって・・・」
「あぁ、未来の想像通りのヤツさ。だけどさ俺、その時に首を縦にふれなかったんだ」
何かを懺悔するかのように、言葉を吐き出す。
「あの時は、勢いよく啖呵きって覚悟したのにさ、いざ見知らぬ他人を守ってくれって頼まれたらさ、迷ってたんだ。・・・本当、かっこ悪いよな俺・・・」

悪い意味のため息が口から漏れる。・・・もしかしたら、誰かに聞いて欲しかったかも知れない。
そんな俺の気持ちを知ってか、未来は少しだけ目を瞑って考え、目を開ける。
「うんん、違うよ、誠くんはかっこ悪くない。ただ、少しだけ怖がりなだけだと私は思うよ」
「・・・それこそかっこ悪いもんだろ?そこで怖がらないのが強い人ってもんじゃないのか?」
頭に疑問符を浮かべつつそう聞けば、未来は、違うよと首を横に振る。
「本当に強い人って言うのは、その怖さを跳ね除ける人だと思っているし、私はそう言う人を知ってるよ」
じゃあその人って誰さ?と聞けば、少し照れ臭そうにしながら、私の目の前にいる人だよ、と未来は言う。
・・・俺?と再度聞けば、ちょっと照れ臭そうに、誠くんだよ、と返される。
「なんか照れるけど、俺はその、未来の言う強い人に当てはまるのか?こんなにウダウダ悩んでるのに?」
「うん、ちょっと怖がりな所も有るけど、誠くんは強い人だよ。・・・だからさ、誠くんはどうしたいのか、本当の気持ちをさ、教えてよ?」
「本当の気持ち・・・」
上を向いて、考える。・・・本当は答えなんて既に出ている筈なのに、あの時に喉につっかえて出せなかった言葉が今になって出てくる。
「覚悟はあった・・・だけど、痛いのは嫌だ、何よりこの前みたいに戦うのだって、本当は嫌さ。だって、カッコ悪いけど、死にたくは無いんだ」
そこで一旦言葉を区切り、一つ深呼吸。
「・・でも、だからと言って戦わない事を選んで、それで守れなくなって、心が痛くなって、苦しくなるのはさ、もっと嫌だ。戦いたくない、だけど戦って守りたいんだ。・・・変かもしれないし、矛盾してるか

もしれないけど、それが俺の気持ち――それが俺のしたい事だ」
スラスラとあの時言えなかった言葉が言えた。こんな簡単にも、あっさりと言えた。
「それが誠くんの気持ちで、本当にしたい事？」
「あぁ・・・。どうも、それが俺の気持ちで、本当にしたい事みたいだ」
「・・・じゃあ、一つ約束して」
「約束？」
一歩踏み込み、俺との距離を狭まる。
「うん。カッコ悪くてもいい、凄くなくてもいいから――私と響がいる日常に帰ってくるって約束して」
「――」
真っ直ぐな視線で見つめられ、思わず息を呑んだ。
「あぁ約束する、絶対に帰ってくるって」
「それじゃ、小指出して」
と言われ、それを見て察した俺も小指を出して、軽く絡ませ、そして2人同時に煩くならない程度の音量で歌い出す。
「「ゆーびきーりげんまん、うそついたらはりせんぼんのーます。ゆびきった！」」
僅か数秒の歌を歌い、絡めた小指が離れる。
昔からある約束の歌。子供っぽいかも知れないが、俺たちの中では、これが一番約束守るのに効果的だ。
「さて、日も落ちてきたから、そろそろ帰るね」
「おう、気を付けてな。・・・また明日」
「うん、また明日」
軽く手を振り、未来が病室を後にし、少しの間を置き、少しニヤけた顔の了姉が入れ替わりで入ってきた。
「いやー、青いわねー誠？」
「・・・別に、何時もの事だから」
「へぇー、アレが何時もの事、ねぇー」
口元に手を当てニヤけが止まらない了姉に向かって不意打ち気味に枕を投げるが、読まれてたのかアッサリとキャッチされ、そのまま

投げ返され、キャッチし損ねた枕が顔面に当たる。
「むぐっ・・・」
「まっ、不意打ちかます位には元気になったと言うべきかしらね」
　良かった良かったと言って備え付けの椅子に座る。とりあえず顔面に当たった枕を元の位置に戻しつつ、姿勢を正す。
「あのさ、了姉」
「うん？」
「この前の事だけどさ、俺、戦うって決めたよ」
　俺がそう言えば、了姉は静かに俺を見る。部屋は再び沈黙に支配され、チクタクと時計の音が大きく聞こえる。
「そう・・・戦うのね」
　そう言って目を細め、その一瞬だけ了姉の目が、何か懐かしむような、そんな目に変わったような気がする。
　だがそれも一瞬、すぐに元の眼差しに戻り、白衣から携帯を取り出す。
「それじゃ早速弦十郎くんに報告する訳だけど、覚悟は良いわね？」
「うん、大丈夫。・・・ちゃんと帰ってくるって約束したから」
　ギュッと片手を握りつつそう言えば、了姉はふっと笑い、それじゃ伝えてくるから待ってなさいね、と言って部屋を出て、その数分後、部屋に戻ってきた。
「弦十郎くんには伝えたから。詳しい説明とかするから、明日の朝にリディアンに行くわよ」
「わかったけど、学校にはなんて言うのさ？」
「風邪ひきましたって明日言っとくわよ。それじゃそろそろ帰るから、また明日ね誠」
「また明日、了姉」
　ピシャン、とトビラが閉まり、部屋には俺1人残された。
　明日、そこから自分の人生が今より少しだけ、物騒な物が追加される。
（そこに不安が無い、と言えば嘘になるが、未来と約束したんま、2人の元に帰るって約束したんだ）

頑張るぞ、と意気込みつつ、ふと空を見上げれば、一番星がキラリと輝いた。

・・・・・・・・

そして翌日の朝、何処かピリピリと肌を刺す痛みと共に目を覚ます。

窓の外を見れば日は上り鳥が数羽羽ばたいてる。

チラリと時計を見れば時刻は朝の９時少し前、普段ならこの時点で遅刻確定な訳だが、今日は違う。

「・・・今日はリディアンの地下行きか」

なんか字面だけ見たら地下労働かなんかと間違えるぞ?

「はーい、おはよう誠。起きてなくても叩き起こすわよーって起きてたのね」

片手に紙袋を持った了姉が部屋に入ってくる。

「おはよ了姉。・・・なんか、久しぶりに了姉におはようって挨拶した気がする」

奇遇ね私もよ、と言いつつポイっと紙袋をこちらに投げ渡す。それを両手でキャッチしつつ中を見れば、学校の制服が入っていた。

こっちにくる前に一回家に取り入ってくれたらしく、その事に感謝しつつ、一旦了姉を部屋から出して―ついでに受付も済ませてくるとの事―紙袋に入ってた制服に着替えつつ、荷物を纏めて部屋を出る。

少し駆け足気味に１階まで向かえば、少し混んでるのか、了姉はまだ受付で並んでるみたいだ。

「あっ、ちょっと受付が混んでるみたいだから、先に車に向かってて」

「わかったけど・・・了姉が運転してくの?」
「勿論、と言いたいところだけど、今日は緒川くんが運転してくれるわ」
「緒川さん・・・あぁ、あの人か」
俺の中でのイメージが突然出てきて手錠かけた人と言うものだ。・・・自分で言っといてアレだけも、それってどんなイメージだよ。
「病院の入り口近くにいると思うから先に乗ってなさいねー」
「りょーかい」
そんな訳で病院の入り口を抜け、えーと、と言った感じに周りをキョロキョロすれば、黒い車の近くに柔和な顔のスーツ姿の男性を見つけた。
黒髪ではなく、染めた色ではない自然な感じ茶髪の男性、緒川慎次さんが立っていた。
初見なら、素朴な印象を受ける柔らかな笑みでこちらの警戒心を緩めていくような、そんなイメージをするが、俺の中では背後から出てきて手錠をかけた人、というイメージが付いてしまってる。
緒川さんもこっちに気がついたみたいで、こちらですよ、と手招きしてくれた。
「お、おはようございます」
「はい、おはようございます。了子さんからはお話は聞いてます。荷物は荷台に置けるので、良かったらどうぞ」
と言う事なので持ってた荷物は荷台に積んで置き、自己紹介しないとと思い、緒川さんと向き合う。
「えっと、改めまして、黒然誠です」
「ではこちらも改めて自己紹介を。僕は緒川慎次と言います。翼さんのマネージャーを務めています、よければこちらをどうぞ」
「あ、ありがとうございます」
そう言って淀みなく手渡されるのは、シンプルなデザインの名刺で、小滝興産株式会社所属　緒川慎次と書かれており、仕事のできる大人な感じがして、それが何となく、自分の目にはカッコよく見えた。

「これが名刺・・・」
「誠くんも大人になって仕事をすれば、きっとそのうち持つようになりますよ」
「そう、ですかね？」
両手で受け取った名刺を財布の中に入れておき、いつの間にか開けられてたトビラから後ろの座席に座る。
そしてそのまま5分ほど待てば、了姉が車に合流し、俺たちが乗った事を確認した緒川さんがリディアンまで車を走らせた。

・・・・・・・・

リディアン地下に建造された特異災害対策機動部二課、通称二課にある来客用の部屋の前に俺は緒川さんに案内された。
閉ざされたトビラの向こうの人に会うために、不安で燻る心を落ち着かせつつ、予め渡されたゲスト用のカードキーをトビラ横に付けられた電子錠に読み込ませ、指紋認証と網膜認証を終えると、ピーと言う音を立ててトビラが開かれる。
深呼吸をし呼吸を落ち着かせ、手汗を拭ってから部屋に入る。
「失礼します」
部屋の真ん中あたりに設置されたテーブルの反対側の椅子に、この二課の司令官である赤い髪の男性、風鳴弦十郎さんが俺を待っていた。
弦十郎さんは俺に気がつくと、来たか、と言って立ち上がる。
「おはよう誠くん。すまんな、今日は学校だと言うのに」
「あっ、いえ今日は了姉が休みって言っといてくれたみたいなんで大

丈夫です。それより今日は」
「あぁ、分かってるさ。これから二課の司令室にきみを案内する。そこで二課のメンバーを紹介しよう」
　ついて来てくれ、と言って、来客用の部屋を出て、右へ左へとややこしい道を進んでいき、何やら広々とした部屋に出た。
　１０ｍを優に超えるぐらいバカデカい、壁そのものが表示板となってる液晶画面。
　そしてその画面を埋める大小様々な画面の数々。
　横合には、赤く光ったり、青く光ったりする床に固定されたであろう大型サーバー。
　そしてそれらのコンピューターが連結された超大型サーバー。
　何より凄いのはその下で働く人たちの手で、キーボードを動かしてる手は常人離れしたスピードだ。
　・・・なんだかこの部屋だけ、２～３０年ほど時代をすっ飛ばしてないか？
「すっげぇー・・・」
「だろ、まるでＳＦ映画の秘密基地見たいなこの感じ、初めて見たときは少しワクワクしたもんだ。誠くんも、そう思わないか？」
「そりゃ男ですし、こう言うの大好きですよ」
　うん、こんな凄いもの見て少なくともテンションが上がらない男はいないと思う。
「そいつは良かった。――手が空いてる者、ちょっとこっちに来てくれないか！」
　弦十郎さんが声をかけるとその場にいた全員が反応する。
　その場には１４～５人ほどの人がいたが、作業がひと段落してこっちに来るのは４人だけのようだ。
　それ以外の人たちも、さっきより２～３割程早く手を動かしてる、ような気がする。（早すぎてあまり違いは分からないが）
　男性２人と女性２人の計４人が弦十郎さんの前に横並びに立ち、弦十郎さんが１人ずつ紹介していく。
「左から紹介していくぞ。この人は『友里あおい』君。この二課のオペ

レーターの1人だ」
「友里あおいよ。話は司令から聞いてるわ、よろしくね、誠くん」
友里と呼ばれた人が一歩前に出た。
青みがかった黒髪の女性で、見た目の印象は、やり手のキャリアウーマンといった感じだ。
「隣の奴は『藤尭朔也』。コイツも二課のオペレーターを務めてくれている」
「藤尭朔也だ。分からない事があったら聞いてくれ」
友里さんが一歩引き、次に前に出たの藤尭と呼ばれた男性。
グレイッシュな黄色の髪色で、何処か親しみやすさを感じるが、何か内側まで見られてるようなイメージを感じる。
「次が『森近一樹』。こっちは主にノイズが出現した時にドンパチしたり、市民の避難誘導を担当してくれてる」
「よっす、森近だ。さっきの藤尭じゃないが、分からん事はじゃんじゃん聞けよ坊主？」
次に出たのは、森近と呼ばれた丸刈りの男性。
先ほどの2人は線は細かったが、反対にこっちは弦十郎さんと似たような体格を誇る。
チラリチラリと服の合間から見える多数の傷痕から、歴然の傭兵、と言った風格を感じる。
「で、最後は『葉月道』。彼女は聖遺物の研究を行う研究班の1人だ」
「了子さんからは良く話を聞いてるよ～。よろしくね～」
最後に出てきたのは、葉月と呼ばれた眼鏡をかけた藍色の髪の女性。
さっきの森近さんと比べるとこっちは童顔に低身長と相まって、学生服を来ていたら学生と勘違いしそうだが、スーツを着ているので少なくとも成人しているのだろう。
「今はまだ全員紹介するのは無理そうだが、まぁ何か困った事が有ればこの人たちに頼れば良い。何、悪い事にはならないさ」
ノイズとの最前線で戦う人、その裏側でサポートする人、その他多くの二課のメンバー。

その様々な人が弦十郎さんの下、1つの集団となって日々の日常を裏から守ってる。

「改めて言っておこう。ようこそ、黒然誠くん。人類最後の砦、特異災害対策機動部二課へ」

これが特異災害対策機動部二課というチームであり、今日を境に俺はこの二課の一員に加わった。

第18話

まず先に俺がやるべき事は、この二課の地理の把握からだった。

そんな訳で二課の道先案内人は引き続き、弦十郎さんがしてくれる。

「しっかし、何処も彼処も似たような通路で、初見じゃ絶対に迷いますよこれ・・・」

あまり変わりない風景に思わずぼやくと弦十郎さんが説明を入れる。

「それはな、入ってきた侵入者を逃がさない為にわざと複雑に設計されてるんだ。まっ、最初は端末に入れておいたマップを見ながら、少しずつ把握していってくれ」

了解です、と言いつつ貰った携帯端末からマップを見つつ、頑張って二課の地形を把握に勤める。

この二課の構造は、簡単に言えば中央の丸い円状部分を中心に、通路が枝分かれしている構造になっている。

弦十郎さん曰く、慣れれば結構な数の近道がある、とは言ってはいるが・・・まぁ、そのうち覚えるだろう。

右へ左へと、片っ端から歩いては部屋に入って中の人たちに挨拶を何回も繰り返していき、気づけばだだっ広い部屋に案内された。

「ここは二課の実験場の1つで、その中でもとりわけ頑丈に作られてる部屋だな。この中なら例え戦車砲や地対空ミサイルが放たれても、余裕で耐えれるぐらいには頑丈に作られてるな」

「・・・それいくらなんでも頑丈すぎません？」

「まぁこれらの施設はシンフォギアの訓練所も兼ねてるからな。シンフォギアの性能は誠くんもよく知っているだろう？ならミサイル程度で壊れてたら話にならないって事だ」

俺の疑問を解消させるべく、弦十郎さんが答えてくれる。

さっき言ったように、この二課にあるいくつかの実験室はこのようにシンフォギアの訓練所を兼ねて作られたらしい。

施設は地下にあるので、当然ながら訓練のたびに起こる衝撃で地下の施設が歪んでしまってはいけない。
当時、この施設を作った人達曰く、無理に決まってるじゃないですかやだー!?の一言らしかったが、そこの問題は当時から二課最高の頭脳担当してた櫻井了子こと了姉が、異端技術特有の特殊な構造といった、異端技術を提供して無理矢理にクリアしたとか。
お陰で関係各所のお偉い方達は、もう全部アイツ1人でいいんじゃないかな、と言い放ち、その時のボーナスの桁を1つ増やしたとかなんとか。
まぁそう言った事もあり、この実験施設はとりわけ頑丈に作られているという事らしい。
「それは分かったんですが・・・何故に俺はジャージに着替えてあまつさえ訓練所の真ん中で準備体操をしてるのですか?」
イッチニーサンシーと足をぐいーと伸ばしつつそう聞けば、弦十郎さんは先ずは聖遺物を使った戦い方を知る事からだ、と言う。
聖遺物を使った戦い方?と頭に疑問符を浮かべていると、弦十郎さん例題を出してくれる。
「そうだな。誠、例えばだが、あるビルの真下にノイズがいると仮定して、誠はビルの屋上に居るとする。ビルの屋上から真下に降りる時、誠くんならどうやって下に行く?」
「えっと、普通に降りるかな」
「残念だが不正解だ。その場合は、下向きに全力で飛ぶだな」
「下向きに飛ぶ?」
シンフォギアのバリアフィールドの特性上、高所からの落下じゃまず死なないし、逆に落ちた衝撃で、塗装された地面の方が粉砕されてしまう。
蹴り落とされたら話は別だがとりあえずこれは横に置いておき、さっきのシチュエーションの場合だと、なるべく滞空時間を減らす、というのが目的らしい。
「あー、そう言う事・・・」
「そんな訳で誠くんがまず覚える事は、シンフォギアは人の戦い方を

するものじゃないって事を覚える事だ、わかったか？」
「わかりました」
「と言う訳だ、今からギアを纏った状態での手合わせするぞ」
「・・・えっ!?」
　何がと言う訳で!?という意味を込めて、弦十郎さんを見れば、何か変な事言ったか？と言わんばかりに首を曲げつつ柔軟体操を続ける。
「いやだってギア纏った状態って、下手に当たったら死んじゃうかもしれないんですよ!?」
「安心しろ、これでも結構鍛えてるからな。なに、そんな簡単には死にはしないさ」
「だからって、そんな簡単に――」
「風鳴司令はそう簡単に死にはしないと、僕もそう思いますよ」
「っ!?お、緒川さんか、ビックリした・・・」
　いきなり沸いて出たとしか言いようがないぐらいに、気配もなしに自然に会話に混じってくる緒川さん。
「月並みかもしれませんが、僕が自身を持って言えるのは、この人が簡単に怪我をしてる姿は見たことないですね」
「でも流石にギア纏った状態ってさすがに危ないですよ！」
「なら試してみるか？」
　弦十郎さんの言葉に、へっ？と俺が素っ頓狂な声を上げた次の瞬間、意味不明な光景を目の当たりにした。
　スーツの内側から拳銃を取り出し、それを弦十郎さんに向けて不意打ち気味にぶっ放す緒川さんの姿とか。
　自分に向かってきた数発の銃弾を素手で掴んだ弦十郎さんの姿とか。
　そんな、意味不明な光景を一瞬のうちに見せられた。
・・・・・・・!?
「ふぁっ!?」
　開いた口が閉じないし、そんな光景を見た自分の目を疑った。
　銃弾を素手でキャッチした、なんて光景を見て呆然としない方がおかしい。

トリックなんて小難しい事は無く、本当にこの人は真っ正面から放たれた弾丸を素手でキャッチしてのけたのだ。
弦十郎さんが手から、少し凹んだ銃弾がカランカランと音を立ててこぼれ落ちる。
「この人は何があっても死なないと、僕は本心でそう思いますよ」
「・・・あの人、本当に俺とおんなじ人間ですか？」
ギギギ、と油の切れたロボットの如く顔を緒川さんに向けつつそう聞けば、勿論です、とにこやかに言われ、背中に冷や汗が流れるのを感じつつ、柔軟体操を終えた弦十郎さんから一言。
「さぁ、手合わせ願おうか？」

訓練場で２人の男が対峙する。
片や人類最強と謳われる二課司令のＯＴＯＮＡこと風鳴弦十郎。
片や体に２つの聖遺物を宿す、全身聖遺物ビックリ人間こと黒然誠。
誠の実力を測るために発案実行弦十郎で行われるこの手合わせだが、当然ながら彼１人の独断ではない。
誠は知らないが隣の別室では二課頭脳担当の櫻井了子が、彼の脳波やバイタル及びその身から発せされるアウフヴァッヘン波形をチェックしていた。
「――ｂｅｅｔ　ｕｐ　ｇｒａｍ　ｔｒｏｎ」
弦十郎と対峙した誠が静かに聖詠を口ずさむ。
シンフォギアは起動のために聖詠と呼ばれる短歌を歌う。
聖遺物ごとに聖詠は一緒だが、その人ごとに聖詠に込める思いは個人個人によって違う。
風鳴翼なら、羽撃きは鋭く（Imyuteus amenohabakiri tron）、風切る如く、天羽奏なら、人と死しても、戦士と生きる（Croitzal ronzell Gungnir zizzl）と言った感じに聖詠の意味変わる。

なら誠は聖詠にどんな意味を持たせたのだろうか。
誠の体が光に包まれる。
シンフォギア起動に伴うエネルギーが走り、彼の体を球型の黒色の光が包む。
そして黒い光は一瞬で弾け飛び、誠の姿がジャージから、黒を基調にした黒騎士姿に変わる。
「バイタル、脳波ともに正常、アウフヴァッヘン波形の増大を確認っと」
パソコンの画面には所狭しと色んなデータが散りばめられている。
眼鏡はパソコンの光で反射し、目を覗けない今の了子の状態を誰かが見れば、マッドサイエンティストに見えること間違いなしだ。
カチカチとマウスを動かして何かのデータと照合したり、パラパラと手元の紙束を忙しなくめくったり、何かを書き込んでいく。
隣の訓練場から別室に移動してきた緒川が不思議そうに了姉に問いかける。
「そのレポートは？」
「うん？あぁ、これね。今日から誠が二課に入る訳だから、ちょいと家から融合症例関連の資料をどっこいしょーと引っ張りだして、何かの参考に出来ないかなーって」
「成る程、そういう事でしたか」
緒川の小さな疑問が解消されたところで、パソコンの向こう側では誠と弦十郎の手合わせが始まっていた。
誠が攻めて、弦十郎が受けに回っている、さっきからその繰り返しだ。
状況だけみれば誠の有利だが、両者の顔色を見れば、どっちが有利か一目瞭然だ。
「にしても、本当に呆れるくらいに圧倒的ね、弦十郎くんは。私が仮に完全聖遺物を扱えても、これっぽっちも勝てる気しないわー・・・」
そう了子は呆れつつも、しっかりと画面を見て手早くデータをとっていくのだった。
炎の爆発を利用して拳と足を混ぜ込んだ高速のハイ・ローコンビ

ネーション、そこからさらに上に蹴り上げ、そこから体を捻ってかかと落としをするが、弦十郎はこれを片手で軽く捌き、そのまま足を掴んでぶん投げる。
投げられつつも、背中のブースターで無理矢理空中で態勢を整え、右手に灯した炎を小さい球状に圧縮、それを手榴弾の様投げ、弦十郎に当たる寸前で爆発させるが、弦十郎はこれを平手の突風で押し返す。
さらに背後に炎剣と炎槍を展開、そのまま射出するが、当たる直前に弦十郎はこれを正拳突きで相殺。
爆発が起こるが、服に少々の焦げ目がついただけで、特に怪我は見当たらない。
呆れる了子と、苦笑いを浮かべる緒川の２人。
画面の向こう側で、戦場で戦う限り無敵の男が、これまた笑えるぐらいに無双していた。

（体は熱くない、炎もちゃんと制御できてる・・・よし、これならッ！）
先手必勝とばかりに、だん！と炎の爆発を利用して、弦十郎の前に一瞬で踏み込み、ハイローコンビネーション、上に蹴り上げつつ、そこから体を捻ってかかと落とし。
ギアによって強化された拳と蹴りは、どれもこれも鉄板なんて余裕で打ち抜く威力を誇り、普通ならミンチになる事間違いなしだが、そこはＯＴＯＮＡ、弦十郎は怯む事なくこれを片手一本で捌いて行く。
最後のかかと落としをしっかりと受け止めて、そのまま右足を掴んで後ろにぶん投げる。
「っ!?――――このっ！」
驚きつつも背中のブースターで無理矢理態勢を整え、片手に炎を圧縮させて、投げる。

放たれた炎はそのまま弦十郎に迫り、そのまま爆破、命中――したと思ったら、突風が巻き起こり、爆風が押し返される。
「くっ・・・!」
さらに背後に炎剣と炎槍を作り出し――怪我するとかは最早頭から抜け落ち――そのまま一斉に射出、爆音と爆炎そして爆風が弦十郎を包み込んだ。
(やったか!?・・・いやまてやっちゃいけないだろ!?)
だ、大丈夫かな?と不安になりながら煙が晴れるの待つと、ぎょっと顔を痙攣らせる。
爆炎の中に立つ巨大な男のシルエット、両手を前に突き出し弦十郎は、服に少々の焦げ目を付けた程度で、本人は全くと言って良いほど無傷でその場に立っていた。
仮にもノイズを軽くなぎ倒せるぐらいの力を真っ正面から受けきってなおかつ無傷で立っている男、風鳴弦十郎。――もう意味がわからない。
「もう何がなんだかわかんねぇ・・・!?」
「爆発の衝撃は、発勁でかき消した」
どうやら誠が知らない何かの格闘術の応用で対処したらしい。
・・・何かおかしい気がするが、気にしては行けない、イイネ?
ジャキンと背中の翼を両手剣(アームドギア)に戻し、背中のブースターで一気に加速し横一閃、そこからさらに切り上げるが、弦十郎は軽くステップするだけで回避する。
「っ、らぁっ!」
だん!と踏み込み、切り上がった両手剣(アームドギア)を上段から一気に振り下ろす――その瞬間、両手剣(アームドギア)がパシッ!と音を立てて動かなくなった。
右手と左手を合わせる様にして、刃物を受け止める達人技、真剣白刃取りだ。
――余談だが、柳生新陰流の無刀取りと同じものと言われる事もあるが、無刀取りは先に相手に飛び込んで、相手が勢いを付ける前に刀を取り押さえると言う、白刃取りよりよっぽど現実的な技である――

間話終了。
「んなっ!?」
「猪突に任せて闇雲に武器を振るうな、近接戦の動きには、全て意味があると思って動け」
驚くのも束の間、弦十郎が体を捻ると、なす術なく突然空中に投げ飛ばされ、そのまま受け身も取れず――否、体が勝手に受け身を取りつつ地面を転がり、ブースターを吹かせて無理矢理に勢いを殺し、正面を向く。
転がってる間に接近したのか弦十郎は拳を振りかぶり、振るう。
一直線に振るわれた拳が誠に当たる――直前に拳が止められる。
しかし寸止めで止められたものの、真っ正面で発生した風圧で誠は思いっきり後方に吹き飛ばされた。
その衝撃で両手剣（アームドギア）はカランカランと音を立てて辺りに手から滑り落ち、誠は吹き飛ばされた衝撃で目を回し、その場で大の字で倒れると同時に黒色の光に包まれパシュんと音を立てて元のジャージ姿に戻った。
勝者は人類最強の男、風鳴弦十郎で幕を下ろした。

――

「有り得ねぇこっちは仮にも聖遺物有りきで攻撃してるのに、まともにダメージ入ってなかったぞ・・・。一体どうやったらあんな人間離れした動きが出来るんですか!?」
訓練場で目覚めて1番初めに聞いたことはさっきのあり得ない動きの数々に対する大きすぎる疑問に弦十郎さんはふっと笑い高らかに答えてくれた。
「メシ食って映画見て寝るッ！男の鍛錬は、そいつで十分よッ！」ただし個人差有り
「言ってる事全然分からないですよ!?」
唖然としつつそう言えば、いつの間に来てたのか背後から肩に手を置き、無言で顔を横に振る了姉と、苦笑いしている緒川さん。

その反応からして2人は知っているらしいけど、あれはいくらなんでも意味不明すぎると、声を大にして言いたいッ！
「これが弦十郎くんクオリティだから突っ込むだけ無駄よ」
「なんか自信無くすよ・・・」
かくんと項垂れつつ、ここでふと学校にいる響たちを思い出し、大丈夫かな・・・なんて思っていると、突然二課内に警報が鳴り響く。
「な、なんだ？」
「これはノイズの出現を知らせるアラートよ、つまり」
「ノイズが出たッ！」
「あぁ、だが先ずは司令室で状況の確認だ、直ぐに向かうぞッ！」
・
・・・・・
・
最短で走り抜けて、急いで司令室に入る。
オペレーターたちは忙しなくあっちこっちに動き回っている。
「状況はどうなっているッ！」
「現在近隣の住民は避難しましたが、まだ付近の学校には大勢の学生たちが！」
大型のモニターに映し出されるどこかの学校・・・って、ちょっと待て!?
「嘘だろ・・・なんで・・・なんでよりによって俺んとこの学校なんだよ・・・！」
あそこには響と未来がいるんだぞ、ふざけんなよノイズ・・・!?
「弦十郎さん、俺に行かせてください！」
「・・・これが二課での初仕事だ。行けるか？」
行けるかだって？それは勿論――
「行けますッ！」
「なら行ってこいッ！翼も向かわせるから、けして無茶するんじゃな

いぞッ！」

はいッ！と勢いよく返事をして、俺は勢いよく部屋を後にした。

第１９話

誠がＯＴＯＮＡ相手に手合わせしてる頃、響は学校で代わり映えのしない授業を受けている。
何時もは隣にいる誠だが、今日は居ない。
（せーくん、早く来ないかな・・・）
ぼんやりとそう考え、私って今は1人なんだと思うと、ほろりと涙が少し流れるが、その涙を制服の袖で拭く。
誰も響の事を見てないから、泣いた事なんて気づきもしない。
そうして時は流れて１０分ほどの放課、この時間ですら、響の平穏を脅かす時間だ。
だがそれと同時に、未来が間髪入れずにやってきた。
「響、行こ?」
「うん」
未来の笑顔に、響も笑顔で返す。
前の時より比べれば随分と自然な笑顔が戻ってきた。
誠と未来がいてくれたからこそ、響はここまで立ち直れた。
後はこのままの状態で過ごせればいいのだが、響が笑顔になる事を許せず、響が生きてる事が許せないと思う少女がこのクラスにいる。
次の授業が未来のクラスと合同のため、２人で体育館に移動しようとする、その時だ。
「へぇ・・・。もう忘れる事にしたんだ。・・・いい笑顔だね」
「ッ!それは・・・」
「いいわよね、あんたみたいなヤツは平気であんな事を忘れられて」
最初に響を非難したメガネをかけた女子生徒が泣きそうな顔をしてそう言えば、クラスの空気がピンと張り詰める。
何ヶ月も経って萎えてきたクラスに加害の熱が再び戻り始めてしまう。
「本当になんで・・・なんでアンタなんかが・・・!」
未来は響を庇うように動き、クラスの空気は殺気立ち、入り口付近

で見ていた別のクラスの生徒もざわつき始める。
響に向かい最大限の非難と罵倒をぶつけようとする。
だが、それを止める者がいた。
その男子生徒は彼女の腕を掴み、物理的に非難を止める。
「なぁ、もうやめないか？」
「山田・・・？」
そう同じクラスの山田だ。
「こんな事したって茅根は戻っては来ないんだ。その一瞬だけはスッキリするかも知れないけど、その後なんてただ虚しくなるだけだ。誰かを殺して平気な人なんてどこにもいないんだ。・・・お前だって本当はわかってるじゃないのか？」
「・・・っ！」
同じ友達を失い、その悲しみを共有できてると思ってた山田の行動、そしてその言葉に息を呑み、驚愕した。
山田が響と未来の側に立ったという事に、クラスにどよめきが広がる。
「なんでよ・・・なんでそんな風に割り切れるのよ・・・？死んじゃった茅根くんと、立花の間に、誰かのせいって差が無いなら・・・。誰のせいでも無いって言うなら、運が悪かったとしか言えないじゃない・・・ッ!?」
誰かのせいにしないと立てない少女。
誰かのせいにしていた自分を乗り越え、立ち上がった山田。
教室の中で相対する２人。
一方的に生還者が非難される、そんな状況が変わりだす。
「そうだ。人は理不尽に死ぬんだ。・・・俺たちの友達だった茅根は、もうどこにも居ないんだ」
「――――ッ！」
山田の言葉に少女は背を向けて走りだし、教室を後にする。
響の立ち位置的に彼女の目尻に涙が見えた。
その涙の意味を、響はよく知っている。
それ故に響の心に２つの思いが去来する。

1つはこのまま何もせずに、彼女を追いかけはせずに、これ以上傷つかないように動かない、という気持ち。
そしてもう1つは、彼女の後を追いかける気持ちだ。
（――――）
今日この日まで傷つけられた痛みが足を掴んで止めようとする。
今日この日まで友達に貰った言葉が、響本来の性格が足を動かそうとする。
その2つの気持ちは一瞬だけ拮抗。
響は彼女を追いかけた。
「止まりなさい！」
だが響の前に立ち塞がる者がいた。
このクラスの生徒で、先ほど走り出した女子生徒の友達だ。
「お願い、そこを退いて！」
「いやよ！退かないわ！」
響は去った彼女を追いかけたい。
響の前に立った少女は、響と会えば確実に傷付くと分かってるから、絶対に響を通さない。
「どうしても行くっていうなら私が・・・！」
退かない響に苛立ちを覚え、その焦りからか彼女は手を出して突き飛ばそうとする。
彼女は気付かないが、このまま突き飛ばされると、倒れた響の後頭部が確実に机の角に当たってしまう、そんな危険な角度だった。
「それ以上はやめとけ」
だが突き出した手をまた誰かに止められた。
掴んだのは、別のクラスの生徒であり、山田のために敵討ちをと言い、誠を殴った少年だった。
他人を殴って後悔し、誠の言葉で少しだけ変わった少年だった。
「なんで・・・」
「そうやって気付かずに傷つけると、後悔するぞ。・・・手に残った、傷つけた感触と後悔は、ずっと消えないんだ」
血に濡れた少年の言葉が、血で濡らしたしまった少年の心を変え、

傷つける者から傷つけられる者の味方に変わった。
少年は響の顔を見て、首を縦に振る。
ありがとうと言う意味を込めて、響も首を小さく縦に振り、彼女の脇を通り過ぎて走りだす。
「っ、待ちなさいよ！」
だが彼女が止めても響は止まらず、そのまま階段を降りていった。
誠を殴った少年に腕を掴まれては、響を追う事が出来ない。
少女が諦めて改めて教室を見ると、ぎょっと驚いた。
教室内に、響を責めない空気がそこにはあった。
「・・・・ねぇ、もうやめにしない？」
「・・・・・・やめるって、なにをよ」
「そりゃ、立花さんにやって来た事よ。あの子の気持ちだってさ、分からないこともないけど、もうかなり経ったし、ね」
「そ、それは・・・・」
響たちと同じクラスの少女が、響を止めてた少女を諭そうとする。
未来たちは知らなかったが、実を言えばこう言う光景はちらほらと学校内で見られてたのだ。
いまだ苛烈に責める者と、それを止めようとする者がちらほらと見える。
生還者を責めるという流行は、この学校というコミニティーの中で廃れ始めたのだ。
本来なら、後もう何ヶ月も続いていたかも知れない。
こんなにも早く収束してきたのは、こんな事が絶対的に正しくなんかないと真っ向から反発し続けた者がいたからだ。
２人ぼっちの戦いが、ここに来てようやく身を結んだのだ。
「頑張って、響」
響が人助けのために駆け出したのを見て、未来は応援した。
確実に、世界は一歩一歩と変わっていった。
空いてた窓から入り込んだ風が追い風となって響の背を押す。

今よりまだイジメが酷く、誠と未来が響の味方と誓った日から数日経ったある日のこと、その日は誠が他のクラスから響を庇い、少しばかり傷を負ったのだ。
「いつつ・・・アイツら、顔面ばっかり狙いやがって・・・」
殴られ、少し腫れた頬を摩りつつ2人で誰も居ない保健室に入る。
勝手知ったるなんとやら、慣れた手つきで棚から救急箱を取り出し、傷の手当てをする。
「大丈夫？」
「へーきへっちゃらさ、こんな傷。それより、響はどこも怪我してないか？」
「うん、私は大丈夫だけど・・・」
なにか言いたそうな顔をした響がそう言えば、なら良しと自身の治療を終えた誠が救急箱を元の位置に戻し、そろそろ家に送るかと響を椅子から立ち上がらせようと響から声をかけられる。
「・・・ねぇ、せーくん」
「なんだ？」
沢山傷ついて、沢山疲れて、沢山悲しんだ。
ボロボロになってしまった心は、諦めないという事に疲れて、頑張る事に耐えれなくなり、何もかも投げ出したい、そう考えてしまう。
「せーくんはさ、私の味方って言ってくれたけど。・・・もう、いいよ」
そう思ってしまうきっかけは、自分のせいで大切な友達が傷ついてしまう、という事なのだから、響は本当に優しい心の持ち主というのがよく分かる。
「もう、私の事は放っておいていいよ」
故に自分から繋がりを断とうとする。
別に愛想を尽かした訳では無く、ただこれ以上、傷ついて欲しくないと、こんな過酷な状況なのに、響は守るためにそう言った。
本当に境地に陥ると人の本質は見えるという。
そして響は、本質的には他者を守る者だ。
「なぁ響、知ってるか？」

そしてそれは、彼とて同じだ。
「漢字の救いってのはさ、中に求めるって入ってるだろ？これってさ、求めないと救われないって意味だと思うんだ。自分で救われたい、助かりたいって思えない人はきっと、神さまにだって救えない」
左手を差し出し、しっかりと響の目を見る。
「俺はこうやって響に手を差し出せる。でも、この手を取って立ち上がるのは響、お前なんだ。俺は響を助けることはできるけど、本当の意味で自分を救うのは、自分なんだ」
「・・・救われる資格なんて、私に・・・」
色んな人たちに蔑まされて、罵られ、生きる価値が分からなくなる。
自己評価なんてとっくに地に落ちてしまい、アイデンティティなどが揺らぎ、自分が誠や未来に助けられるだけの人と思えない。
自分に救われる資格がなんて無いのだと、そう思ってしまう。
「救われる資格のある無しとか抜きにしてさ、響は救われたいと思わないか？」
「私は・・・」
差し出した手を握るか迷って、手を伸ばすのを躊躇う。
生きたい、けれど生きていいのか分からない。
そんな響の思いがひしひしと伝わる。
響が手を引っ込めても、誠は差し出した手は引かず、響を見つめる。
「助かりたいと思うなら、手を伸ばせ！――――諦めないでくれッ！」
「っ・・・」
手を出しかけて、迷う。
この泥沼の状況から救われたいという思いと、友達に迷惑をかけたくないという思いで心は進む事をせず、後退せず、その場で止まる。
手は震えて、口も震え、肩が震える。
それでも視線は彼の手を見つめる。
五分か、はたまた十分以上か。
沢山迷って、沢山躊躇して、沢山悩んで・・・止まった心は進み、震える手で誠の手を掴んだ。
彼女の手から無言の「助けて」が聞こえる。

彼はその手を無言の「助ける」で答える。
「響には生きてて欲しいんだ。1人になんてなろうとしないでくれ。・・・俺は、響の泣いてる顔より、笑ってる顔の方が好きだ」
安心させるように誠が笑えば、それにつられて響も下手くそな笑みで返したのだった。
誰もが笑っていなくとも、彼は自分から率先して笑う。
彼が笑ったことで、自分のように、他の誰かが笑えるように。
そんな自分になるために、頑張りたい。
そう響は心の中で決心した。

走っていった彼女を追いかけ、ふと目に入った時計を見れば、時間はとっくに授業が始まってる時間だ。
急がなきゃ、そう思い、彼女を追おうとスピードを上げる――
その時だ。
ビー!ビー!と喧しいぐらいに警報が無情に辺りに鳴り響く。
「!」
人を殺しにくる生きた災害、ノイズが発生した事を知らせる警報だ。
「ノイズだぁぁぁ!?」
「逃げろぉッ!」
「嫌ぁー!」
辺りから人々の悲鳴が聞こえる。
「なんでノイズが・・・」
そんな事を考えたところで、響にはわかる事なんて無く、ただ一つわかる事は、先に行った彼女が危ないという事だ。
「急がなきゃ・・・!」

響がスピードを上げた時、彼女もまたノイズの出現を知らせる警報を聞いた。
「な、なに・・・」
ドクンドクンと心臓が早鐘のように鳴り、呼吸が乱れていく。
「ノイズだぁ!!」
「うわぁぁぁ!?」
「逃げろぉ!!」
閑静な住宅街に警報が鳴り響くと、それを聞いた住人たちが我先にと逃げていく。
「誰か助けてくれぇ!?」
「!」
近くの横道から人が出てくる。
それと同時に、背後からおたまじゃくしに似た形のノイズが、まるでお菓子に群がる蟻の如く、横道から出てきた人を押し倒す。
「た、たすけ――」
押し倒された人が彼女に向かって手を伸ばす。
だか、虚しくもその手は数秒と持たずに炭素の塊に変わる。
「ひっ・・・!」
小さな悲鳴が漏れ、その場で尻餅をつく。
先ほど一瞬で人が人だった物に変わっていく光景が、頭から離れない。
息は乱れて、体は酸素を求めて喘ぎ、腰が抜けてその場から動けそうに無い。
さらに追い討ちをかけるかのように、その背後からもう数体のノイズが出現。
数体のうち一体が、アイロンのような手を彼女に向けて伸ばす。
――あっ、死んじゃうんだ。
頭のどこか冷静な所がこのまま起こる事を予測、そのまま動けない彼女にノイズの手が迫る。

触れれば死ぬという、絶対の死を突きつけられる。
「危ないッ！」
だが間一髪の所で、誰かに引っ張られ、ノイズの手が空を切る。
「・・・・・えっ？い、生きてる・・・？」
口から戸惑いの声が漏れると同時に、
「大丈夫!?」
彼女を助けた、立花響の声が背後から聞こえた。
「た、立花、さん・・・？」
彼女の顔に浮かぶのは死の恐怖。
「逃げるよ！」
そう言うと彼女の手を引いて立たせ、２人でその場から逃げ出した。

２人で逃げ続け、対ノイズ用の大型シェルターの反対側にある、寂れた廃工場の前まで逃げていた。
だが、その廃工場の入り口はシャッターで閉められ、他の道を行こうにも、その道をノイズが埋め尽くす。
くっ！と歯噛みしてると、背後から追ってきたノイズらが囲む。
３６０。逃げ場無し、完全に詰みの状態まで持ってかれた。あ
「・・・もう、無理よ・・・私たち、死んじゃうんだ・・・」
ストンとその場にへたり込み、彼女の心を絶望が支配する。
ノイズの手にかかれば、その涙でさえ、炭素と化すだろう。
２人の目に映るのは、どう足掻いてもひっくり返せない絶望。
だが、だとしても、立花響は諦めない。
「死なないよ」
彼女を守るように響は前に出る。

「絶対に助けるから。だから――」
何があっても立花響は諦めない。
その胸には、天羽奏が残した言葉があるから、
「――生きるのを諦めないでッ！」
信じれる友の言葉があるから、帰りたい陽だまりがいるから。
膝を折られずにいる、俯かずにいられる。
「だから絶対に・・・絶対に、諦めないッ！諦めて、やるもんかぁぁぁぁッ!!」
絶対的な敵を見据え、そんな理不尽な運命になんかに従うもんかと、響は吠える。
物理的にも、その在り方的にも聞く耳なんて物は持たないノイズは、響たちに飛びかかる。

そして響の叫びは届き、それを耳にした黒騎士をこの場に呼び寄せた。

ノイズの輪の中心、響たちの前に、上空から飛んできた黒騎士が着地する。
「黒い、騎士・・・？」
響が呟くと同時に、黒騎士が左手を振るえば、響たちを中心に炎が走る。
走る炎は響たちを燃やさず、背後から飛びかかったノイズだけを燃やし尽くす。
黒騎士が炎を纏った右手を上に向け、射出。
ある程度の高さまで飛んだ炎がUターン、そこからさらに分裂し、その炎はさながらスコールの如く、回りにいたノイズを残らず燃やし尽くす。
「す、凄い・・・」

響の後ろにいる少女か感嘆の声を漏らしていると、黒騎士が後ろに居た2人を見る。
ほっ、と黒騎士から安堵する聞こえる。
（――えっ？）
黒騎士とは初対面のはずなのに、どうしてだろう、
（――せーくん？）
黒騎士の姿が、黒然誠と重なった。
だが、その疑問が解消される前に、耳に手を当てた黒騎士はコクリと頷くと前を向き、少し響たちから距離を取ってから、背中のブースターを蒸せ、どこかに飛んでいった。
一瞬だけ静寂が支配し、次に聞こえるは上空からやって来た救援に来たヘリの音。
何がなんだか、響にはさっぱりわからないが、1つ分かった事と言えば、
（・・・正義の味方に助けられちゃった）
ただ、それだけだった。

――――――――

救助された響たちは対ノイズ用の大型シェルターまで護送された。
そこには、先に避難していたらしい学校のクラスメイト達もいた。
「あっ、響！」
気づいた未来が心配そうに響に駆け寄る。
「良かった。怪我とかしなかった？」
「うん、大丈夫だったよ。ノイズには襲われちゃったけど、黒い騎士に助けられたから」
「黒い騎士・・・」
「？」
響がそう言って答えれば、未来は神妙な顔をする。
気になって聞いてみても、何でもないと言ってはぐらかされる。
「せーくんの方は大丈夫かな？」

「大丈夫だよ、誠くんなら。・・・絶対に」
真っ直ぐに、そう信じて疑わないように未来は言う。
だね、と返しつつ、ふとシェルターの入り口を見れば、誰かが出て行くのが見えた。
（あの後ろ姿・・・）
「ごめん未来。ちょっと行ってくる」
「うん、いってらっしゃい」

シェルターをこっそり抜け出した響は、これまたこっそりと抜け出した彼女を追いかけ、河原にたどり着いた。
響と少女はお互いに向き合う。
出来る事なら顔を合わせずに過ごしたいと思ってしまうぐらいには、お互いを視界に入れるだけで嫌な気持ちになってしまう。
だが2人、今のように顔を見合わせているのは、この2人の根本は分かろうとする人間だからだ。
「ねぇ、立花さん」
少女は響に問いかける。
「どうして、そんな風に笑えるようになったの？」
それは純粋の疑問だった。
「前まで、全然笑えてなかったじゃない」
そんな彼女の問いに、響は微笑んだ。
作った笑顔3割、心からの笑顔3割、隠しきれない悲しみが4割、といった感じの、頑張り屋の笑顔だった。
「・・・私が笑えないと、友達や家族、皆んなが心の底から笑えないんだ」
ギュッと服ごと胸元の傷に手を当てる。

「本当はさ、笑うのがすごく辛いんだ。・・・でも、だからこそ。私は辛い時こそ頑張って笑って、へいき、へっちゃらって言いたいんだ」
まだ、へいき、へっちゃらとは言えないが、それでも響は言いたいと言う。
「辛い時に笑えなかったら、これから先、辛い事があったらずっと笑えない。そんなの私、嫌だよ」
辛い時に人は笑えないという当たり前に、響は真っ正面から逆らう。
「幸せの時間でも、辛い時間続く中でも、私は誰かに笑っていて欲しい。――――できればそれが、家族や友達であって欲しい。私は、そう思うんだ」
これが響が今日この時までに思い悩んで得た答えだ。
その中学生らしからぬその心の強さに、彼女の心が震えた。
「・・・・・・笑顔、ね」
あの日から、笑おうなんて全く思わなかった。
彼女は失った痛みと悲しみで、いまだに一歩も前に進めなかった。
「あの日から、頑張って笑おうなんて、一回も思えなかった」
彼女の脳裏には、誰も彼もがあの日以降笑えてなかったことを思い出す。
笑えない彼女に気を使って誰もが笑っていなかった。
（・・・・私が、本当に大事なものを皆んなからうばっていたのね）
そんな大事な事を、眼前の少女に気付かされる。
「・・・強いわね、立花さん。私なんかよりも、ずっと」
「そ、そんな事ないよ！」
「いいのよ。私が弱かっただけだから。・・・・・ごめんなさい、立花さん。私の事恨んでるわよね」
「そんなことないよ！壊れたって、また最初から、友達としてやり直せばいいだけだよ！」
この事件を経て、響の懐はとても広くなった。
少なくとも、自身が虐められる原因になった子とまた友達になろうと言うなんて、寛容にも程がある。

（こんな事言ってくれる彼女に、私は悪意なんかぶつけてたなんて。・・・本当、自分が馬鹿みたいね・・・）
ツーと、目から涙が溢れそうになる。
上を向いて、その涙が溢れないようにする。
「でも、ごめんなさい。私は友達にはなれそうにないわ。・・・・色々してきた自分が許せないから」
「そんな・・・・」
「私と立花さんは友達にはなれそうにないけれど、それでも、私たちはこうやって話して、分かりあえたと思ってる。・・・私は、立花さんに生きて欲しいと、そう思ってるわ」
「！」
溢れた涙を袖で拭き、しっかりと響を見る。
「不幸になっちゃえなんて、もう思えないわ。・・・また、明日ね」
そう言い彼女は河原を後にする。
後には響1人が残り、空を見上げてポツリと、心に刻み込むように呟いた。
「・・・きっと、人と人が話し合えば、分かり合えるんだね」
この日、響は大事なことを胸に刻み込む。

「貴方、私と戦いましょうか」
「・・・へ？」
別の所。
この日、誠は翼の地雷を全力で踏み抜いてしまった。

第２０話

「貴方、私と戦いましょう」
「・・・へっ？」
一体なんの冗談？と誠は思い。
翼は手に持つアームドギアを誠に向ける。
どうしてこんな事になってしまったのか、その答えは数十分前まで遡る。

二課の廊下を全力で走り抜け、エレベーターに入ると同時に地上最上階までのボタンを押す。
エレベーターは急上昇、1分とかからずに地上最上階のヘリポートにたどり着いた。
「こっちだ坊主！」
森近が操縦席から大声でそう叫ぶ。
そっちに向けて全力でダッシュし、ヘリに乗り込む。
誠が乗ったのを確認すると、森近さんの部下が扉を閉めヘリは急上昇する。
上空から見下ろせば、街の至る所にノイズが蔓延る。
「何時もまぁ、こんな数揃えやがって・・・」
吐き捨てるように森近がそうぼやいていると、耳につけたインカムから藤尭の声が聞こえる。
『誠くん聞こえるかい？』
「あっはい、聞こえますよ藤尭さん」
『今いるその位置が、現在ノイズの数が多い。そこから飛んでノイズを叩いてくれ』
「了解です」
ピッとインカムを切り、うわ高っ、と思いつつヘリのドアを開ける。

「気張っていけよ坊主！」
「ハイッ！」
そこから下に向けて飛び降り、チラリと横目にノイズらを視認しつつ、落ちたままに聖詠を口ずさむ。
「ｂｅｅｔ　ｕｐ　ｇｒａｍ　ｔｒｏｎ」
光は一瞬で誠の体を包み込み、光は一瞬で弾け飛び、シンフォギアを纏った姿に変わる。
体勢を整え、背中の翼をアームドギアに切り替える。
ブースターで減速しつつアームドギアを両手で持ち、アームドギアを中心に炎を縦に伸ばしてくイメージをする。
「ッ！」
そして自身をコマのように回転させ、先ず何よりも厄介な飛行型ノイズらを蹴散らしにかかる。
鞭のようにしなる炎が飛行型ノイズらに当たり、その体に巻きつく。
そして誠が腕を引くと飛行型ノイズの五体を溶断、付近のノイズが消滅したのを横目で確認し、アームドギアを翼に戻しつつ、両手に炎を灯す。
そして、炎に包まれる両手を引き絞り、照準を下に向ける。
――ＬＡＳＴ∞ＭＥＴＥＯＲ
一気に振り抜き、竜巻となった炎は、下にいるノイズらに向けて放つ。
振り抜いた両腕からジワリと黒い炎が滲み出し、腕にジクリと突き刺す痛みが走る。
（ッ・・・黒い炎を制御、鎧から出ないように流れを変える・・・ッ！）
腕から滲み出てくる黒い炎の流れを外側から内側に変えつつ、落ちた勢いそのまま、逃げてる人とノイズらの間に滑るように割り込む。
まず初めに人型ノイズがアイロンのような手を伸ばし、それを正面から受け止める。
受け止めたノイズの手を炎で燃やせば、炎は1人でに走り、人型ノ

イズに燃やしにかかる。
たまらずノイズが誠から離れてのたうち回るが、火は一瞬にして体全体に燃え広がり、チリも残さず燃やし尽くす。
（次ッ！）
飛びかかってきた二体のノイズを回し蹴りで潰しつつ、ジャキン！と背中の翼をアームドギアに切り替えると同時に横一線に振るえば、それに重なるように炎の刃が飛び、遠方の敵を切り裂き燃やす。
「ふッ・・・！」
体勢を低くし背中のブースターで一気に加速。
道を遮るノイズをアルファベットのWの軌道で切り進み、ノイズらを塵に変え、奥にいた芋虫に似た形の大型一体を捉える。
気づいた芋虫型が横一回りに一回転させ、体重を乗せた尻尾を誠に叩き込む。
避ければ辺りの建物を粉砕、生えてる木々を破壊し、尻尾の直線上にいる逃げてる人の生命を脅かすと判断した誠は真正面からアームドギアで受け止める。
当然ながら体重を乗せて繰り出された一撃は軽くなく、受け止めた瞬間に地面が陥没する。
「ッ、う、ぐッ！」
地面に足をめり込ませながら、誠は歯を食いしばって受け止める。
そしてタダでは攻めさせない。
瞬間的にアームドギアに多量のフォニックゲインを叩き込む。
ギュルンギュルンと赤黒いエネルギーが走る。
「ッ・・・うおおおおお！」
受け止めてノイズの尻尾を真上に勝ち上げ、圧縮したエネルギーを大型にぶつける。
――ＧＲＡＭ∞ＺＡＭＢＡ
ゴパッ！と空間を抉る音と共に大型ノイズが塵も残さず消える。
黒い炎は絶えず誠の内側で黒々と燃え盛る。それを内側に抑えつつ、アームドギアを戻し少しだけ荒くなる息を整えつつ、空に上がる。
網膜に映されたデータを見つつ飛んでいると、前方から鳥型ノイズ

が群れをなして襲い掛かる。
ギュルンという音が微かに聞こえると共に、マシンガンめいた速度で高速で誠に向かってそれが飛来する。
「だりゃぁッ！」
誠は空中で動きを止め、両手に炎を纏わせ、それを出鱈目に振るう。
技なんて大それた物ではなく、ただ両手が高速でブレ、弾丸に変わったノイズを絶命させるに至る拳の一撃。
高速で飛来する弾丸の軌道を予測、ギアによって強化された動体視力でノイズの動きを見切り、掴んでは燃やし、殴っては燃やしと繰り返し、ノイズを確実に絶命させる。
弾丸に変わったノイズを全て捌きると同時に指先を伸ばし、ブン！と音を立てて大振りに横一線。
振るわれた指先からは炎刃が発生、残った鳥型ノイズを上半分、下半分に綺麗に溶断する。
（残りのノイズは――）
寂れた廃工場の近く、ぐるりと囲んでるノイズの姿と2人の女の子の姿を捉えると共に聴き慣れた声が聞こえる。
「だから絶対に・・・絶対に、諦めないッ！諦めて、やるもんかぁぁぁぁッ!!」
（この声――間に合え！）
思考は一瞬、背中のブースターを全力で蒸せ、声の主である立花響の前に着地する。
「黒い、騎士・・・？」
驚いた声が聞こえると同時に、誠は左手を振るい、手早くそれでいて全力の炎を走らせる。
走った炎は響たちを燃やさず、背後から飛びかかるノイズのみを燃やす。
次に右手に炎の頭上に打ち上げる。
打ち上げられた炎がある程度の高さまで飛び、Uターン、そこから細かく分裂し、見た目はさながらスコールの如く、残ってるノイズを余すことなく燃やし尽くす。

耳に付けたインカムからノイズの反応が消失したと聞こえる。
チラリと後ろを振り返る。
少し土汚れてはいるものの、特に怪我のない響たちの姿がそこにはあった。
響たちが無事なのを確認し、小さくほっと息をついていると、二課から通信が入る。
『付近のノイズの反応消失、次は翼ちゃんのいる北東部に向かって』
声でばれると行けないと思いつつコクリと頷き、２人から離れてから飛び上がり、通信でヘリを呼ぶ。
「ひび・・・民間人の保護をお願いします」
『あいよ、直ぐに向かう』
目的地を眼前に捉え、人とノイズの間に着地すると同時に背中の翼を両手剣に切り替え、向かってくるノイズらを切り裂く。
（次ッ！）
右手を掲げて炎の剣と槍を展開、前方に向かって一気に射出。
――ＳＴＡＲＤＵＳＴ∞ＦＯＴＯＮ
ノイズの反応速度を超えて射出された炎剣と炎槍は、ノイズの体を貫き燃やし、数秒足らずで炭素の塊に変わる。
同時にインカムから友里あおいの声が入る。
『付近のノイズの反応消失、次は翼ちゃんのいる北東部に向かって』
「了解です」
ガチャンとアームドギアを背中に戻し、空へと飛び上がる。
相も変わらず辺りには助けて、辛い、痛い、などと言った悲鳴が、嫌なぐらいにはっきりと聞こえる。
痛いぐらいに空の両手を握りしめ、誠は翼のいる北東部へ飛んで行く。

「――ッ！」
ダン！と力強く地面を蹴り、一気に加速を付けて、自身を囲んでいたノイズらを縦に横にと切り裂いていく。
ノイズが炭素の塊に変わると同時に、横に飛んで上から飛んできた鳥型ノイズの攻撃を避ける。
「――♪！」
――蒼ノ一閃
そのまま返す刀で、横一閃に蒼ノ一閃を放ち、翼に迫ってくるノイズ諸共切り裂く。
荒くなる息を整え、さらに踏み込む。
（ノイズの数が多いッ・・・それでもッ！）
剣を元のサイズに戻し、呼吸を整え地を駆ける。
それはさながら青い閃光のごとく、切られたノイズは炭屑に変わる。
耳に付けたインカムから弦十郎の声が入る。
『後1分ほどで誠くんが到着する！翼はそこでノイズを足止め。2人で連携してノイズを・・・』
（彼がここに・・・）
「いえ、コレぐらい1人で十分ですッ！」
『翼！』
彼が居なくたって問題ない、とばかりに通信を切り、さらに地面を蹴り込み加速、4車線程を埋めるノイズに真っ正面から立ち向かう。
――千ノ落涙
空間に多量の剣が出現、それを上空から一気に放ち、広範囲に降り注ぐ。
残り7割。
（次・・・！）
――逆羅刹
逆立ちと同時に脚部のブレードを展開、そのまま横回転しノイズを切り裂く。

（・・・！アレは！）
ノイズの数が残りが5割程になると、翼を囲んでいたノイズらが一箇所に集まり、不定形からハリネズミのような姿に変わる。
「――――!!」
櫻井了子により、ハリネズミ型と呼称される大型ノイズが叫び声のような雄叫びを上げる。
先手必勝とばかりに顔面に向かって蒼ノ一閃を放つ。
何時もより多めのフォニックゲインを込めて放たれた蒼色の斬撃だが、ハリネズミ型は巨大な腕部で斬撃を防き、カン！と甲高い音を立てて防がれる。
目立った傷は無く、ほぼノーダメージと言ったところか。
（やはり相手の装甲が硬くなってる。しかも――！）
ダン！てハリネズミ型が巨大に見合わぬ速さで距離を埋め、翼の体を優に超える大きな爪を振るう。
（早い！）
まともにかち合えばいくら翼とてタダではすまない。
バックステップで爪の射程から避けつつ、ノーモーションで上空から千ノ落涙を放つ。
これで少しは気が逸れるか、そう思ったが、
「――――！」
まどろっこしいと言わんばかりにハリネズミ型が背中の針を、まるでミサイルか何かのように何十、何百と一気に飛ばす。
それが千ノ落涙とぶつかり、派手な爆発を起こす。
「くッ！」
爆風で吹っ飛ばされないように体を伏せる。
そのせいで一瞬だけ翼の動きが止まる。
その隙を敵は見逃さないとばかりに土煙の中から爪を振るう。
（！しまっ・・・）
爆風で動けない翼に対し、これ以上ないタイミングで敵は攻撃をねじ込む。
この状態から避ける術など無く、出来る事など、アームドギアで防

御することだけだ。
そして翼が防御の姿勢を取ると同時、眼前に白い爪が差し迫り、防御の上から翼の体を貫かんとする。
そして数秒後に迫る衝撃は――――

「させるかぁぁぁぁ！」
「！」
最高のタイミングで放たれた攻撃は最高のタイミングで防がれる。
誰が防いだか、なんてのは声で察せれる。黒然誠だ。
誠の声が聞こえると同時に、ガキン！と音を立てて爪が翼から逸れ、地面に深々と埋まる。
「今です！」
「ッ！」
フォニックゲインをアームドギアに叩き込むと同時に空中に投擲、それと同時に翼も空に飛び上がる。
投擲されたアームドギアは翼の身長を優に超える大きさまで変化。
剣の照準がハリネズミ型に合わせると、翼は脚部のブースターを点火、柄の部分を全力で蹴る。
――天ノ逆鱗
放たれた大剣は、爪が地面に突き刺さって避けれないアルマジロ型を容易く貫き、次の瞬間、爆音と共に爆発。
パラパラとアルマジロ型の残骸が降り注ぐ。
今ので全てのノイズ反応が全て消失と、インカムから聞こえる。
柔らかく地面に着地し、元のサイズに刀を戻す。
（倒せはした。倒せは、したが・・・。あの時、来なければ私は・・・）
「翼さん！」
「・・・」
後ろから声をかけられる。

チラリと見れば、ギアを纏った誠がこちらに駆け寄ってくる。
全体が黒一色の装甲、バイザーが赤い色なのを除けば、他の色なんてない全く無い漆黒の鎧。
背中に背負う翼兼アームドギアはまるで竜の翼を思わせる。
どこをどう見たって、奏の使ったガングニールとは似ても似つかない筈なのに、こちらに伝わる力は、奏の使ったガングニールと全く同一の物。
出来る事なら見たくは無い、そんな思いを抱きつつもポーカーフェイスで平静を装いながら足を止め振り向く。
「・・・何かしら」
「今日から二課で一緒に戦うので、挨拶を、と」
「・・・そう、よろしく」
翼は、誠が喋るたびに膨れ上がる嫌な気持ちを必死に抑え、軽く挨拶を済ませ、本部に帰還しようと後ろを振り向き――
「翼さんからしたら、まだ未熟ですが。精一杯『奏さんの代わり』になれるよう頑張りますッ！」
「――――」
『奏さんの代わり』
そう聞こえた瞬間、自身の中で膨れ上がった気持ちが破裂するのと同時に、ピタッと、その場で足を止める。
「――そうね」
「・・・ッ！」
翼はクルリと振り返り、誠と目が合わせる。
妖艶で、刀のように鋭い危うい眼差しを向けられた誠は思わず息を呑み、無意識的に一歩下がっていた。
「貴方、私と戦いましょう」
「・・・へっ？」
一体なんの冗談？と誠は思うと同時に翼はアームドギアを生成、それを誠に向ける。
さらにそれが自分の首筋に向けられてるのを見るに、それが冗談でもなんでもなく、本気で戦うのだと、誠は嫌でも分かってしまう。

冷静さを失っている今の翼に殺意は無く、心を支配するは彼に対する敵意のみ。
一度でも彼が戦闘の構えを取れば、躊躇はしない。一瞬の間に天ノ逆鱗を放つだろう。
「構えて、そして抜きなさい奏のガングニールを。その無双の一振りを！」
「な、なんでいきなり？第一、俺と翼さんが戦う意味なんて・・・」
「貴方に無くても私にはある！――構える気がないなら、いやでも抜かせてあげるッ！」
瞬間、ぞわりとうなじの辺りが逆立つのを感じると同時に、誠はブースターを全力で蒸せ横に飛ぶ。
――千ノ落涙
次の瞬間、先ほどまで自身がいた場所に短刀の雨が降り注ぐ。
（問答無用かよッ・・・！？）
「よそ見してる場合！」
「――ッ！？」
背後から翼の声が聞こえてくると同時に誠は身を屈み回避、さらにブースターを蒸せながら地に足を付けて走ってその場から退避する。
翼が逃げた誠を追い、誠は翼から全力で距離を取る。
ひたすらに逃げの姿勢を変えず、一向に戦う気を見せない誠の姿に、翼はギリッと歯噛み。片手に短刀を生成し、それを誠に向けて投擲。
「ぐっ・・・！」
誠はその場で止まって裏拳気味に短刀を弾く。
その一瞬の隙に翼は剣を上空に投げると同時に飛び上がる。
フォニックゲインにより強化された巨大なアームドギアが足を止めた誠に向けて放たれる。
――天ノ逆鱗
上空から巨大な剣が迫る。
翼の狙い通り、それは誠に命の危険を実感させる物だ。
「ッ！」

しかし、天ノ逆鱗を放つ彼女の思惑に誤算があるとするならば、誠が最後まで翼には向けてアームドギアを引き抜かなかった事と、
「はぁぁぁぁぁ！」
騒ぎを聞きつけてここまで駆けつける人の想定をしてなかった事だ。
「弦十郎さん!?」
「なっ・・・!?」
突然現れたとしか言いようがない弦十郎が誠を庇うように前に出る。
ダン！と弦十郎が地面を力強く踏み込み、振るわれた拳は天ノ逆鱗と衝突。拳と剣、一瞬の拮抗、天秤が傾いたのは弦十郎の拳だった。
その衝撃で道路の下を通る水道管が破裂、降ってきた水が3人を濡らす。
「くっ・・・！」
天ノ逆鱗を防がれた翼はバランスを崩したが、なんとか倒れずに地面に着地し、叔父様・・・と小さく呟いた。
「さて、2人とも話を聞かせてもらおうか？」
ふー、と呼吸を整えつつ、2人の間に割って入った弦十郎がそう聞いてくる。
誠は少しほっとした顔をし、それに対して翼は、少しだけ冷静さを取り戻し、自身がやったことを自覚し、纏ったギアを解除し顔伏せる。
翼がギアを解除したのに続き、誠もギアを解除する。
「らしくないぞ翼、力任せに打つのは・・・！翼、お前泣いて・・・」
「泣いてなどをいません！」
気づいた弦十郎が指摘すると同時に翼は否定し、未だ収まらない激情を瞳に宿し、誠を睨みつける。
「黒然誠、貴方は奏の代わりと言ったわね！奏の代わりなんてどこにも居ない！奏の代わりになんて、誰にもなれない！」
「！」
「奏の代わり？よくもまぁ簡単に言えるじゃない。ＬｉＮＫＥＲを使わずにギアを使える自分なら、代わりなんて簡単に出来るとでも言い

たいの!?」
「ち、ちが、そんなつもりじゃ・・・!?」
翼は誠に詰め寄り、胸ぐらを掴む。
――掴むその手は微かに震えていた。
「幸運と奇跡でギアが使える貴方と、血反吐吐いてようやく手に入れた奏の代わりに貴方がなれるとでも!?――――貴方を受け入れて、共に戦う事など、風鳴翼が許せる筈がない・・・ッ!」
誠を後ろに押しやり、距離を取る。誠はされるがままそのまま尻餅をつき、翼はその場を後にする。
その去り際、翼の目から一筋の涙が見えた。
(翼さん、泣いてた・・・?)

第21話

ズーンと暗いオーラを出しながら、誠はやっちまった・・・と小さく呟き、二課休憩所のイスに座って項垂れ、弦十郎はどうしたものかと顎髭をさすりながら悩んでいた。

（・・・ふむ）

弦十郎は翼の言っていた事、そして誠が言っていたことを思い返し、ここでふと思いつき、それを口にする。

「誠くん。君は奏の代わりになりたいのか？」

「え？」

俯いてた顔を上げ、誠は揺れる視線で弦十郎を見る。

翼が誠にあそこまで激怒した理由は、奏の代わりになる、と言った部分がある。

なればこそ、そこだけはハッキリとさせないと行けないのだ。良し悪し含めて、だ。

「君は、天羽奏の代わりになりたいのか？君が、天羽奏になりたいのか？」

「――」

「今ここで、君の意思を聞きたい。その答え次第で、俺も腹を括ろう」

弦十郎の言葉に誠は俯き、弦十郎からは誠の表情は見えない。だが、目に見えて暗いオーラのような物は消えるのが分かる。

そして数分後、誠はなにかの覚悟を決め、顔を上げ、弦十郎と目を合わす。

先程まで揺れてた視線が、しっかりとした芯をもって真っ直ぐな物に変わっていた。

「俺は――」

そして、弦十郎はその言葉を聞いて、満足そうに頷いた。

――――――――――――

土曜日の朝。1週間ほど前から始めたトレーニングを兼ねたランニング。タッタッタと走る音をＢＧＭに考えるのはあの日の事ばかり。

――――翼さんとの騒動から今日で1週間程が経過。

あの日の夜以降、二課内で翼さんとは一回も顔を合わせていない。学校や二課には行ってるようだが、職員の人たちともあまり顔を合わせていないようだ。

それこそ、叔父である弦十郎さんやマネージャーの緒川さん、同性である了姉や友里さんたちとも顔を合わせないほどの徹底ぶりだ。

（なんであんな目に見える地雷を踏み抜いたんだ俺よ。俺の口よ、もうちょい回ってくれ）

なんて思いつつも、無い物ねだりした所で意味は無い。

空を見上げて、小さな暗いため息を吐きそうになるが、覚悟を決めたんだ、と気持ちを奮い立たせ、吐き出しかけてた暗いため息を飲み込み、気持ちを切り替えるように、走るスピードを早め、次に思い出すのは、二課内で聞いた奏さんの事だった。

「奏ちゃん？強かったわよ、そりゃもうめちゃくちゃに、ね。あの時を除けば、実戦でこれと言う決定的な『敗北』なんてのは無いんじゃないかしらね」

奏さんの事は『ツヴァイウィングの天羽奏』しか俺は知らない。故にまず出来る事は『ツヴァイウィングの天羽奏』では無く、『天羽奏』と言う一個人を知ることからだった。

「翼ちゃんと奏ちゃんの関係？頭の方に唯一無二が付くほどの大親友、と言っても過言では無いわね」

了姉に限らず色んな人たちに奏さんの事を聞いてみた。

「奏の嬢ちゃん事か？そうだな・・・言っちゃあアレだが、最初見た時は手負いの獣を連想させたなありゃあ」

手負いの獣？と頭に疑問符を浮かべていると、それを聞いてた友里さんが、パソコンから、とある資料を見せてもらった。

二課にある実験室を独房代わりにし、およそ日本では見ないような拘束具を付けた天羽奏の姿。
しかし、画面の向こうで見てた奏の、人を元気付ける笑顔はそこに無い。
『この拘束具を外せ！このクソったれ野郎ども！』
ロクに寝れてないのか、目の下の隈は濃く、拘束具を付けられて尚暴れるその姿は、森近の言った通り、近づくものはなんでアレ、その全てを壊しかねない程の、手負いの獣（天羽奏）がそこに居た。
その周りを取り囲むは、二課のエージェントに、研究班や前線部隊の十数名、その中には弦十郎や了子、そしてまだ幼さの残る風鳴翼の姿があった。
『お前ら、ノイズを殺せる方法を知ってるんだろ!?実験体だろうが試作品だって構わない！あたしの、この手で――ノイズを殺させろッ！』
過去の映像とは言え、ドス黒い憎悪の感情が、肌にピリピリと伝わってくる。
――これが本当に、あの奏さんなのだろうか？
映像の中では、幼い翼が了子の後ろに隠れ、チラリとそれを見た奏は興味を失ったように視線を巡らせ、その視線は弦十郎に向けられる。
『・・・ノイズの事は、俺たち二課に任せてくれ。各分野の選りすぐりのメンバーに、最先端の技術と最高のメンバーを揃えている。だから安心しろ、君の家族の仇は俺たちが――』
『ふざけた事抜かすなよオッサンッ！』
膝をつき目線を合わせた弦十郎の眼前に、奏の歯が迫る。
それを顔を少し引いて避ける弦十郎。
拘束具を付けられてなかったら、文字通りの意味で噛み付いていたであろう奏の姿は、誠が知る奏の姿と、似ても似つかない。

一体なにが奏をここまで変えてしまったんだ?そんな誠の疑問を解消させるように、画面の向こう側、過去の奏が口を開く。
『あたしはノイズを倒してほしいんじゃ無いッ!ノイズが滅びればそれで良いんじゃ無いッ!あたしが・・・あたしのこの手で家族を殺したノイズ共をぶち殺して、ザマァみろ!って言いながら、そいつら全員地獄に叩き落とさなきゃいけないんだよッ!?』
その眼には、歪んだ覚悟とノイズへの憎悪だけ。
『家族の仇を取って欲しいんじゃないッ!家族の仇が取りたいんだよッ!』
『――――――』
弦十郎はここで奏を説得し、平和な日常に返したいと思っている。
それは弦十郎のみならず、この場にいる面々がそう思った。
だがしかし、彼女の目を見てしまった弦十郎は察してしまった。
今の彼女には、平和な世界を自分の居場所とすることが出来ないのだと。
(この子は・・・いや、しかし・・・)
弦十郎は迷う。
1人の大人として、子供が地獄の道を進む事をみすみす見過ごして良いのだろうか?
1人の人間として、彼女の覚悟を踏み躙ってしまっても良いのか?
復讐を止めさせ、彼女を平和な日常に置くのが正しいのか?
どれが正解なんて分かる訳なく、常識的な選択に甘えることすら許されない。
天羽奏に残った物は、ノイズに対する復讐だけだ。
それが無くなってしまっては、絶望し自らの命を断ってしまう可能性だってある。
・・・もしもの話だが、弦十郎たちが戦う力(シンフォギア)を与えなければ、最悪彼女は素手でノイズに立ち向かい、そのまま死んでしまう可能性も考えられる。
そんな悲劇を想像させるぐらいに、彼女の瞳は黒々と燃えていた。
数秒か、あるいは数十分か、弦十郎は決断する。

『――そうだな』
再度彼女も目線を合わせる弦十郎。
『地獄に落ちる覚悟はあるか？』
『当たり前だッ！アイツらを殺せるなら、アタシは喜んで地獄に落ちてやるよッ！』
彼女の変わらぬ覚悟を聞き、弦十郎はこの現実に歯噛みし自身の力の無さを痛感し、彼女の復讐を受け入れる。
彼女の復讐を肯定し、彼女を1人にするという選択肢を捨てる。
優しく弦十郎は奏の頭を優しく撫で、抱きしめる。
『――』
弦十郎に優しく抱きしめられた奏は、先程のように暴れる様子は無い。
『平凡な暮らしを望むならそれで良い。復讐の道を進むなら止めはしない。人を守るためならこの力、幾らでも貸そう』
彼が望むのは、子供の幸せ。平和な日常よままま、子供が大人になれる未来（明日）。
『君が幸せになれるのなら、どれを選んだって構わない。君の未来（明日）は俺が、俺たちが死んでも守ろう。――だから、これからは大人を頼れ、どんな時でも、君はひとりじゃないんだ』
少女を抱きしめる彼の姿は、これからずっと変わることは無いだろう。

ザザッと映像が切り替わる。
時間は飛び、場所は二課の実験室。
カランカランと奏の手から何か薬が入ってた注射器が落ちると同時に、奏が血を吐き、周りの研究者たちはドタバタと慌ただしく走り回る。
二課内で最も危険で、最も効果の高い実験、聖遺物と人体を繋ぐための補助薬、ＬｉＮＫＥＲを用いた実験に彼女は志願し、その結果、血を吐き出した。

『急激なバイタル低下を確認！』
『了子くん！』
『分かってるわ！救護班、急いで気道確保！血が気管に詰まったら死ぬわよ！』
『中和剤は!?』
『気道確保チューブ持ってきました！』
　大量の出血を伴う多種多様な体の不具合と、純粋に体の中身が失われていくことによる生命へのダメージで、立って居ることすら難しい程だ。
　だが、奏は折れず。震える足で、視界は霞み、力が入らぬ体でなお立ち続ける。
　耳元に近づく死神の足音を聞きながら。
（くっそ・・・ここまで、か・・・）
　体が弱れば自然と心も弱くなる。
　意識は朦朧とし、体からは力が抜けていく。
　死神が奏の命を、生と死の境界線の向こう側に連れて行こうとする。
（・・・家族は全員死んじまった。アタシが死んだって誰も――）
　ドタバタと走り回る音が遠くなっていき、ついにはその膝が折れる――その瞬間、
『頑張れ！』
　自分を励ます声が聞こえた。
（――――）
　奏の耳に届く、いくつかの声。
　弦十郎の身を案ずる声、了子の気をしっかり持てという声、研究員たちの声、その全てを切り裂き、『頑張れ』と励ます声が聞こえる。
　奏が前を向けば、実験室の窓の向こう、周りが実験を止めようとする中、ただ1人奏を応援する翼の姿があった。
『ここで終わるつもりなの？ここで死んだら何が残るの!?』
　翼には奏の復讐の事は分からない。いい子の翼には、その復讐心が分からない。分からないが、それでも翼は天羽奏に生きてほしいと願

う。
その頑張りが、いつか彼女を復讐以外の道を歩んで欲しいから。
『こんな所で、こんな形で死なないで！生きて・・・生きて成すべき事を思い出して！だって生きてれば、生きていれば必ず、誰だって幸せになれるんだからッ！』
泣きそうな顔で生きろと言い、生きてと願いながら、翼は叫ぶ。
（・・・あぁ、もう、そんな顔するなよ）
ギリッと歯を食いしばり、自分を助け起こそうとする大人たちを振り切り、ブチリ、と首にかけてたペンダントを引きちぎり、それを握ったまま頭上に掲げ、残った片手でＬｉＮＫＥＲの入った予備の注射器を手に取り、首筋に刺し、そして叫ぶ。
『うおぉぉぉぉぉぉッ！』
発する声に力が乗っていき、奏の思いに槍が応える。
『Ｃｒｏｉｔｚａｌ（人と死）ｒｏｎｚｅｌｌ（しても）Ｇｕｎｇｎｉｒ（戦士と生き）ｚｉｚｚ（る）』
聖詠を口ずさむ。瞬間、奏に向けられてた計測器が異常な数値を叩き出す。
『第一段階、第二段階、第三段階突破、適合係数・・・適合ラインを突破！』
『コレはまさか・・・！気力だけで限界を超え、ガングニールがそれに答えたと言うのか！』
ペンダントが分解され、光が奏の体を包み込む。
天羽奏は、ガングニールに選ばれたのだ。
『コレが、アタシの力・・・アイツらを殺す為の、アタシだけの、絶対的な力だッ！』
あまり手入れはされてなくボサボサの赤い髪とオレンジ色の服色は燃え盛る炎のようだ。
視線を下に移していくと、次第にオレンジ色から黒色に変わっていき、見た人に燃え尽きた灰をイメージさせる。
そして、その手に握るは彼女の身長程の大きな槍。
『ガングニール、適合しました！数値、未だに安定してます！』
喜び上がる研究者たちの声を聞き、了子は心の底から賞賛の声を奏

に向ける。
『貴女が世界で2番目、第二種適合者よ。・・・本当におめでとう、天羽奏』
声を出す余裕すら無いのか、皆に向かってただただサムズアップする奏に、了子は拍手するのだった。
――――――――――――――――――――
二課の人たちから俺は奏さんの事を聞いた。
奏さんの強さ、人柄、そしてその生涯。
色んな人たちに聞けば聞くほど、本当に奏さんは凄かったのだと理解していき、そりゃあんなに激怒するよなと言うことに結局はそう行き着く。
――――――――黒然誠は天羽奏では無い。
そんな当たり前の事が、今はとても大きく感じる。
「壁はデカイ、か・・・」
なんて走りながら呟いていると、ブー、ブー、とポケットから音が鳴り響いた。
んっ?と立ち止まり、スマホを見れば了姉からのようだ。
「ハイハイ、どったの了姉?」
『誠、二課に来てちょうだい。緊急の招集よ』
・・・・・・・・・
「巨大な聖遺物が納められた遺跡?」
「そうよ、しかも飛び切りド級のヤバい代物よ」
そんなこんなで了姉に呼ばれ、二課にあるレクリエーションルーム

で開口1番に話すは、聖遺物が収められた遺跡の話。
この場に弦十郎さんと了姉、二課のオペレーターたち、そして翼さんと俺が集められた。
了姉の言葉に俺は首を傾げつつ聞けばそう聞けば、了姉は頷き話を続ける。
「この巨大な聖遺物の正体は『ゴーレム』と呼ばれる人型に近い兵器のことよ」
「ゴーレム?」
「ゴーレムって言うのは先史文明が残した完全聖遺物の総称と言ったところかしらね」
ピッと、端末を弄ればモニターの映像が切り替わる。
そこに映るは遠くから撮影されたであろう、女性の形をした巨大な氷像だ。
大きさは大体10mほどだろうか?無機物でありながら、美しい女性を思わせる扇情的な形を描き、けれでも所々の造形は清楚な女性を思わせる不思議な作りだ。
更にその体には女王を思わせる白色のドレスを着込み、頭とドレスには氷の剣を象った飾りが付いている。
芸術に疎い俺でも、キレイだと感じた。
「キレイ・・・」
「ええそうね。けれども、キレイなモノが無害とは限らないわよ?――このゴーレムの名はリリティア、遺跡に書かれてた文献によれば、低温を操るゴーレムで、別名『氷の女王』『霧氷大后』とも呼ばれるわね。これ一騎の出力は現在二課で運用してるシンフォギアの4~5倍以上出力を誇るわね」
「4~5倍以上・・・流石先史文明、デタラメですね」
友里さんの言葉に了姉も呆れたように、でしょ?と答える。
仮にそんなモノが世の中の悪人の手に渡ってしまうと考えると背筋にゾワリとしたモノを感じる。
嫌な想像をし軽く身震いしてると了姉から弦十郎さんに話しが変わる。

「さて、こっから本題だ。今日皆に集まってもらったのは他でも無い。このゴーレム『リリティア』を二課で確保しろとの事だ。現地には翼と誠くん、友里くん、森近を向かわせる。上手くいけば日帰りで済む、ぐらいの気持ちで頼んだ。それとだが、遺跡付近の温度が例年より10℃を下回っているらしい、各自上着の用意などを忘れずに」
「分かりました」
「・・・了解です。それでは準備が出来次第向かいます」
翼さんは話はこれで終わりだと言わんばかりに部屋を後にし、一瞬だけ俺と目が合うと直ぐに目を逸らし、部屋を後にする。
相変わらず嫌われてるがコレばっかりは仕方ない。
「・・・さて、俺も準備するか」
あんまり遺跡が寒く無いといいが・・・。

第22話

二課の車を一台借り、その荷台に翼さんのバイク乗せ、俺たちは件の遺跡へと向かう。
運転席には森近さん、助手席に翼さん、後ろの席には友里さんと俺が座る。
現地の遺跡から送られてきた位置情報を下に車は目的地に向かって走り出す。
二課は結構道の面で優遇されてるらしく、専用の抜け道が使え、有事の際には緊急車両として扱える、と隣で友里さんが教えてくれた。
へー、と感心した声を出しつつ、視線を外に移すと、外では何かが舞って落ちている、アレは・・・
「・・・雪？」
「むっ、積もらなきゃいいんだがな」
「でも、これぐらいなら強さなら積もらないかと」
だと言いがな・・・と森近さんは車を走らせる。

・
・　・　・
・

「ッ、寒っ・・・」
車のドアの隙間から入ってきた空気がチクリと肌に突き刺さるのと同時に持ってきた上着のチャックを1番上まで閉める。
「確かに、まだ4月の半ばってのに、この寒さはちと変だなぁ・・・。それに・・・」
森近さんは空を見上げ、顎髭を摩る。
俺もつられて上を見れば、空は雲一つ無い快晴だ。
だが視線を戻せば、道は凍り、植物は凍り、道端には凍った野良猫

の死体が転がり、更には駐車場の隣にある池は完全に凍りつき、ありとあらゆる物が凍りついている。
太陽の暖かい陽の光は当たり一面に降り注いでいる筈なのに、地上は一向に暖かくない。
快晴の空に似つかわしくない凍りつく世界に不気味さを覚える。
「何、この光景・・・？」
「・・・早く行きましょう」
早足で遺跡に向けて歩き出す。
歩く事数分、遺跡入り口の仮設テント前で屯する１０数名の聖遺物探索チームの中から、隊長と思われる人がコチラに気付いて歩み寄るがいた。
「皆さんこっちですよ」
「お疲れさん。んで、現状の状況は？」
森近さんが労をねぎらうと、隊長さんが手早く状況を説明してくれる。
「現状この遺跡の最深部まで特に苦労なく進み、その最深部でゴーレム『リリティア』を発見しました。ですがそのリリティアに枷のような鎖が付いてまして」
「鎖、ですか？」
友里さんがそう言えばノートパソコンを開き、１枚の写真を見せる。
よく見ればリリティアの腕と足の部分に氷のような素材で作られた枷が付けられ、先端部分が地面に突き刺さっている。
聞けばどうにもこの遺跡と鎖は先史文明で作られた特殊な金属で出来てるらしく、通常の器具では歯が立たないようだ。
「この鎖のせいで遺跡上部から大穴からリリティアを運べず、さらに言わせてもらいますと、リリティアの周囲一帯の気温は０℃を下回り、通常の作業は困難を極めます。そこで――」
「シンフォギアの登場って訳か、成る程な。確かに寒さ程度ならギアのバリアフィールドでどーにかなるしな。そう言うことで、行けるか２人とも？」

耳にインカムを付けつつハイと返事をして、俺たちは遺跡内部のマップを片手に隊長さん先導の元、遺跡を案内される。
遺跡内部は外部より温度はより低くなり、底冷えする寒さだ。
吐く息は気温相応に白くなり、冷気は体中に突き刺さり、寒いを通り越して痛い。
さらに内部は所々凍っていて、最深部に進めば進むほど、凍ってる比率がドンドンと高くなっていく。
滑らぬように歩く事数分、目的の最深部、その手前の扉まで辿り着く。
「この先にゴーレム『リリティア』が・・・」
「写真で見たと思いますけど、実際に見るとため息が出るくらいキレイですよ」
「そんなにですが？ちょっと楽しみですね」
「・・・貴方ね、遊びに来た訳じゃないのよ」
ズバッと鋭い視線と共に、翼さんから注意を受けてしまう。
分かってますよと言えば、本当かしらね？とあまり信用して無い感じに翼さんの無言の視線を感じる。
小さく肩をすくめつつ、隊長さんは扉を開けて中へと進み、俺たちもその後をついていき、リリティアのいる部屋へと足を踏み入れる――瞬間、ピシリと何かが割れる音が聞こえた。

熱源を五つ感知　――熱源から奏者及び■■■の反応を二つ検知。
システムをスリープモードから戦闘モードに切り替えます。
次のプログラムを実行しようとしています。
G：LILITEA実行を許可しますか？　＜Y／N＞――――
――［Y］

システムＬＩＬＩＴＥＡ機動します。

ピシリと何かが割れる音が聞こえる。
なんだ？と思う間もなくその瞬間、地面が揺れる。
立って居られないほど、と言うわけでは無いが
森近さんが、全員伏せろ！と言うと同時に、その場の全員姿勢を低くする。
「っ！アレは⁉」
友里さんが驚いた声を出すのと同時に音の発信源に視線を向ける。
視線の先にはリリティア、ただし写真で見た鎖のような物は外れていて、視線は此方を見ている、ように見える。
そして、コレは何となくだが・・・あのリリティア、俺を見てないか？
「――――――」
無言、無音、されども何かの意思を感じさせる音を立てて、リリティアは片手を上に掲げる。
うなじの辺りがピリリリと感じると同時に聖詠を歌う。
「ｂｅｅｔ　ｕｐ　ｇｒａｍ　ｔｒｏｎ」
「羽撃きは鋭く、風切る如く」（Imyuteus amenohabakiri tron）
１秒とかからずに変身完了、生成と同時に射出された氷の槍を、俺は炎の槍で、翼さんはアームドギアで、それぞれ迎撃する。

氷の槍と炎の槍、相反する二つが真正面から衝突し、相殺。蒸発された氷の槍は白い気体となり、霧となって視界を覆う。
「っ・・・森近さんたちは⁉」
『もう部屋から徹底済みよ！後はお願い２人とも！』
ピピっと耳に付けてたインカムから友里の声が聞こえる。

幸いと言うべきか、他の3人は入り口に近い所にいたお陰で、直ぐにその場から避難出来た。
「ッ！」
背中のブースターを吹かせると同時にリリティアの正面、ではなく背後に移動、それと同時に炎を爆発させ、リリティアに向かって拳を振るう。
だが、突如として背後に出現した氷の盾によって防がれる。
［絶刀・天羽々斬］
「硬っ・・・！」
「――――――♪！」
――蒼ノ一閃
歌いながら、飛び上がった翼がリリティアの側面に向かって蒼ノ一閃を放つ。
だがしかし、リリティアに向かって放たれた蒼ノ一閃は徐々に勢いを失っていき、勢いを無くした青色の刃は凍りつき、砕け散る。
なっ・・・!?と翼さんが驚くと同時にリリティアが巨大な氷の剣を生成し、それが1人でに動き横に振るわれる。
そのスピードは早くは無いが、とにかくデカい。まともに受ければタダでは済まないであろう。
故に2人は回避に移る。
誠はブースターを吹かせ後方に、翼も持ち前の機動力で後方に、それぞれ回避する。
ブォン！と振るわれた氷剣を避け、2人は同時に反撃に出るためな前に出る――その瞬間、振るわれた氷剣の刃から何かが射出されるのが微かに見えた。
「っ!?」
氷剣を避け、近づこうとした2人に向かって放たれたのは数千発の氷の刃だ。
音速で放たれたそれは、たったの一発ですら鉄板を軽く打ち抜く破壊力をもち、ダメ押しとばかりに、透き通った氷のように見えづらいと言う極悪性能を持ったものだ。

広範囲に射出された氷の刃は２人に逃げ場を与えず、やむなく２人はその場で迎撃する。
誠は炎を纏わせた両手を出鱈目に振るい、翼はアームドギアで、それぞれ氷の刃を迎撃する。
２人の前の空間が透明な炸裂によって何度も弾けていく。
「っ・・・今っ！」
そして氷の刃が止まった瞬間を逃さず、両手に炎を圧縮、それを槍の形に変え、リリティアの正面に炎槍を１０本生成、まずは半分放つ。
ガキン！と音を立て、炎槍が氷の盾に防がれ、視界を白い霧が覆い、残りの炎槍をリリティア、ではなくてリリティアの足元に放ち、足場を崩す。
グラリとリリティアが体制を崩れ、そこを逃さずブースターを吹かせ、リリティアの背後に移動、背中のブースターをアームドギアに切り替え、瞬間的にフォニックゲインを叩き込み、チャキリと肩に乗せ、横に振り下ろす。
――ＧＲＡＭ∞ＺＡＭＢＡ
「――――♪！！」
さらに、それと同時にリリティアの背後に飛び上がった翼はフォニックゲインをアームドギアに叩き込む。
――天ノ逆鱗
巨大化したアームドギアをリリティアの背後から見舞う。
正面からは誠のＧＲＡＭ∞ＺＡＭＢＡ、背後からは翼の天ノ逆鱗。
この一撃なら仮に止められたとしても、防いだ上で打ち抜ける、そう確信を持って２人は今放てる必殺の一撃を放つ。
――やれる
その確信をもって２人はアームドギアを振るう。
そして数秒の後、２人の渾身の一撃はリリティアに直撃する。

遺跡からリリティアが見つかる少し前の事だ。

「起きなさいリリティア」
聞こえてきた変わらぬ冷たい声に、数千、数万年の時を経て、リリティアは自身を本機動させる。
リリティアは静かに自身を目覚めさせた者を認識する。
自身を目覚めさせたその名を、主を、リリティアは知っている。
フィーネ・ルン・ヴァレリア。
終わりの名を持つ者。
「奏者と器と戦い、器の中にいる『■■■』に力を付けさせなさい。でももし器が想定より弱かったら・・・仕方ないけど、殺しても構わないわ」
そう言い、フィーネはリリティアにコードを送り、リリティアのシステムをスリープモードにする。
そして、システムがスリープモードに切り替わる刹那、
「あの人の元へ行く為に・・・今度こそ、お願いね、リリティア」
主の願いを聞いた。

リリティアの体から、光が溢れる。
その瞬間、時が止まった。
えっ？と言う言葉はどちらから漏れたのだろうか。
大技を放った2人はまるで時が止まったかのようにピタリと空中で固まって動けなくなり、2人のアームドギアは凍りつき、砕け散る。
（なんっ・・・!?）
完全聖遺物の動きすら止める空間凍結。
リリティアの持つ二つ切り札のうちの一つ、コールドスリープと呼ばれる、概念攻撃。
体を動かせぬ誠に向かってリリティアは氷剣を生成し、横凪に振るう。
（あっ、まず――――）
氷剣が脇腹から当たり、バキッと嫌な音が誠の体の内側から聞こえると同時に、誠は翼のいる方に飛ばされ、そのまま2人揃って壁に叩

きつけられる。
「ガっ・・・!?」
「っぁ・・・!」
動かせない体ではまともに受け身なんて取れるわけもなく、肺から息が漏れる。
コレで終わりにするつもりか、リリティアは、胸の装甲が花のように開き、そこを中心に空間がミシリ、と音を立てて歪む。
リリティアに搭載された最後の切り札。
リリティアの持つコールドスリープを一点集中、それを対象に向けて放つ絶殺の一撃、アブソリュート・ゼロ。
直撃すればギアを纏った2人とて死に至る一撃が振るわれ、戦場に壮絶な爆発音が響き渡る。